NHK幼児向けテレビ番組の変遷

ー『おかあさんといっしょ』から広がった在宅向け幼児番組群 ー

メディア研究部　高橋 浩一郎

要約

1959年，幼児向けテレビ番組『おかあさんといっしょ』は総合テレビで放送を開始した。その3年前の1956年に“学校放送”の一環として，「幼稚園・保育所向け番組」がすでに始まっていたが，“家庭での親子視聴”を想定し，よりエンターテインメント性を重視して開発されたのが『おかあさんといっしょ』だった。

開始当初の『おかあさんといっしょ』は「子どもに最高のものを見せる」という制作哲学を掲げ，当時さまざまな分野で活躍していた外部クリエーターを数多く招き入れ，番組の土台を形成していった。1979年には，視聴ターゲットである幼児の実態を専門家とともに調査・研究する共同プロジェクトを立ち上げ，実証的なデータに基づいて新たなコーナーを数多く開発していった。また，そこで得られた研究成果は以後の幼児番組の制作に生かされていった。1990年以降，イベントなどの二次展開が活発化し，放送番組以外にもさまざまな形で視聴者のニーズに応える体制を整えていった。これらの取り組みの積み重ねが，幼児に“最もよく見られる番組”という近年の評価につながっていると推測される。

1990年には，子ども向け番組を集めて編成する〈母と子のテレビタイム〉ゾーンが教育テレビで新設され，『英語であそぼ』や『いないいないばあっ！』など，それまでになかったテーマの番組が次々と開発されるようになった。これらの新たな在宅向け幼児番組群が発展できたのは，先行番組『おかあさんといっしょ』がさまざまな知見や制作ノウハウを蓄積してきたことによる。〈母と子のテレビタイム〉の番組群は徐々にその数を増やしながら，視聴者の間に定着していった。その背景には，従来把握されていなかった幼児の視聴状況を把握することでターゲットの動向をとらえ，ゾーン編成に反映させるという戦略があった。

『おかあさんといっしょ』の放送開始から60年が経過した現在，NHKの在宅向け幼児番組は多様化した。また，子どもだけでなく，大人も視聴する番組が現れ，幅広い視聴者層を獲得するようになったことで，新たな役割を担うようになっている。

目次

1　はじめに……168
1-1　研究背景
1-2　幼児向け番組の2つの流れ
1-3　研究目的と方法
2　在宅向け幼児番組
『おかあさんといっしょ』の変遷……171
2-1　誕生期から定着期へ（1959年～1960年代）
2-2　低迷期から発展期へ（1970年代～1980年代）
2-3　安定期から変革期へ（1990年代～現在）
3　〈母と子のテレビタイム〉における
新番組開発とゾーンの発展過程……186
3-1　ゾーン新設期（1990年～1995年）
3-2　ゾーン発展期（1996年～2002年）
3-3　ゾーン拡充期（2003年～現在）
3-4　幼保向け番組と在宅向け幼児番組の統合
3-5　〈母と子のテレビタイム〉ゾーン
定着の要因について
4　幼児番組のこれから……209
4-1　幼児番組の役割の変化
4-2　幼児番組が果たしうる役割
4-3　幼児向けのコンテンツ制作
5　まとめにかえて……213
付表……224

1 はじめに

1-1 研究背景

NHK放送文化研究所（以下，文研）で毎年実施している幼児視聴率調査によると，教育テレビ（現・Eテレ）は「2，3歳児に最もよく見られている」チャンネルとして1998年以降評価され続けており，局別週間接触者率は，2012年以降やや減少しているものの，7割程度と，他局と比較すると高い割合で推移している[1)]。これは，1990年に教育テレビで，幼児・子ども向けに新設された〈母と子のテレビタイム（現・Eテレキッズ）〉ゾーンが，視聴者の間に比較的早い時点で定着し，以降も支持され続けてきたことを示している。

2019年現在，〈母と子のテレビタイム〉ゾーンでは，朝と夕方を合わせて合計4時間以上，アニメーションを除くと，およそ14本の幼児・子ども向け番組が毎日放送されているが，ゾーンが始まった1990年当初は，夕方2時間だけの放送で，しかもゾーン内で放送される幼児・子ども番組は2本（再放送などを含むと6本）だけだった。ゾーンの放送時間は，当初の2倍に，新作枠の数は7倍に増加した。

〈母と子のテレビタイム〉が始まった1990年は，教育テレビが“生涯学習チャンネル”として位置づけられた年だった。それまでは学校放送番組を中心に編成されていたが，この年を境にして，次第に“子ども向け・主婦向けなど番組の視聴対象がはっきりしたチャンネル”として視聴者に認識されるようになっていった[2)]。〈母と子のテレビタイム〉は，教育テレビのチャンネルイメージを変えるきっかけの1つになったと言える。

〈母と子のテレビタイム〉ゾーンの番組群は，0歳〜小学校低学年という幅広い年齢層を対象にしているが，その核となるのは，『おかあさんといっしょ』を始めとする，就学前の幼児[3)]を対象とした番組である。本稿では，1990年にゾーンが新設された理由と，視聴者に定着した要因を分析することをねらいの1つとしているが，そのためにまず，放送開始60年を迎えた『おかあさんといっしょ』を軸に，NHK幼児向けテレビ番組の変遷をたどっていく。というのは，〈母と子のテレビタイム〉ゾーンで放送される幼児向け番組のあり方が，『おかあさんといっしょ』に負うところが大きく，ゾーンが定着した要因を探る際に，過去のNHK幼児向け番組の歩みをたどることが，迂遠なようだが，有効だと考えるからである。

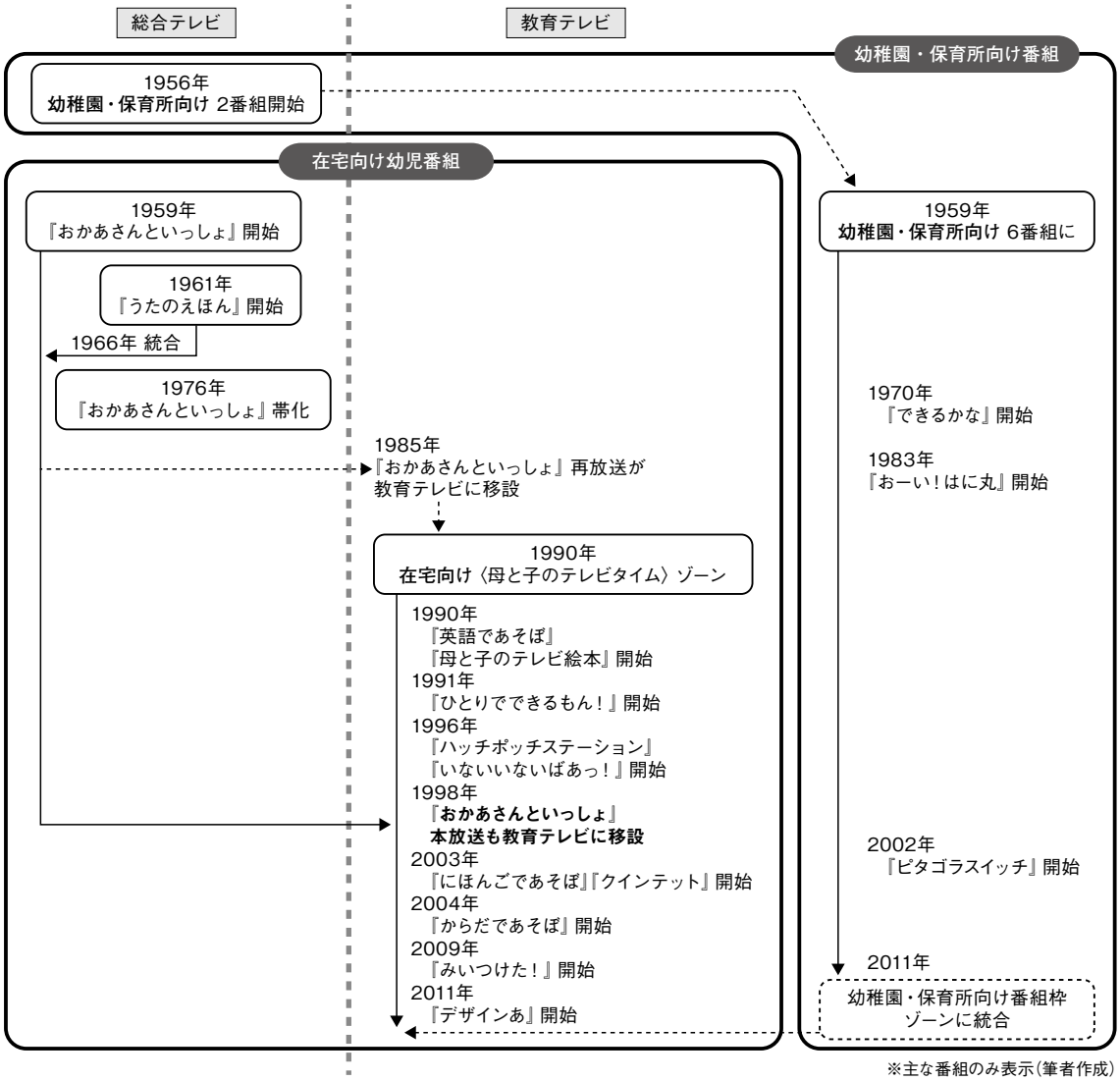
1-2 幼児向け番組の2つの流れ

ここで，NHK幼児向けテレビ番組の定義について確認し，本稿で扱う領域について明確にしておく。NHKでは，幼児向けテレビ番組を，視聴する場所によって，「幼稚園・保育所向け番組（以下，幼保向け番組）」と「家庭視聴を想定した番組（以下，在宅向け幼児番組）」に分け，別のものとして制作してきた。〈母と子のテレビタイム〉ゾーンの番組群は「在宅向け幼児番組」に区分される。

「幼保向け番組」と「在宅向け幼児番組」の関係についてまとめたものが，**図1**である。

「幼保向け番組」の特徴としては，「学校放送」の1つであり，1959年以降は教育テレビで放送されていること，また園での利用を想定しているため，年間スケジュールが事前に策定さ

図1　NHK幼児向けテレビ番組の概要



※主な番組のみ表示（筆者作成）

れ，2008年度までは放送内容を記載するテキストが発行されていた点などが挙げられる。多くの人が知っていると思われる主な幼保向け番組としては，『できるかな』『おーい！はに丸』などがある。

一方，「在宅向け幼児番組」とは，1959年に総合テレビで始まった『おかあさんといっしょ』のことを長年意味していたが，1990年以降は，教育テレビで開始された〈母と子のテレビタイム〉ゾーンでの一連の番組群も含むようになっている。教育的な要素を盛り込みつつも“エンターテインメント性”により重点を置いている点で幼保向け番組と異なっており，基本的に園での利用を前提とせずに制作されているため，放送内容を事前に策定して告知することはない。

「幼保向け番組」については，これまで学校放送の一環として“園での普及，利用実態”や

“番組の変遷”について継続的に調査・研究がされてきた[4]。一方，「在宅向け幼児番組」についてまとめた論考は少ない[5]。本稿では，これまで体系的に論じられることがなかった「在宅向け幼児番組」に焦点を当てる。

1-3 研究目的と方法

本稿のねらいは3つある。

1つは，在宅向け幼児番組『おかあさんといっしょ』がどのようにして誕生し，どのような変遷を経て，現在のような形になったのか，その過程を明らかにすることである。

2つ目のねらいは，〈母と子のテレビタイム〉ゾーンがなぜ誕生し，どのようにして視聴者の間に定着することができたのかを明らかにすることである。

『おかあさんといっしょ』の変遷をたどったあとで，〈母と子のテレビタイム〉ゾーンの発展過程を振り返ることで，『英語であそぼ』を始めとする新たな「在宅向け幼児番組」群が，時代のニーズを取り入れながら，先行番組『おかあさんといっしょ』が長年蓄積してきた知見やノウハウを継承することで発展してきたことを確認する。

以上を踏まえ，NHKの幼児向けテレビ番組が，時代によりどのような役割を担い，発展してきたのか，その変化を明らかにする。そのうえで，公共メディアとしてのNHKの中で，幼児向け番組が今後果たしうる役割について考察するのが3つ目のねらいである。

本稿で採用した手法は，番組の過去の文献・資料の分析と関係者へのインタビューである。

資料としては，番組の制作現場に残されていた記録，NHKアーカイブスに保管されている映像や台本などの資料，関連する調査・研究に関する過去文献などを用いた[6]。

また，それぞれの時代で，どのような考えに基づいて番組を開発し，展開させていったのか，過去の資料からは読み取れないことについて，制作関係者にインタビューを行った。インタビューをした主な制作関係者は，以下の5人である。（敬称略）

① 小森美巳　1955年入局。ラジオ番組『婦人の時間』『ラジオ育児室』などを担当後，1959年『おかあさんといっしょ』の立ち上げに関わる（2018年10月19日取材）。

② 近藤康弘　1959年入局。途中一般番組を担当しつつ，放送開始から1990年代まで，『おかあさんといっしょ』に関わり続ける。1996年『ハッチポッチステーション』，2003年『クインテット』などの幼児番組の開発にも関わる（2018年11月20日取材）。

③ 平田豊子　1971年入局。『婦人百科』などを担当後，『おかあさんといっしょ』の制作に関わる。1979年から始まった，制作者と研究者との共同プロジェクト「2歳児テレビ番組研究会」[7]に参加し，「ハイ・ポーズ」などのコーナー開発に携わる（2018年11月9日取材）。

④ 中村哲志　1971年入局。1990年開始の〈母と子のテレビタイム〉ゾーンで放送された『英語であそぼ』『ひとりでできるもん！』『いないいないばあっ！』などの幼児番組の開発に関わったほか，『天才てれびくん』『週刊こどもニュース』などの子ども向け番組の開発にも携わる（2018年10月31日取材）。

⑤ 古屋光昭　1989年入局。『おかあさんといっしょ』の制作に関わり，1999年「だんご3兄弟」，2002年幼保向け番組『ピタゴラス

イッチ』の開発に関わる。2019年現在，NHKエデュケーショナルこども幼児部統括部長（2018年12月10日取材）。

また，制作関係者とは別に，〈母と子のテレビタイム〉ゾーンが新設された経緯と，定着した編成戦略について明らかにするために，以下の関係者にインタビューした[8]。

⑥　白石信子　1981年入局。文研で〈母と子のテレビタイム〉ゾーン新設と，幼児視聴率調査の開発に関わる。現・放送研修センター企画推進室所属（2018年11月2日取材）。

2 在宅向け幼児番組『おかあさんといっしょ』の変遷

『おかあさんといっしょ』は，『NHKのど自慢』や『きょうの料理』に次いで放送60年を数える長寿番組[9]で，文研の幼児視聴率調査では，「NHK・民放でよく見られる番組」として，『サザエさん』や『ドラえもん』などと並んで常に上位に挙がる人気番組でもある。ここでは，『おかあさんといっしょ』の時代ごとの変遷をたどりながら，60年の長きにわたって幼児とその保護者に支持され続けてきた理由を探っていく。

『おかあさんといっしょ』は，さまざまな要素から構成されており，時代により放送内容が大きく異なる。最終的に現在の番組形態になるまでには，それぞれの時代の要請に応じて，さまざまな試行錯誤が行われている。そのため，番組を論ずるうえで，60年の歴史を便宜上，以下のようにおおまかに3つの時期に分け，各時期についてエポックメイキングとなったトピックを中心に，当時の番組関係者のインタビューを交えながら変遷を見ていく（**表1・付表1**）。

1. 誕生期から定着期へ（1959年～1960年代）

表1　『おかあさんといっしょ』の変遷

	番組をめぐる主な出来事	世の中の動き
誕生期から定着期へ 1959年～1960年代	1959年10月　『おかあさんといっしょ』週1回生放送開始 1960年9月　週6日放送になり「ブーフーウー」がスタート 1961年4月　『うたのえほん』放送開始 1966年　『おかあさんといっしょ』と『うたのえほん』が統合される	1959年1月　教育テレビ開局 1963年　『鉄腕アトム』放送開始
低迷期から発展期へ 1970年代～1980年代	1976年　『うたのえほん』との2階建て構成を見直し帯化 1979年　「2歳児テレビ番組研究会」発足 1981年　「ハイ・ポーズ」放送開始 1985年　再放送枠が教育テレビへ移行	1971年～1974年　第2次ベビーブーム 1986年　男女雇用機会均等法施行
安定期から変革期へ 1990年代～現在	1990年　番組制作班がNHKエデュケーショナルへ転出 1998年　本放送枠が教育テレビへ移行 1999年　1月「だんご3兄弟」放送 4月，40周年番組改定 2002年　BS『おかあさんといっしょ』放送開始 2005年2月　さいたまスーパーアリーナでのコンサート開始 2011年　東日本大震災後，特集番組放送 2014年　ライブビューイング実施 2018年　初の映画化	1989年　出生率が1.57を記録 1992年　育児休業法施行 2010年　子ども手当法施行

（筆者作成）

『おかあさんといっしょ』が在宅向け幼児番組として開発され，のちにつながる制作哲学や番組を構成する基本要素が形成された時期を扱う。

2. 低迷期から発展期へ
（1970年代～1980年代）

社会の変化に対応すべく，内容の見直しを図り，より幼児の実態に合った番組制作をするようになった転換期を扱う。

3. 安定期から変革期へ
（1990年代～現在）

番組の長期化により生じた弊害を克服すべく，番組構成や制作システムの見直しを行い，メディアミックスを活発化させることで，より視聴者のニーズに応える制作体制を構築した時期を扱う。

2-1 誕生期から定着期へ（1959年～1960年代）

ここでは，『おかあさんといっしょ』が在宅向け幼児番組として開発された意図と，初期の番組形態について触れる。とりわけ，人形劇コーナーの開発に焦点を当てることで，以後の番組制作の基盤として継承されている“幼児番組の制作哲学”と“外部人材の登用”について述べる。

時代背景

まず，『おかあさんといっしょ』の放送が始まる1959年以前の，子どもとテレビをめぐる状況を確認しておく。

子どもに向けた番組は，1953年のテレビ放送開始当時から存在していた[10)]。当時，多くの子どもを惹きつけた番組として，1956年から放送されたアメリカのテレビ映画『スーパーマン』や『名犬リンチンチン』，NHKで放送された連続人形劇『チロリン村とくるみの木』，そして1958年からはTBSで放送されたテレビ映画『月光仮面』などが挙げられる。幼児向け番組としては，1956年から総合テレビで幼保向け番組が開始されたほか，民放でも，1957年から日本テレビで『テレビのおばちゃま』，1958年からTBSで『テレビ幼稚園』などが放送されている。

テレビは急速に普及しつつあったものの，それでも1959年の時点では普及率は23％程度だった。小津安二郎が同年に監督した映画『お早よう』に見られるように，子どもたちは，テレビのある近所の家庭を渡り歩き，我が家にテレビが来る日を待望していた。雑誌や漫画本など紙媒体が娯楽の主流だった当時，子どもにとってテレビは，他人の家に上がり込んでも見たいと思うほど強烈な魅力を持った存在だったに違いない。

他方で，テレビ批判のシンボル的な表現として“一億総白痴化”という言葉が現れ，PTAや婦人団体を中心にテレビが子どもに与える悪影響が盛んに言われるようになってもいた。

母親と子どものための番組

そんな中，1959年10月5日午後1時40分から20分間，総合テレビで『おかあさんといっしょ』の放送が始まった。開始当時は，デイリーの放送ではなく，週1回月曜日の生放送だった。

『NHK年鑑1961』には番組のねらいについて次のように書かれている。「学齢前の家庭に

いる幼児，特に2歳～4歳の幼いこどもと母親を対象とした，テレビ開局以来初めての試みとして組んだ番組である。人間形成の中で非常に大切なこの時期に豊かな情操と感受性を養うことを目的とし，身につけたよい習慣を楽しいミュージカルのうちに巧みに織り込んだのが大きな特徴であった」。

番組の立ち上げに関わったのが，当時，婦人少年部に所属していた小森美巳である。婦人少年部は『きょうの料理』『美容体操』などの婦人向け番組を制作していた部署で，当時入局5年目のディレクターだった小森は，主にラジオ番組を担当していた。番組を立ち上げるにあたり，タイトルにはこんな思いが込められていたと小森は証言している。

小森 美巳

小森　この時間っていうのは，小さい子どもはお母さんと一緒に家にいる。子どもがテレビに集中している間，お母さんは，子どもを横で見ながら，家の仕事ができる。お母さんは遠くから見ても，違うことをやってもいい。でも子どもが何を見ているか知っていたほうがいい。それであえて『おかあさんといっしょ』というタイトルになったんです。本当は親子で同じものを見て，生活の中で生かしてほしいという思いがあるわけなんですね。

『おかあさんといっしょ』は，番組タイトルからも，制作を担当した部署名からも，“幼児向け”というよりは，むしろ“在宅で育児をしている母親とその子どものため”の番組として企画されたことがうかがえる。

生放送当時の『おかあさんといっしょ』
出演者の旗照夫（左）と島田妙子（右）

当時の映像は残されていないが，内容としては，音楽を交えた「ミュージカルバラエティ」で，『NHK年鑑1961』には「動物のお面をかぶり変えるだけで画面の中から語りかけ，リズムのある楽しい音楽をふんだんに使い，バラエティのあるわかり易い歌と問答のくり返しが，幼いこどもはもちろん，母親にも喜ばれたことは，多数の投書に示されていた」ことが記されている。

好評を博した『おかあさんといっしょ』は，翌1960年9月から，日曜を除く週6日の放送になった。週1回の放送から，週6回になるにあたって，曜日別に4つの違う企画で構成されることになった[11)]。中でも人形劇「ブーフーウー」

（作：飯沢匡，音楽：小森昭宏）は，6年半続く人気企画となり，現在も『おかあさんといっしょ』の中で継続する着ぐるみ人形劇の先駆けとなった。

飯沢匡と「ブーフーウー」

「ブーフーウー」は，周到な作り込みと量産とを両立させる体制を構築した点において，現在の番組制作に影響を与えており，『おかあさんといっしょ』の歴史の中で重要な意味を持つ。それらは生みの親である作家の飯沢匡によってもたらされた部分が大きいと考えられるため，ここで飯沢について詳述する[12)]。

飯沢匡は，戦前から戯曲やラジオドラマを発表し，戦後もテレビドラマや小説のほか，浮世絵師の歌川国芳や仏師の円空など当時十分評価されていなかった人物に光を当てるエッセーを著し，また，いわさきちひろ絵本美術館の初代館長を務めるなど多方面で活躍した。もともと記者として朝日新聞社に勤め，一時期『婦人朝日』や『アサヒグラフ』の編集長を務めてもいる。1952年8月6日号の『アサヒグラフ』では，それまで連合国軍総司令部（GHQ）の検閲により禁じられていた広島・長崎の原爆被害の写真を初めて公開し，核のもたらす悲惨さを多くの人が知るきっかけになった[13)]。

飯沢は，戦後，ラジオ番組『日曜娯楽版』[14)]に放送作家として参加するなど活動の場を広げていた。もともと子ども文化にも造詣が深く，1950年代前半，人形写真による名作絵本[15)]を出版したり，1954年からは，子ども向けラジオドラマ『ヤン坊ニン坊トン坊』[16)]の脚本を執筆したり，企業のPR短編アニメーション[17)]の制作にも乗り出したりしている。いずれの企画も当時としては画期的なもので評判を呼び，ジャーナリストや演劇人とは違う，新たな才能を発揮していた。

飯沢匡と「ブーフーウー」の人形

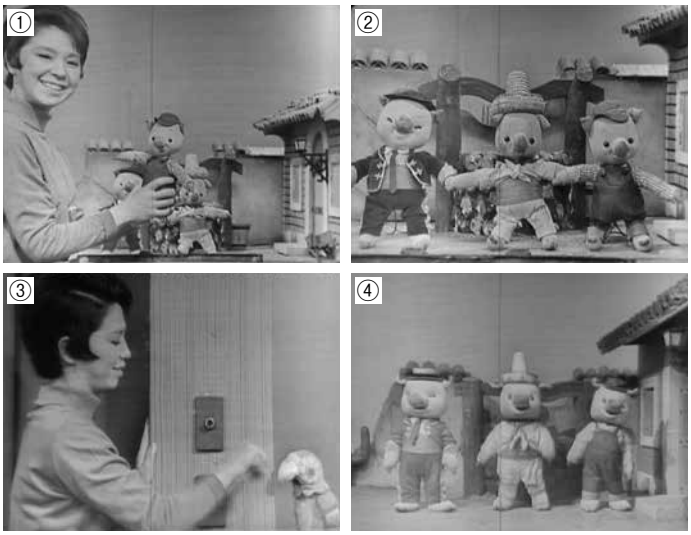
そんな飯沢を『おかあさんといっしょ』に参加させたのは，当時の番組チーフプロデューサー小谷節子（故人）[18)]である。小森によると，小谷は幼児に対する飯沢の考え方に感銘を受けたのだという。

> 小森　結局小谷さんが，飯沢さんをいいと思われたのは，「子どもには最高のものを見せないとダメだ」という飯沢さんの考え方，「大人が今考えうるベストなものを提供しなければダメだよ」っていうことを断固として譲られなかったっていうところですね。

「子どもに最高のものを見せる」という飯沢の考えは，“幼い時期にいいものを見せて豊かな感性を養う”という教育的な配慮以上に，むしろ“子どもこそ偽物を見抜く”という自身の経験則に基づいているように思われる。飯沢は，1960年に書いた「児童番組の書き方」という文章の中で，子どもの批評眼の厳しさについて

以下のように述べている。「子どもたちは鋭い感受性をもっています。ことに視覚的なものに敏感です。ちゃちなもの，いいかげんなもの，手をぬいたものに対して，たちまちもちまえの批判精神を発揮します。いわゆる子どもだましは映像を具体的に示している以上，ここでは通用しません」[19]。

飯沢は子どもを惹きつけるために，合成や画面の切り替えなど，テレビならではの映像的なトリックを考案している[20]。



司会者が３体の人形をミニチュアセットに置き，
ゼンマイを巻いてスイッチを押すと着ぐるみが動き出す

「ブーフーウー」の導入部は，司会者がカバンの中から3体の仔ブタの人形を取り出し（写真①，②），壁に取り付けられたゼンマイを巻いてボタンを押すと（写真③），3体の仔ブタの人形がモゾモゾ動き始め，仔ブタの人形たちが芝居を始める（写真④），という流れになっていて、動かないはずの人形が，ゼンマイ仕掛けで動き出すかのように見える。これは，3種類の人形を使い，本来は別々の場面を連続しているかのように見せていたのである。具体的には，①と②のカットでは、石膏細工の人形を，（写真にはないが）3体が動き出すカットではギニョール（指人形）を，④のカットで人間が入った着ぐるみを映し，それらの映像を切り替えていた。だが，大きさが全く違う人形のトリックが見抜かれてしまっては，“子どもだまし”になってしまう。飯沢は，鋭い子どもの眼で見ても，3種類の人形が同じもののように見えるよう，人形デザインの土方重巳[21]と人形製作の川本喜八郎[22]の3人がかりで，現場で入念にこだわり抜いたと小森は語る。

小森　土方（重巳）さんのデザインで，その映り方とか，色とか全部，川本（喜八郎）さんがすごく綿密に，ちゃんと確認して。あのこだわり方は大変なものでした。とにかく3段階，動かない人形と，ギニョール（指人形）で動く人形と，それが切り替わると着ぐるみになるわけですよね。人形がだんだん切り替わって，自由自在に動く人形劇なんて，誰も考えてなかったわけですよ。その代わりお金がかかるのでプロデューサーの小谷さんは大変だったと思いますね。

飯沢らスタッフがこだわったかいがあり，放送当時，映像切り替えのトリックは見破られることなく，「あのブタの人形はどういう仕掛けで動いているのですか」と質問の電話や手紙が殺到したという[23]。

「ブーフーウー」以後も，飯沢は「ダットくん」[24]，「とんちんこぼうず」[25]，「とんでけブッチー」[26]，「うごけぼくのえ」[27]，「ペリカンおばさん」[28]，

「ミューミューニャーニャー」[29]などさまざまな人形劇を生み出し，1983年3月まで24年にわたって『おかあさんといっしょ』に関わり続けた。

外部人材の登用

「子どもに最高のものを見せる」ために『おかあさんといっしょ』の制作チームは他分野で活躍している人や，まだ知られていない才能をいち早く見つけ出し，積極的に登用していった。放送開始直後の『おかあさんといっしょ』には，文学，音楽，美術などさまざまな分野から多様な人材が関わっている。

放送作家としては，飯沢以外にも，帯ドラマ『バス通り裏』[30]などの脚本を執筆し，のちに児童文学作家となる筒井敬介や，『おれがあいつであいつがおれで』や『ボクラ少国民』などの作品で知られる児童文学作家の山中恒，『ひょっこりひょうたん島』を生み出した作家の井上ひさしと山元護久が参加しているほか，番組内で作られたオリジナル曲の作詞を，サトウハチローや阪田寛夫，まどみちおなどが手がけている。

また，音楽の分野では宇野誠一郎，越部信義，中田喜直などが名前を連ね，美術の分野では，前出の川本喜八郎のほかに，のちに絵本『ぐるんぱのようちえん』などの作画を手がけ，ファッション雑誌『POPEYE』や『an an』のデザインディレクターとして活躍する画家の堀内誠一も，1962年から3年にわたって「こんな絵もらった」[31]というコーナーで関わっていた。

1959年の入局直後，フロアディレクターから『おかあさんといっしょ』との関わりが始まり，のちにプロデューサーとして番組を大きく発展させることに貢献した近藤康弘は，当時の外部スタッフの顔ぶれについて以下のように振り返っている。

> 近藤　今考えてみても，あの当時，すべての分野の第一級の方々が真剣に番組に参加している。本当に素晴らしいスタッフというか，外部スタッフ。彼らは彼らなりにやっぱりテレビというのがこれから先，絶対に子どもには欠かせない分野だという何かがあったんでしょうね。本当に超一流の方々が参加している。音楽から本から。あの当時の最先端のメディアのいろんな方々が参加したという。

「こんな絵もらった」収録スタジオでの堀内誠一

近藤 康弘

「子どもに最高のものを見せる」という制作哲学と，外部の人材と共同作業をすることで，これまでにない番組を生み出していくというやり方は，以後の幼児番組制作に受け継がれていく。

基本3要素の成立

『おかあさんといっしょ』放送開始2年後の1961年，総合テレビで『うたのえほん』という10分の新たな在宅向け幼児番組が始まった。『うたのえほん』は，「うたのおねえさん」（初代：真理ヨシコ，中野慶子）による歌のコーナーと，「元気に一，二」（作詞：吉岡治，作曲：越部信義，たいそうのお兄さん：砂川啓介）という「たいそう」コーナーの2つの要素で構成されていた。歌のコーナーでは毎月，番組オリジナルの歌を紹介し，「アイアイ」や「あめふりくまのこ」「一ねんせいになったら」などの新しい童謡が生まれた。また，「たいそう」コーナーは，視聴者の子どもをスタジオに参加させ人気を博した[32]。

1966年，『うたのえほん』は『おかあさんといっしょ』に統合された[33]。近藤は「うた」「たいそう」「人形劇」を「『おかあさんといっしょ』の3本柱」として指摘しているが[34]，このうち，1つ目，2つ目の要素は，もともとは『うたのえほん』から生まれたもので，2つの幼児番組が統合されることによって3つの要素がそろったのである。

『うたのえほん』のたいそうコーナー「元気に一，二」

2-2 低迷期から発展期へ（1970年代～1980年代）

ここからは，放送開始から10年以上を経過した『おかあさんといっしょ』が，社会の変化に伴って番組の見直しを迫られ，結果としてより幼児の実態に即した番組制作をすることになった転換点について述べる。

番組を取り巻く社会状況の変化

1970年代を，近藤は「『おかあさんといっしょ』が悩んだ時代」[35]と総括している。これは，社会の変化により，番組の視聴状況が大きく変わり，番組内容や制作体制を時代に合わせるために，試行錯誤しながら見直していったことを表している。

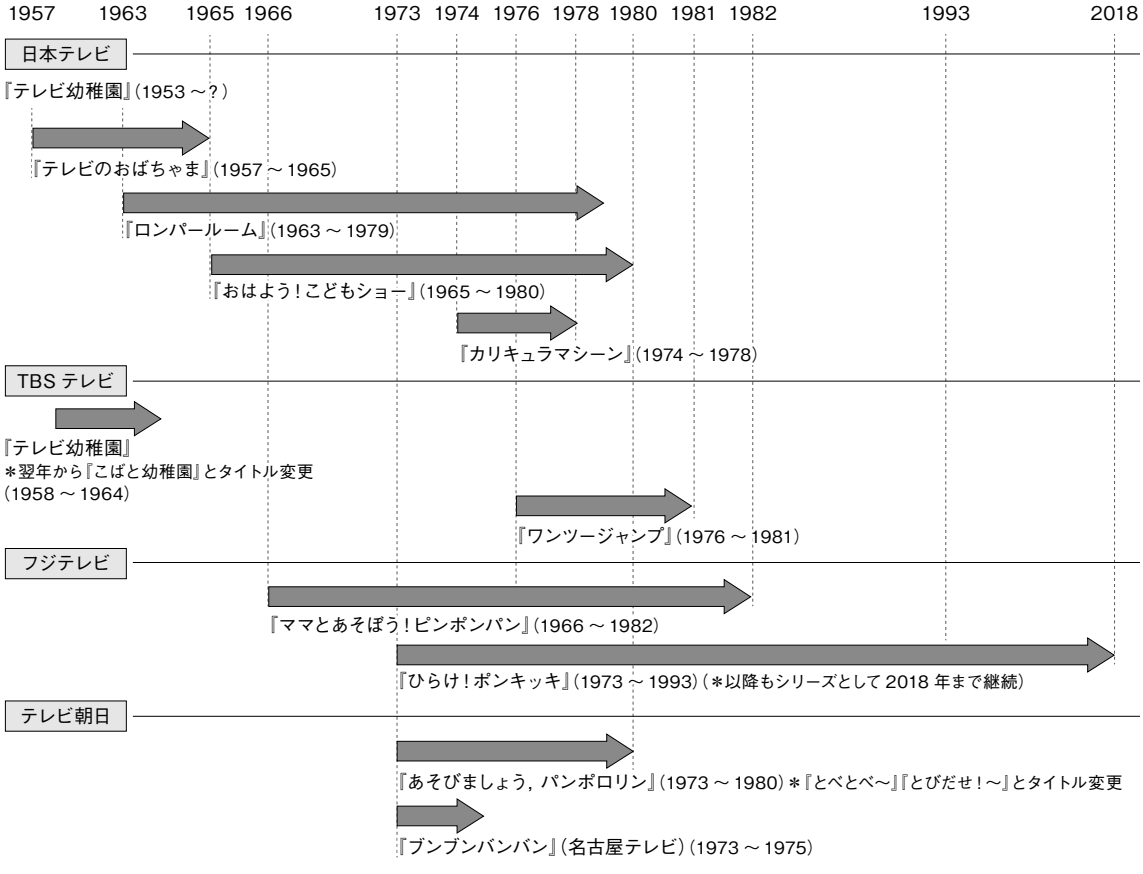
当時の時代状況を振り返ると，高度経済成長を背景に，白黒テレビの普及率は1965年に9割に達した。カラーテレビも1975年に9割を超すようになり，ほとんどの家庭にテレビが存在する時代になっていた。

また，放送時間も番組数も増えていった。子ども向け番組に関しては，1963年の『鉄腕アトム』を皮切りに国産のテレビアニメシリーズが次々と放送され，1966年には『ウルトラマン』，1971年には『仮面ライダー』など特撮番組の放送も始まっている。

幼児番組に関しても，1960年代後半から1970年代にかけて次々と新たな番組が誕生しており，ピーク時の1976年には7本の幼児番組が毎日放送されていた（**図2**）。民放の幼児番組は，出演者が固定されており，番組の構成要素も遊びやお話など，曜日によって内容の特性の違いがほとんどないため，番組イメージを作りやすく，幼児の視聴習慣が形成されやすくなっていた。

一方，『おかあさんといっしょ』は，1966年に『うたのえほん』と一本化されたものの，実質は，午前8時台と10時台で分かれていた放送時間が隣り合わせになり，番組タイトルが統一されただけで，番組構成は，前半10分と後半15分にはっきり分かれていた。前半10分は，『うたのえほん』に由来し，「うた」と「たいそう」コーナーで構成されており，曜日による内容の特性の違いはなかったが，後半15分は人形劇や朗読など，曜日によってさまざまなコーナーで構成され，出演者も統一されていなかった。つまり番組後半部に関しては，開始当初から10年以上変わらず，出演者も企画も毎日入れ替わるという作りのため，番組イメージが形成されにくくなっていた。また1つの企画が15分続くのも，テンポよく内容が変わっていく民放の番組を見慣れた幼児には長いと感じられるようになった

図2　民放の主な幼児・子ども向け番組の変遷



（吉良元孝「民放におけるテレビ〈児童向け番組〉の系譜」（『月刊民放』1979年1月号）をもとに筆者作成）

と思われる[36]。

加えて，幼児を取り巻く社会状況も大きく変わっていた。1960年の幼稚園の就園率は，3歳児で1.8％，4歳児で11.3％，5歳児で31.3％だったが，1975年には，3歳児でほぼ3倍，4歳児でほぼ4倍，5歳児でほぼ倍増している（**図3**）。それまで『おかあさんといっしょ』は，就学前の幼児，主に2～4歳児を対象にしていたが，就園率の向上に伴って，視聴対象の3・4歳児は番組放送時間に家にいないことが多くなり，家にいるのは，就園前の，さらに年齢の低い幼児になっていた[37]。

曜日による特性がなく，視聴習慣を作りやすい民放の幼児番組が増える中で，『おかあさんといっしょ』の相対的な価値が低下していたことに加えて[38]，視聴対象となる年齢層と番組内容のミスマッチも起きていたのである。

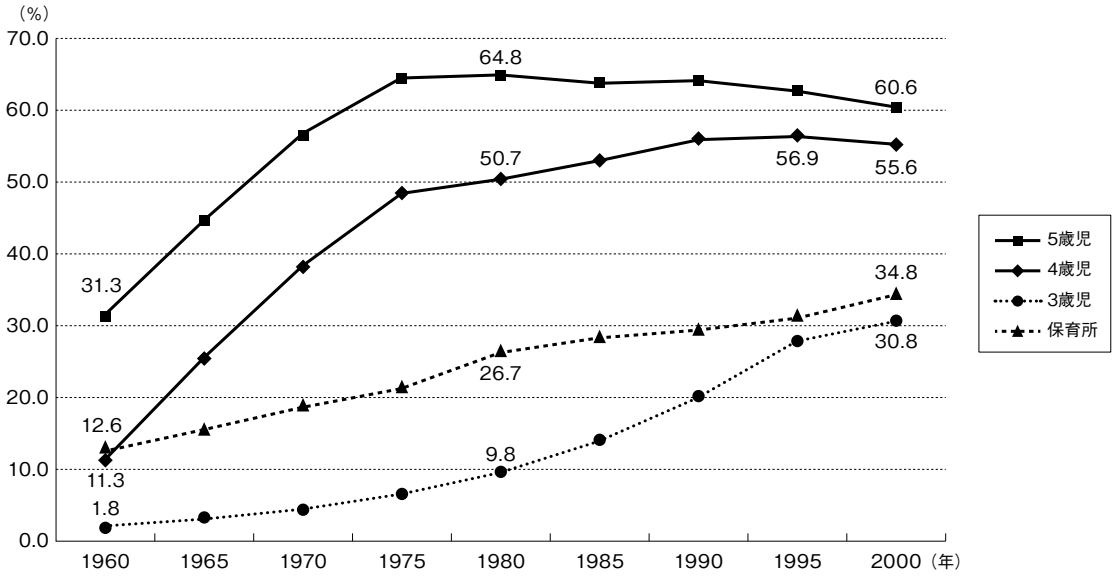
1977年，若者向け番組などを経て，数年ぶりにプロデューサーとして『おかあさんといっしょ』に関わることになった近藤は，当時の幼児番組班の印象を次のように述べている[39]。

> 近藤　幼児番組に戻ってみると，長年低位安定が続いて，なんか上澄み液だけで仕事しているような，実際にプロデューサーになってみて，日々平和，サークル活動的な雰囲気，それが嫌だなと。多少そういうのを変えられないのかなという気はありました。

『セサミストリート』と「2歳研」

番組開始から20年近くが経過し，『おかあさんといっしょ』は，これまでのやり方を見直し，より低年齢の幼児に向けた番組制作に舵を切っていく。その際，新たな制作体制を整備するうえで，大きな指針になったのが，日本では1972年から放送されていた『セサミストリー

図3　幼稚園就園率・保育所入所率の推移（文部科学省）



注：保育所は3歳以上児の合計

ト』である[40]。制作していたアメリカのCTW（Children's Television Workshop）では，設立段階から，制作部門と並んで，調査・研究部門が設けられていた。番組を制作するにあたって，ハーバード大学の発達心理学者ジェラルド・レッサー教授を中心とする研究者たちの意見を積極的に取り入れ，文字の読み書きや計算技能の習得などの「教育目標」を設定し，試作番組を作って実際にその目標を達成できたかを検証し，必要な修正を行ってから放送していた。そうすることで，番組は大きな成果を挙げていた。

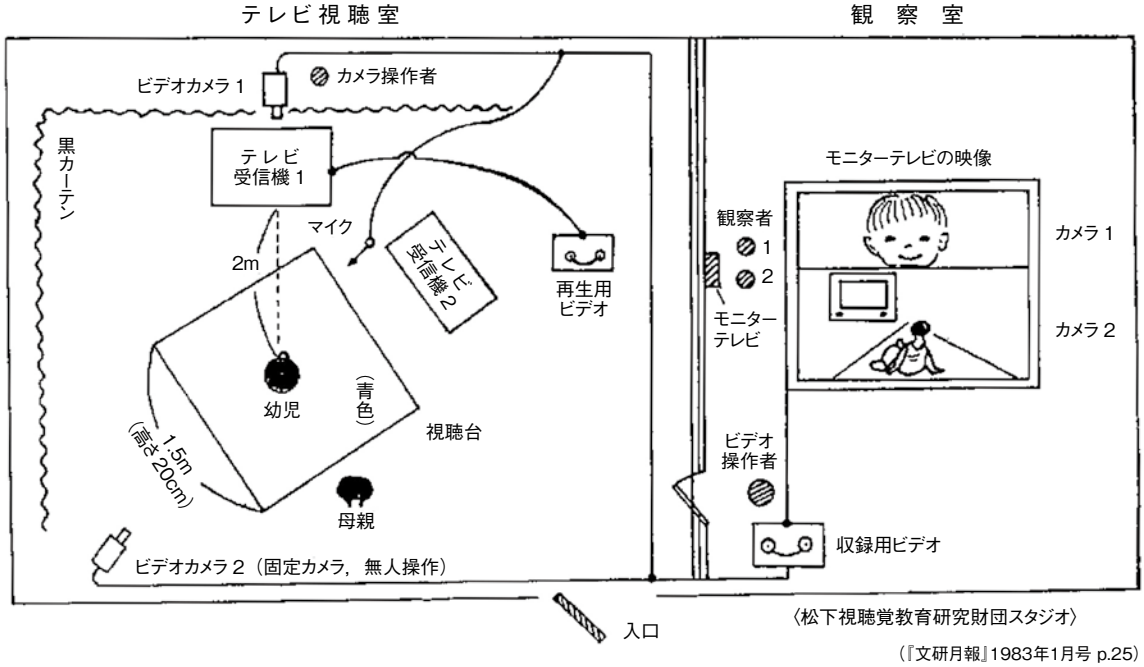
1978年にオランダのアムステルダムで開催された『セサミストリート』に関する国際会議に，『おかあさんといっしょ』の制作者と東京女子大学の心理学者・白井常名誉教授らが同席したことがきっかけとなり，「2歳児のためのテレビ番組」を共同研究して制作することが提案され，翌1979年「2歳児テレビ番組研究会（以下，2歳研）」が発足した[41]。当時の日本では，制作者と研究者が共同で番組制作を行うというプロジェクト・チーム形式は，ほとんど行われていなかった[42]。メンバーは，月1回程度定期的に開催される会合で研究テーマについて意見を交換し始めた。

2歳研が最初に取り組んだのが，「2歳児というのは，どのような発達段階にあり，何ができるのか」を明らかにする実態調査だった。当初は，研究者グループによる2歳児の行動観察と，家庭訪問によるアンケートを通して行われていたが，放送世論調査所[43]も合流し，1980年には首都圏の就学前の幼児1,800人を対象に，翌年には秋田と大阪の750人を対象に大規模な調査が行われた。この実態調査により，2歳児が1日に3時間前後テレビを見ており，視聴時間は小学生の平均よりも20分以上長いことが明らかになった。また番組の内容も理解し始めており，登場人物に合わせて手拍子をしたり，歌や言葉の真似を盛んにすること，50％近い子どもはテレビで数や文字を覚えていること，2歳児が一番見ている番組が『おかあさんといっしょ』であることなどが明らかになった[44]。

実態調査と並行して行われたのが，2歳児の認知行動を確かめる「効果測定」実験である。効果測定は，**図4**に示したような実験スタジオを設営したうえで行われた。スタジオの中にテレビを2台据え，1つには「制作者が見せたい番組」，もう1つには「（注意をそらすための）関係のない映像」を流す。そこに2歳児1人と母親に入ってもらい，カメラ2台で「子どもの表情」と「全体の様子」を別々に記録し，上下にワイプしたモニター画面で子どもの視聴状態を把握しようというものだった。最初の実験では，NHK・民放の幼児番組やアニメーション，コマーシャル，そのころ人気だったピンク・レディーの歌や踊りなどから61のセグメントを選び出し，20分のVTRを4本作り，「どのような映像が子どもを惹きつけるのか」が実験された。その結果，成人女性・男の子・子どもの声，大きな動物，食べ物，軽快な音楽などの要素が入るとよく見られることが分かった。また背景がゴチャゴチャしているものよりも，無地の背景の上に単純な図形が動くというようなものが2歳児に注視されることが分かった。

しかし，制作側からは，2歳研の研究は「あまりにも抽象的すぎて番組企画に活用のしようがない」[45]という声が挙がるなど，番組制作者と研究者との間に意識のずれが生じていることが明らかになった。そこで活動が2年目に入った1980年，2歳研はより具体的な番組を対象に

図4　テレビ視聴実験スタジオ略図



（『文研月報』1983年1月号 p.25）

した共同研究に取り組むことになった。

「ハイ・ポーズ」の開発

共同研究の対象になったのが，同年3月『おかあさんといっしょ』の特集番組『春の子ども広場』でパイロット版が放送された「ハイ・ポーズ」である。「ハイ・ポーズ」はヨガの動きを取り入れた，新たな体操コーナーだった。開発したのは当時『おかあさんといっしょ』制作班の中で一番の若手で，2歳研にも参加していた平田豊子である。

平田 豊子

平田　2歳児に特化したときに，「どんなことができるか」っていうことを話していく中で，ヨガみたいなゆっくりした動き，1つのポーズになるようなのはどうかと提案したんですね。すると，「2歳児っていうのは自分の意思で，自分の動きをなかなかコントロールできない」という意見が出て，走り出したら止められないとか，ゆっくりした動作ができないというんですね。だから，それをコントロールする，自分自身を見つめる，目をつぶる，というような感じの映像が開発できたらどうだろうと話し合いが進んだんです。

パイロット版の放送を受け，2歳研では，「ハイ・ポーズ」をより子どもの興味を引くコーナーにブラッシュアップするため，全面的に協力することになった。まず，研究者たちの意見をもとに，ポーズの数や長さなどの要因を分析し，新たにポーズを変えたり，インストラクターを男性と女性で変えたり，計5バージョンを制作した。そして，それぞれのバージョンで子どもの反応を効果測定したのである。最初のパイロット版では，3歳児と男性インストラクターによる5分間のコーナーだったが，さまざまな組み合わせを試した結果，2歳児と女性インストラクターの組み合わせで2分半に短縮したもののほうが，反応がよくなるという結論に至った。「ハイ・ポーズ」は1981年4月からレギュラーコーナーとして毎日放送され，それまでにないユニークなコーナーとして評判になった。

平田　ディレクターの長年の勘ってすごく大事だと思うんですけれども，それも当たっているときと，外れるときがありますよね。そうしたときには，「どういうことで外れたのか，どういうことで当たったのか」っていうことを調査する必要があって，2歳研はその点でとても有効に機能したと思います。例えば，「ハイ・ポーズ」をやるにしても，一番重要なのは子どもが模倣するかどうかっていうことなんですけど，そのときに，子どもがどういうことに興味を持つか，どういう視点でその動きを始めるのか，ということを調査する。「私たちとしてはこういうことが知りたいんです」っていうお話をすると，先生たちが「じゃあこういう目標を定めてそれをテストしましょう」という具合に進んでいったので，制作するうえで1つの指針になりましたね。

「ハイ・ポーズ」（1981～1994）

2歳研の成果

2歳研の研究を通して，幼児にとっては「カラフルなものよりも，モノトーンでシンプルなアニメやセットのほうがインパクトがある」「カメラの移動があるよりも，固定した画面の中でキャラクターが生き生きと動き回るほうが惹きつけられる」，また「2分半程度しか映像への集中力が持続しない」などの知見が得られ，それらは番組作りに生かされていった[46)]。具体的には，幼児が見やすい短いコーナーで構成されるセグメント化がこれまで以上に促進され，1980年代前後には「ハイ・ポーズ」以外にも，「パジャマでおじゃま」（1979～1994），「ぞうさんのあくび」（1982～1996），「はみがきじょうずかな」（1983～1991），「こんなこいるかな」（1986～1991）など，1990年代まで継続する定番コーナーが生み出され，番組の人気の回復につながっていった。

2歳研の一連の活動の成果によって，制作者の勘や経験則だけに頼るのではなく，データに裏打ちされた知見に基づいて，より幼児の実態

に合った番組制作が可能になった。また，こうした研究結果を具体的な番組制作に生かすやり方は，『おかあさんといっしょ』だけでなく，以後，NHKのさまざまな幼児番組の制作現場でも広まっていった。

2-3 安定期から変革期へ（1990年代〜現在）

ここからは，『おかあさんといっしょ』の放送が長期化することに伴って，新たに番組構成や制作システムを見直し，またメディアミックスを活発化させることで，視聴者のニーズに応え，番組をより身近な存在にしていった時期について述べる。

時代背景と番組をめぐる状況の変化

1970年代後半から1980年代前半にかけ，一般家庭でもビデオやテレビゲームが普及し始め，子どもの遊びが多様化しながら大きく変わっていった。幼児向けテレビ番組に関しては，1980年代中ごろには民放からほとんどの番組が姿を消した[47)]。また，教育テレビの幼稚園・保育所向け番組に関しても，園での利用率が低迷するようになっていた[48)]。

この時期，日本社会は大きな転換期を迎えていた。1986年の男女雇用機会均等法の施行に伴って女性の社会進出が促進されることになり，1997年に“共働き世帯”が“男性雇用者と無業の妻から成る世帯”を上回った。また，1989年には，出生率がそれまで最低だった1966年（丙午（ひのえうま））を下回る1.57を記録した。子どもや子育てに関わる家庭の状況や価値観がそれまでと大きく変わり，また経済状況の悪化もそれに拍車をかけた。

『おかあさんといっしょ』の制作チームをめぐる組織にも大きな変化があった。当時，『おかあさんといっしょ』班は番組制作局教育番組センターに所属していたが，1990年夏に，関連団体NHKエデュケーショナルに番組班ごと転出することになった[49)]。また番組をめぐる状況も変化した。開始以来，総合テレビで本放送されてきたが，1998年から教育テレビに移行し[50)]，後述する〈母と子のテレビタイム〉ゾーンの中で放送されることになった。

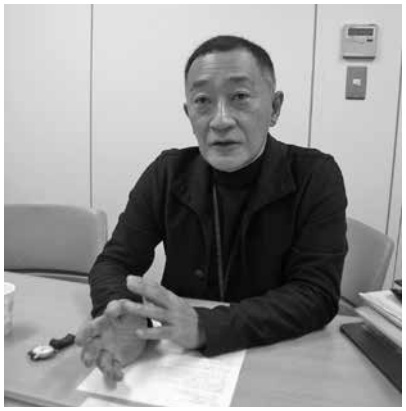
40周年の番組改定

1999年4月，番組開始40周年のタイミングで，『おかあさんといっしょ』の内容，構成が大幅に見直された。見直しの背景には，25分のデイリー番組を安定的に制作するために，スタッフを固定化，作業をマニュアル化してきた弊害があった。

『おかあさんといっしょ』は1983年以来，人形劇（パート1）と，「うたのおにいさん・おねえさん」たちが視聴者の子どもとスタジオで遊ぶ部分（パート2）を分けて収録していた。年間170本を制作するためには，1週間のうち，人形劇を2日間，子どもと「うたのおにいさん・おねえさん」のパートを3日間で，それぞれまとめて収録し，残りの日にちで編集，それと並行して翌週のリハーサルや音楽録音などを行わなくてはならない。それぞれの工程が滞りなく進行するためには，綿密な制作システムが求められる。しかし，システムが堅牢化することによって番組がマンネリ化してしまい，柔軟性やライブ感が失われてしまったという反省があった。

この改定作業に関わったのが，現在NHKエ

デュケーショナルこども幼児部統括部長の古屋光昭である。古屋は1989年の入局後まもなく『おかあさんといっしょ』班に配属され，1991年から4年間の鳥取局勤務を除いて，ディレクター，プロデューサーと役割を変えながらも，一貫して幼児番組の制作に携わっている。



古屋 光昭

古屋　この番組はシステムでできてるんです。反省点があったのは，システムがすごくかっちりしたがゆえに，工場のライン生産みたいになってしまうっていう反面の悪さを感じてたことなんですよ。だから，新たなシステムを作るんだけど，それと同時に，やっぱり中身ありきっていうことをもう1回ちょっと問い直したということなんですね。

図5は，改定前後の番組構成表を比較したものである。改定前の構成（左）では，番組冒頭に人形劇(②)があり，「うたのおにいさん・おねえさん」の出演パートは番組後半になっている(⑨)。これは，パート1（番組前半の人形劇を中心としたVTRメインのパート。左構成表の①～⑦まで）と，パート2（番組後半のスタジオメインのパート。左構成表の⑧～⑪まで）を別々にまとめて収録し，編集で一本化するという制作システムだった。

しかし，番組の顔である「うたのおにいさん・おねえさん」が後半にならないと出てこないという不自然さがあったため，改定後の構成（右）では，従来通り，パート別に収録しつつも，「うたのおにいさん・おねえさん」を冒頭に登場させて(❷)，人形劇パート(❸)を挟み込む構成に変更した。別々に収録したパートを前後にくっつける構成から，間に挟み込む構成に変えたことで，1回のスタジオ収録にかかる時間は増えた。だが「うたのおにいさん・おねえさん」を番組の縦軸に据えたことにより，2人の個性を出しやすくなり，より視聴者に近い存在としてアピールすることができるようになった。そのことで，2000年代に入って以降，「うたのおにいさん・おねえさん」が子どもだけでなく，親世代からも支持されるという現象が現れ始める。

番組構成と制作システムを見直す一方で，番組に新たな息吹をもたらしてくれる外部人材を探す作業も進んでいた。その過程で古屋は，クリエイティブ・ディレクターの佐藤雅彦[51)]と出会い，そこから，当時，社会現象にもなったヒット曲「だんご3兄弟」が誕生した。この出会いは，のちに『ピタゴラスイッチ』の開発につながっていく。

二次展開の活発化

また，番組の制作が関連団体のNHKエデュケーショナルに移行したことにより，結果として放送以外の二次展開が活発化することになった。自主事業として，CDやDVDなどの音声・映像商品や，キャラクターグッズを含む商品展開が行われるようになった。2005年以降，さいたまスーパーアリーナなど，大規模に集客できる場所でのコンサートも開催されるようになった。

図5 『おかあさんといっしょ』改定素案資料（番組制作班保管）

改定前の構成（1998年当時）

項　目		出　演	内　容	TIME
①オープニング	VTR（CG+アニメ）	——	オープニング	1’00
②ドレミファどーなっつ	スタジオ	着ぐるみ4体	みど・ふぁど・れっしー・空男の4匹が繰り広げる着ぐるみ人形劇	5’00
③あいさつコーナー	スタジオ	古今亭志ん輔	季節・生活の話題を志ん輔が実物を使って紹介	1’00
④スイングキッチン	VTR（アニメ）	アニメキャラ	幼児に身近な食器を主人公にしたシリーズアニメ	1’30
⑤志ん輔ショウ	スタジオ	古今亭志ん輔&人形	志ん輔が・ブタくん・ヘビくんと一緒にクイズやお話,コントを行うバラエティーショー	3’00
⑥パジャマでおじゃま	VTR（実写）	一般の子供	人気コーナーの復活。子供のパジャマを着る奮闘ぶりを	1’00
⑦百面相	スタジオ	ヒモ	ヒモを使った形態模写,一種のライブアニメ	0’30
⑧トライ!トライ!トライ!	スタジオ	松野ちか&子（体操の姉）	体操の姉と子供が身近にある器具を使って身体表現あそび	1’30
⑨うたコーナー	スタジオ VTR（アニメなど）等	速水けんたろう・茂森あゆみ（歌の兄姉）&子	幼児のための歌コーナー。古くからある童話から新しいオリジナル曲まで,多彩な映像表現で	約6’00
⑩あ・い・うー	スタジオ	佐藤弘&子（体操の兄）	体操の兄と子供たちの体操	3’00
⑪どれみふぁ列車～エンディング	スタジオ	全員	着ぐるみ人形が作るトンネルをくぐってサヨナラ	1’30

改定後の構成案

項　目		出　演	内　容	TIME
❶オープニング	VTR（CG+アニメ）	——	オープニング	1’00
❷MC（あいさつ）	スタジオ	新・兄姉	あいさつコーナーがわりのMC	1’00
❸新・人形劇	スタジオ&野外	着ぐるみ4体	新しい着ぐるみ劇	4’00
❹ミニコーナー①	VTR等	実写がからむ要素を	志ん輔コーナーの構成要素を分離独立。ミニコーナーに	1’00
❺ミニコーナー①（MC～子席）	スタジオ&VTR	新・兄姉&子	MC～子席の歌&VTR歌,計2曲	3’00
❻スイングキッチン	VTR（アニメ）	アニメキャラ	幼児に身近な食器を主人公にしたシリーズアニメ	1’30
❼トライ!トライ!トライ!	スタジオ	松野ちか&子（体操の姉）	体操の姉と子供が身近にある器具を使って身体表現あそび	1’30
❽MC～ジングル	VTR &スタジオ	新・兄姉	ジングル～つなぎのMC（動物へのはしわたし）	0’30
❾みてごらん	VTR（実写）	動物その他何でも「見る」	土曜版の「みてごらん」をデイリー化。動物や虫に限らず	1’30
❿パジャマでおじゃま	VTR（実写）	一般の子供	人気コーナーの復活。子供のパジャマを着る奮闘ぶりを	1’00
⓫ミニコーナー②	VTR等	キャラクターor図形	志ん輔コーナーの構成要素を分離独立。ミニコーナーに	1’30
⓬歌コーナー②	VTR &スタジオ	新・兄姉	MC（リクエスト）～VTR歌～月の歌,計2曲	3’00
⓭あ・い・うー	スタジオ	佐藤弘&子（体操の兄）	体操の兄と子供たちの体操	3’00
⓮どれみふぁ列車～エンディング	スタジオ	全員	着ぐるみ人形が作るトンネルをくぐってサヨナラ	1’30

さらに，2013年から2016年にはコンサートを映画館で生中継するライブビューイングを実施，2018年には初めて番組を映画化している[52)]。これは，制作が関連団体に移行したことで，制作と同時進行で，キャラクターや音楽などさまざまな権利を一括管理する体制が整備され，戦略的に多様なメディアミックスを行うことが可能になったためだと考えられる。またこのことにより，これまで以上に視聴者のニーズに応じたサービスが提供しやすくなり，視聴者の番組への支持をより強固なものにしている[53)]。

東日本大震災後の特集番組

最後に，東日本大震災後に放送された『おかあさんといっしょ』の特集番組について触れておく。2011年8月，『おかあさんといっしょ』では5日間にわたって，青森・岩手・宮城・福島・茨城の被災地を，当時の「うたのおにいさん・おねえさん（横山だいすけ，三谷たくみ）」「たいそうのおにいさん・おねえさん（小林よしひさ，いとうまゆ）」の4人が訪ねる様子を放送した。『おかあさんといっしょ』の出演者が被災地を訪れるのは60年の歴史の中でも異例のことだが，災害時に自粛するばかりではなく，幼児に関わる番組だからこそできることが何かあるのではないかと，制作スタッフと出演者が議論したうえで企画された。

8月1日の放送では，南三陸町の保育所の子どもたちと出演者が一緒に「ぽよよん行進曲」（作詞：中西圭三・田角有里，作曲：中西圭三）という歌を歌うシーンが流れた。「ぽよよん行進

『おかあさんといっしょ』（2011年8月1日放送）

曲」は，2006年4月に番組内で放送された“月の歌”だが，困難に直面した子どもを励ます内容で，以下のような歌詞で始まる。「どんな大変な事が起きたって　君の足のその下には　とてもとても丈夫な「ばね」がついてるんだぜ知ってた?」。震災直後の被災地で子どもたちと一緒に歌われたことで，「勇気」や「希望」という，本来この曲が持つメッセージが，これまで以上に確かなものとして伝わってきたと反響を呼び，放送から8年経過した現在でも「『おかあさんといっしょ』の「ぼよよん行進曲」がもう一度見たいです。当時，つらいことがあってもこの曲に励まされてきました」など再放送の要望が数多く寄せられている[54]。

この特集番組は，災害時に，公共メディアとして，幼児番組だからこそできる支援の可能性を示唆する事例だと言える。こうした取り組みも，結果として番組の存在感の向上につながっていったと思われる。

『おかあさんといっしょ』のまとめ

ここまで『おかあさんといっしょ』の歩みを振り返ってきた。開始当初から「子どもに最高のものを」という方針を掲げ，すぐれた外部人材を数多く登用することで，番組の基礎が築かれていった。1970年代，番組は低迷したが，研究者とともに幼児の実態を調査し，その結果を反映させることで，より幼児の発達に即した番組作りを実現させることになった。1990年代には，番組の長期化に伴って生じた弊害を克服するため，制作体制や内容のリニューアルを図り，また二次展開を活発化させることで，より視聴者のニーズに応える体制を整えてきた。『おかあさんといっしょ』は60年の間，それぞれの時代の変化に対応しながら変貌を遂げ，幼児と保護者から根強い支持を獲得するに至った[55]。

続いて，『おかあさんといっしょ』が築き上げた制作手法や制作哲学を継承しながら，これまでにはなかった番組が次々と開発されていく舞台となった，〈母と子のテレビタイム〉ゾーンの発展過程を見ていく。

3 〈母と子のテレビタイム〉における新番組開発とゾーンの発展過程

ここでは，1990年に教育テレビで開始した〈母と子のテレビタイム〉における新番組開発とゾーンの発展過程について述べる。まず，ゾーンがどうして新設されたのか，その経緯を明らかにする。その後，どのような番組が開発されたのかを順次述べ，ゾーンの発展過程を見ていく。最終的に〈母と子のテレビタイム〉が視聴者に定着した要因を分析する。

また，2000年以降，在宅向け幼児番組と幼保向け番組が統合するきっかけになった番組開発にも触れ，NHK幼児向けテレビ番組の流れについて総括する。

その際，ゾーンの発達過程を，以下の3つの時期に分けて見ていく。

1. ゾーン新設期（1990年～1995年）

ゾーンが新設された経緯と，ゾーンの視聴変化を把握するために同時期に開始した幼児視聴率調査について述べつつ，最初期に開発された番組を扱う。

2. ゾーン発展期（1996年～2002年）

ゾーンの順調なスタートを受け，視聴層を拡大した2つの番組を扱い，ゾーンが大きく発展する時期について見ていく。

3. ゾーン拡充期（2003年～現在）

多様なジャンルの新番組が開発され，ゾーン内の充実が図られるとともに，それぞれの番組の役割が明確になり，現在につながる構成要素が形作られた時期を扱う。

3-1 ゾーン新設期（1990年～1995年）

〈母と子のテレビタイム〉ゾーンは，それまで個別に編成されていた幼児・子ども向け番組を，決まった時間帯にまとめて編成することで，視聴対象である幼児から小学生（とその保護者）の層に向けてアピールし，ゾーン全体で視聴してもらうことをねらったものである。ゾーンは以後徐々に拡大していくが，1990年の時点では，16時～18時の2時間だけだった[56]（**付表2**）。

ここでは，まず〈母と子のテレビタイム〉ゾーンが新設された経緯を，当時の資料と関係者へのインタビューからひもとく。また，ゾーンを拡大させていくうえで，結果として大きな役割を果たすことになった「幼児視聴率調査」についても述べる。

3-1-1 ゾーン新設経緯

『NHK年鑑1991』には，「（1990年度の）教育テレビは，高齢化社会の到来や，心の豊かさ・生活の潤いを求めて視聴者の要望の増加に対応して，生涯学習に寄与する波の性格を強め，番組の大幅改定を行った」と記されている。その改定の最初の項目として〈母と子のテレビタイム〉の新設を挙げ，「幼児から小学生，母親を対象とした番組を集中的に編成した」としている。

しかし，当時どのような経緯で〈母と子のテレビタイム〉が新設されたかについては，はっきりしていない。放送番組の改定には複数の部署が関わり，さまざまな要因が絡みながら複雑なプロセスを経て決定するため，〈母と子のテレビタイム〉ゾーンだけを取り出して，どのような意思決定で新設されたのかを解き明かすことは難しい。ただ，新設の経緯を間接的に推測する手がかりとして，〈母と子のテレビタイム〉の開始と同時に実施されるようになった幼児視聴率調査についてここで触れておきたい。

幼児視聴率調査とゾーンの関係

幼児視聴率調査は，東京30km圏の4～6歳の幼児を対象に1990年から始まり，1994，1995，2004年の3回を除いて毎年実施され，1996年以降は対象年齢を2～6歳に拡大して現在も継続している調査である[57]。1991年10月の『放送研究と調査』によると，調査のねらいについて「教育テレビ〈母と子のテレビタイム〉視聴の変化を把握することなどを目的に」とされており，明らかに〈母と子のテレビタイム〉ゾーン新設と軌を一にして始まった調査であるこ

とが分かる。

幼児視聴率調査を立ち上げたのは，当時の文研世論調査部である。幼児視聴率調査が始まった経緯について，立ち上げに関わった白石信子に尋ねたところ，〈母と子のテレビタイム〉新設理由を推測する手がかりを得ることができた。

白石は1981年入局，1985年に文研に異動してから，世論調査部で視聴者調査に携わっていた。もともと幼児・子ども番組に関心があった白石は，総合テレビから子ども番組が徐々に少なくなっていく気配に当時危機感を覚えていたという。背景には，1980年代後半，総合テレビの夕方の時間帯で，ニュース情報番組が拡大する一方，長年放送されてきた子ども向け番組が少しずつ撤退していたことがあった[58]。

白石 信子

白石　子ども番組が大事にされてないように思えたんですね。子どもたちが見るものがなくなってしまうって。それで，総合テレビから子ども向け番組がなくなるのであれば，教育テレビでどうでしょうと。

1988年，白石は，教育テレビの改定提案として〈母と子のテレビタイム〉の原型となる提案を編成局に出したが，それは採択されなかった。ところが，翌年，編成局の議論の中で，〈母と子のテレビタイム〉が新設されることになったのだという。

NHKの番組編集の基本計画をまとめた資料[59]によると，〈母と子のテレビタイム〉が新設される5年前，1985年の時点で教育テレビの編集方針の中に，すでに「総合テレビとの関連を考慮し，夕方に母と幼児のための時間帯を設け，利用の便を図る」という記述がある。そして同年から16時台に『おかあさんの勉強室』と『婦人百科』が，17時台に『おかあさんといっしょ』の再放送が始まっており[60]，教育テレビで「母と幼児のための時間帯を作る」という発想自体がすでにあったことが見て取れる。1980年代後半，総合テレビとの関係の中で，教育テレビの役割の見直しが模索されていた時期に，文研から提案が出され，〈母と子のテレビタイム〉新設のきっかけの1つになったと推測される。

〈母と子のテレビタイム〉が始まるにあたって，白石は子ども向けの視聴率調査が必要だと感じたという。というのも，総合テレビから子ども番組が撤退していった背景には，夕方の総合テレビの視聴率の不振があったが，その根拠とされる視聴率データには，“世帯視聴率”[61]が使われていた。世帯視聴率の調査の対象となるのは7歳以上で，幼児は含まれない。仮に世帯視聴率で低い数字を示していたとしても，年齢層別のデータをとって分析すれば，ターゲット層の子どもは見ていた可能性もあると白石は考えていた。

白石　それで，枠がスタートすると分かったときに，「幼児の視聴状況を確

認するための調査が必要だ」って上司に言ったんです。

〈母と子のテレビタイム〉ゾーンと，幼児視聴率調査は，当初から表裏一体のものとして設計されていたのである。

しかし当時の編成関係者によれば，〈母と子のテレビタイム〉は，開始当時，局内ではさほど期待されていなかった。というのも，教育テレビのメインは学校放送番組であり，学校での視聴を想定していたことから，家で見られる必要はないと考えられていたのである。

ゾーンが新設され，視聴の変化を把握する幼児視聴率調査が実施されることになったものの，そもそも教育テレビが見られることへの期待は高くはなかった。〈母と子のテレビタイム〉ゾーンが幼児を惹きつけるには，幼児にとって魅力的な番組をそろえる必要があった。

3-1-2 ２つの番組開発から始まる流れ

～『母と子のテレビ絵本』と『英語であそぼ』～

ここで1990年の〈母と子のテレビタイム〉ゾーンの内容について触れておく。当時のゾーンは，以下のような2時間だった。

16：00～『ともだちいっぱい』（再）
（幼稚園・保育所向け番組）
16：15～『にんぎょうげき』（アンコール番組）
16：30～『育児カレンダー』
17：00～『おかあさんといっしょ』（再）
17：25～『母と子のテレビ絵本』
17：40～『英語であそぼ』
17：55～『みんなのうた』

『おかあさんといっしょ』など，再放送番組が半数を占める中で，3つの新番組，『育児カレンダー』『母と子のテレビ絵本』『英語であそぼ』がスタートしている。このうち『育児カレンダー』は，妊娠中の女性から就学前の子どもを持つ母親に対象を限定した子育て情報番組なので，純粋に幼児・子どもに向けた新番組は『母と子のテレビ絵本』と『英語であそぼ』の2つである。以下，この2番組の開発の経緯について述べる。

『母と子のテレビ絵本』と『英語であそぼ』は同じ在宅向け幼児番組ではあるが，来歴は若干異なる。前者が『おかあさんといっしょ』制作チームが開発した番組であるのに対し，後者は従来の幼児番組の系譜とは全く別に誕生したものである。このあと，『母と子のテレビ絵本』は，長年蓄積されてきた幼児番組の制作ノウハウが引き継がれる“場”として機能し，『英語であそぼ』は，次々と別の番組に発展しながら，番組数を増やしていき，以降の〈母と子のテレビタイム〉を牽引していく大きな流れになる。

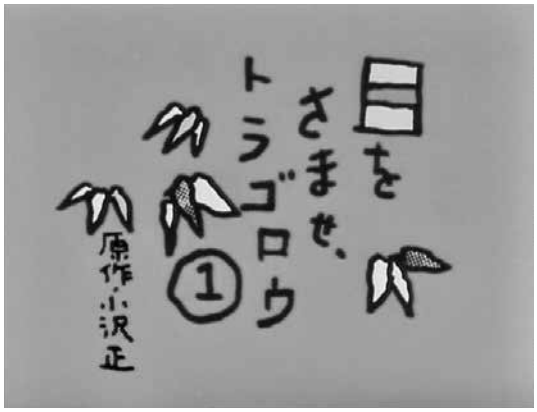
なお，2つの番組の流れを明確にするため，ゾーン新設期のみ，便宜上，前者の流れを（A），後者を（B）とする。

（A-1）『母と子のテレビ絵本』（1990～1996，2003～）

『母と子のテレビ絵本』は，国内外のさまざまな童話や絵本，児童文学などを，シンプルな動画と朗読によって構成する15分番組である[62]。後年，長編アニメーションとして映画化された『あらしのよるに』（原作：木村裕一）や『ルドルフとイッパイアッテナ』（原作：斉藤洋）などの作品をいち早く見出して番組化し，また，宮﨑あおいや中村獅童など，それまであまり幼児番組にはなじみのなかった俳優を読み手として積極的に起用した。

『母と子のテレビ絵本』を開発したのは，前述の近藤康弘，平田豊子らを中心とする教育番組センターの『おかあさんといっしょ』班である。それまで『おかあさんといっしょ』の特集番組で，絵本作家の五味太郎などの作品をリミテッド・アニメーション[63]のコーナーにし，視聴者から一定の反応を得ていたことから，独立した番組として提案したという。

平田　毎日の読み聞かせが大事だという意見は2歳研でもありました。それから，通常のアニメーションみたいに，派手に動くのではなく，リミテッド・アニメーションみたいなもののほうが訴えかけるとか，理解しやすいんじゃないかという2歳研の調査もありました。



第1回　「目をさませ，トラゴロウ」（絵：藤枝リュウジ）

『母と子のテレビ絵本』には，絵本など，原作の原画をそのまま使用して番組化したものと，原作からは物語のみを使用し，新たにオリジナルの絵をおこして番組化したものの2パターンあるが，後者では，さまざまなイラストレーターやアニメーターが起用され，その中にはのちに『ハッチポッチステーション』などの幼児番組でアートディレクターとして関わることになる藤枝リュウジがいる[64]。

番組の立ち上がりは1989年の暮れ。翌年の4月からデイリーで放送することが決まっていたため，原作の選定，脚本家，イラストレーター，アニメーターの手配と業務の発注など，やらなければいけないことは膨大にあったという。

平田　「どういう本を取り上げるか」という会議は12月にやっていたんです。けれども，本当のゴーが出たのは，確か年が明けてからだと思うんです。そこで，10分の番組をイラストで構成するから，絵を頼むのに，結構な枚数が必要なんですよ。それで最初，私の知り合いのイラストレーターで，かなり描ける人をキープして，何人にもいっぺんに発注したんです。

短期間の準備期間でなんとか番組は立ち上がった。翌1991年に，『母と子のテレビ絵本』の制作チームは，『おかあさんといっしょ』班に続いてNHKエデュケーショナルに転出することになった。

前述の古屋光昭は教育番組センターで『おかあさんといっしょ』の制作を半年間経験したあと，番組班がNHKエデュケーショナルに転出するまでの1年弱の間『母と子のテレビ絵本』の制作に関わっている。当時入局2年目だった古屋は，長年幼児番組に関わってきた先輩たちの下で番組制作を経験したことで，さまざまなことを学んだという。

古屋　最初の1，2年のときに3人先生がいて，近藤さんはいわゆるプロデュースの先生。で，川崎さん（川崎貞夫ディレクター）は演出の先生なん

です。あと，平田さんは働き方とか，いわゆる作家さんとのつきあい方が，やっぱりすごいんですよ。独特の距離感で，意のままに作家さんたちを操る。だから『テレビ絵本』は本当に楽しかったし，いろんな演出や，番組を作る組み立ての勉強をすごくさせてもらいました。

古屋は翌年の1992年に鳥取局に異動になるが，入局から2年余りの期間に『おかあさんといっしょ』と『母と子のテレビ絵本』の現場を経験したことが，以後のさまざまな幼児番組制作に生かされることになる。

『母と子のテレビ絵本』は1996年に一度放送が終了したが，2003年に『てれび絵本』とタイトルを変更して放送を再開，「えほん寄席」や「水木しげるの妖怪えほん」などのシリーズも生まれ，現在も継続している。

番組自体は，別の形に発展するという展開は見せなかったが，プロデューサーの近藤康弘は，『母と子のテレビ絵本』以降にいくつかの幼児番組を立ち上げている。時代区分を先取りすることになるが，ここでそれらの番組について触れておく。

(A-2)『ハッチポッチステーション』(1996～2003)，『クインテット』(2003～2011)，『フックブックロー』(2011～2016)

『ハッチポッチステーション』は，アートディレクターとして藤枝リュウジを起用，セットやキャラクター，ロゴなど番組全体をデザインすることで，映像的に洗練を図った。またクイーンやキッスなどの70年代の洋楽をパロディにして取り上げるという意外性と相まって，子どもだけでなく“大人も一緒に楽しめる幼児番組”の先駆けになった[65]。

『ハッチポッチステーション』(1996～2003)

以後も近藤は，2003年に，クラシック音楽をパペットが巧みに演奏する『クインテット』を，2011年に，古本屋を舞台に，童謡からポップスまでさまざまな分野の歌を紹介する『フックブックロー』を立ち上げた[66]。

近藤の関わった幼児番組は，幼児が楽しめるように作られてはいるが，そこには必ず“大人”というフィルターが介在しており，「“大人”が子どもに見せて安心できる」「子どもと一緒に“大人”も楽しむことができる」という側面がある。それを端的に示すのが，『おかあさんといっしょ』を始めとして，近藤の関わった幼児番組では，“演じ手は大人が務める”という点で一貫している点である。そこには「ちゃんと見せたい，伝えたい」という，幼児に対する“大人の常識”的な眼差しが感じられる。

それとは対照的に，次に述べる『英語であそぼ』を始めとする番組群では，ともすると規範的になりかねない大人の配慮を越えて，より「幼児自身が面白いと思う」感覚に訴えかけるような番組が登場していく。具体的には，従来は幼児を視聴対象にすることは考えられなかったテーマを取り上げたり，それまで対象外だった年齢の幼児に対してまで範囲を広げたりすることで，新機軸の幼児番組が次々と開発されて

いった。また演出面でも次第に子ども自身が演じる主体となって前面に現れてくることになる。

(B-1)『英語であそぼ』(1990～)

『英語であそぼ』は，遊び感覚で英語を楽しんでもらおうと，アニメーション，歌，体操，キャラクターとのかけあいなど，幼児番組ならではの演出を凝らして開発された幼児・子ども向け番組である。『母と子のテレビ絵本』が，『おかあさんといっしょ』とほぼ同じ年齢層を視聴対象に想定していたのに対し，『英語であそぼ』は，それよりも少し上の世代の視聴層を想定していた[67]。

番組を企画したのは，さまざまな幼児・子ども番組の開発の中心人物となった中村哲志である。中村は1971年入局，青少年幼児番組で『少年ドラマ』シリーズなどの少年番組や『マルコポーロの冒険』[68]などのアニメーション制作に関わったあと，金沢局勤務を経て，1989年に設立したばかりのNHKエデュケーショナルに異動してきた。中村は引き続き番組制作を希望したが，配属されたのは営業部だった。

中村 哲志

> 中村　営業といっても，できたばかりの会社だから，現在と違って，ビデオとか本とか，グッズなど売るものは何もないわけ。1年弱経っても成果はほとんどなかった。それで，営業をしていてもダメだと。それで，もともと事業をやるってことは分かっていたので，事業展開に結びつくような番組を開発して，そこからメディアミックスをすすめるのが早道だと方針転換をしたわけです。

以降，中村は『英語であそぼ』を始め，新たな幼児番組を次々と開発していくが，その背景には5年間東京から離れ，地方局に勤務していたことも大きいという。『英語であそぼ』の着想も，東京から離れていたからこそ得たものだと言える。

> 中村　5年ぶりに東京に戻って電車に乗っていると，英語の塾のポスターがやたらと目についてきて，英語はこれからの日本ではいずれ必要になると思っていたけど，それがはっきり出てきていることが分かった。だとすると，いずれ子どもにも来るなと思った。それで，子ども向けの英語番組をやると，ニーズがあるんじゃないかって考えたんだよ。

しかし，それまで中村が関わっていたのは，主に少年向け番組[69]であり，幼児・子どもに向けた番組制作は初めてのことだった。幼児から少年は年齢的には連続しているとはいえ，視聴対象の年齢が異なれば，番組の演出手法も異なる。当時『おかあさんといっしょ』のプロデューサーだった近藤によると，中村が『おかあさんといっしょ』を参考にしたいと話を聞きに来たと

いう。

> 近藤　『英語であそぼ』の立ち上げのとき，彼は少年ドラマ志向で，幼児番組はあんまり経験していないから，どうやって考えていいか分からなかったんじゃないか。彼が地方から帰ってきて，「こういう新番組作るから，「『おかあさんといっしょ』の台本を貸してください」と言うので，持って行って一生懸命研究していた。だから，ベースは『おかあさんといっしょ』のフォーマットにのっかって，それを英語化したんだと思います。

実際，当時の『英語であそぼ』には，歌や体操のコーナーが含まれ，着ぐるみのキャラクターも登場しており，『おかあさんといっしょ』から大きな影響を受けていることが分かる。幼児・子ども向けの英語番組という，これまでにないものを生み出すために，中村は，従来の幼児番組の演出手法を取り入れた。

その一方で，中村はCGアニメーションなどの新たな技術やセルアニメーションも積極的に取り入れている。とりわけCGアニメーションについては，1990年代の幼児・子ども向け番組の重要な演出手法として確立していくことになる。

『英語であそぼ』体操コーナー「ロックンロール・ベイビー」

さらに，視聴者のニーズに応えるため，番組の二次展開にも積極的に取り組んだ。映像や出版，キャラクターグッズを手がける企業など外部の事業者とライセンス契約を結び，メディアミックスを図る方式がとられた。番組のクオリティを上げるため，外部デザイナーとしてイラストレーターの松下進[70]を起用して，キャラクターや衣装，スタジオのデザインなどを依頼した。

こうしたメディアミックスの仕組みや，外部人材による番組のトータルデザインなどは，従来の幼児番組制作の枠組みにはおさまらないものだった。これは，NHK本体が委託元となり，関連団体のNHKエデュケーショナルが制作を請け負うという図式の中で，必要性に迫られて生まれた発想と言える。

> 中村　ビジネスというほどのことじゃないけど，ビデオとか，メディアミックスを前提でアニメを作っているから，当然リクープ（資金回収）しないといけない。簡単に言うと，“作って放送して終わり”というわけにはいかない。利益を出していくって前提があるので，ブランドを意識する。NHKでは，そういうことはまずできなかったと思います。

幼児・子どもに向けた英語番組を，NHKの関連団体で制作するという試みは，いくつもの意味で挑戦的だったが，番組は視聴者である幼児・子どもと保護者から好評をもって迎えられた。『NHK年鑑1991』には，「国際化時代に対応した企画が好評で，アンコール放送の希望も多く，祝日や年末に特集番組としても放送された」と記されている。『英語であそぼ』はそれ以降，出演者やキャラクターなどを2，3年おき

に刷新しながら，また番組タイトルも2005年以降は『えいごであそぼ』と平仮名表記に変わっているが（現在は『えいごであそぼwith Orton』），放送開始から29年間経過した今も継続している。

（B-2）『ひとりでできるもん！』（1991～2006）

翌年，中村はもう1つ新たな幼児番組『ひとりでできるもん！』の開発に関わっている。『ひとりでできるもん！』は，子どものための料理番組で，『NHK年鑑1992』に以下のように記されている通り，当時大きな反響を呼んだ[71]。「新番組『ひとりでできるもん！』は，幼児ばかりでなく，小学生や中高生，大学生からヤングママにまで幅広く支持され，大きな話題を呼んだ。幼児の料理番組は，包丁を持たせたり，火を使わせたりすることが危険につながるとして，今までタブーとされてきたが，料理の持つ創造性は幼児の発育に有用と判断し，あえて挑戦した姿勢は，幼児教育の専門家からも評価された」。

番組の着想について，中村は以下のように述べている。

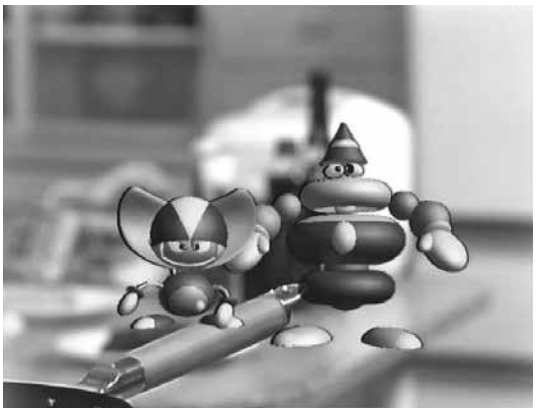
> 中村　男の料理本というのが出ていて，お父さんが日曜日に料理をするのが盛んにもてはやされていた。だったら子どもにも来るなって，その発想はすぐ出てきた。ただ，子どもが台所に入っていくと，やっぱりデンジャラスな面がいっぱいあるので，なかなか難しい部分もあった。当時，世の中に「子どもに料理を」という発想はほとんどゼロだった。だけど，実際はお母さんの指導があったり，家族全体でやるというケースになるわけだから，ひとりでやるわけじゃない。家族でやるんだったら，お父さんひとりだけでやるよりも，子どもを積極的に巻き込んでやるほうがずっといいと思ったわけ。子どもの料理のハウツー番組というのはいけるなと思ったんだよ。

番組を立ち上げるにあたって，最も懸念されたのは，「包丁」の取り扱いだった。

> 中村　これが大会議になって，「怪我したらどうするんだ，誰が責任とるんだ」という話になる。どんなに注意したって，怪我する可能性はある。でも，包丁使わないと，卵料理とか，サラダ作ったりするしかないんだよ。やはり，いずれ包丁を扱わない限りは，料理にならないので，「それができないのなら，この番組はやってもしょうがないからやめましょう」と言ったら，その場がシーンとなった。

中村は包丁を番組の中で取り扱うにあたって，細心の注意を払い，演出面で工夫をしている[72]。1つは，アニメキャラクターの媒介である。子どもひとりで包丁を扱わせるのではなく，大人の代替的な存在として「クッキング」というアニメキャラクターを登場させ，「まな板を安定させること」「よく切れる包丁を使うこと」「持ち手でないほうはネコの手のように丸めること」など，包丁を扱う際の注意点を細かく指摘させている。さらに，包丁を使う際のポイントを歌にしたり，ロールプレイングゲームのようなアニメ画面で，正しい包丁の使い方をクイズ形式で選択させたりして，注意点を子どもが分かりやすく覚えられるように，さまざまな方法で，それこそしつこいと思えるくらいに徹底して伝えている。これらの配慮が功を奏したのか，子どもが包丁を使って

『ひとりでできるもん！』まいちゃんと“クッキング”


CGキャラクター「オジャマー」と「ヤジャマー」

怪我をしたという苦情は1件も寄せられなかったという。

もう1つ，『ひとりでできるもん！』で触れておくべき点は，実写とCGキャラクターの合成という新たな演出手法を導入したことである。主人公のまいちゃんの傍らには，前述の「クッキング」という大人のアニメキャラクターとは別に，ゲームの世界から飛び出した「オジャマー」「ヤジャマー」というCGキャラクターが実写の画面上に登場し，料理をゲーム感覚で楽しむという演出効果を上げている。このキャラクターには，データグローブという新しい技術が取り入れられている。センサーのついた手袋によって動きを操作することで，今までよりもずっとCGを安価に扱うことができるようになり，それまで難しいとされた実写とCGの合成が可能になった。

> 中村　もともとCGは，日本ではゲームのキャラクターの印象が強かった。立体的なキャラは子どもを惹きつける力が強い。そこで，CGの表現の新しさを売りにした。

デジタル技術の進化により，1990年代，CGアニメーションを積極的に取り入れた子ども向け番組（民放では『ウゴウゴルーガ』[73]，NHKでは『音楽ファンタジー・ゆめ』[74]など）が誕生し，一般化していく。またCGと実写の合成という演出手法は，『天才てれびくん』[75]や『天才ビットくん』[76]などの子ども番組で，より効率的に合成を行うことが可能なバーチャルセットを使う形で発展的に受け継がれていく。

『ひとりでできるもん！』は，出演者を変えたり，タイトルをマイナーチェンジさせたりしながら，2006年3月まで15年間続いた。それ以降も，幼児向けの料理番組は，実写とアニメーションを組み合わせるなど，演出をいろいろ変えながら，現在まで継続している[77]。

『ひとりでできるもん！』開発の翌1992年，中村はNHKエデュケーショナルから，NHK番組制作局ファミリー番組プロダクションにプロデューサーとして異動，しばらく幼児向け番組の制作現場から離れることになるが，その間も1993年には『天才てれびくん』，1994年には『週刊こどもニュース』[78]など，新たな子ども向け番組の立ち上げに次々と携わった。なお『天才てれびくん』が18時台に小学生の視聴層を獲得したことで，〈母と子のテレビタイム〉ゾーンの守備範囲は広がり，より強固なものになっ

たことを付言しておく。

3-1-3 ゾーン新設期の小括

1980年代後半，総合テレビから子ども番組が姿を消していく中で，その受け皿として1990年に教育テレビで〈母と子のテレビタイム〉ゾーンが新設され，同年『母と子のテレビ絵本』と『英語であそぼ』の2番組が，翌1991年に『ひとりでできるもん！』が開始される流れを見てきた。また，当初夕方だけだったゾーンに，8～9時に午前中1時間のゾーンが同年加わった。

以下にゾーンに対する当時の評価をまとめる。1990年の幼児視聴率調査では「夕方5時台については，教育テレビの『おかあさんといっしょ』（再），『母と子のテレビ絵本』，『英語であそぼ』がそれぞれ見られている」ことが明らかになった[79)]。

翌1991年には，「朝8時台と，番組内容を刷新した夕方4時台で視聴率が大きく増加した」ことが報告されており，開始2年目にして，「はっきりとターゲットである幼児とその母親を対象とした番組を編成したことは，視聴者ニーズに応えるとともに，見やすさという点からも成功した」と述べられている[80)]。同調査によると，1990年当初の局別平均視聴率（週平均）では，フジが4.0%とトップ，教育テレビは1.2%で，テレビ朝日，テレビ東京に次ぐ4位だったが，1993年にかけて教育テレビの視聴率が急速に上がり2位になった。ゾーンは順調なスタートを切ったと言える。

また『NHK年鑑1991』では「視聴率的にも好結果を生み，“視聴対象を限定したゾーン編成”という，教育テレビの新しい可能性を示した」と総括された。

以後，このゾーンでは，幼児視聴率調査の結果から得られた幼児の実態やニーズをもとに，編成戦略を立てながら，次々と新番組開発を行っていくことになる。

3-2 ゾーン発展期（1996年～2002年）

ここでは，ゾーンが視聴者に少しずつ定着していく中，1996年に始まり，ゾーンの視聴層を大きく拡大する役割を果たした2つの番組について触れる。

1つは前出の『ハッチポッチステーション』である。既述の通り『ハッチポッチステーション』は，“大人も一緒に楽しめる幼児番組”として成功し，視聴者層を大きく広げた。

そして，『ハッチポッチステーション』とは逆方向に視聴者層を広げた，もう1つの番組が『いないいないばあっ！』である。

3-2-1『いないいないばあっ！』（1996～）

1996年，世界でも例のない，0～2歳児を対象にした番組『いないいないばあっ！』がスタートした[81)]。

『いないいないばあっ！』には，演出的な特色がいくつかあり，乳幼児の関心を惹きつけるとともに，一緒に番組を見ることが想定される保護者と子どもとの間のコミュニケーションが活発になるような配慮がされている。

乳幼児の関心を引くために，メインの出演者には小学生の女の子を起用し，体操のコーナーなどで出演する子役として，視聴対象と同じ年齢の乳幼児に出演させている。これらは，画面の登場人物を，視聴者にとって近い存在として

『いないいないばあっ!』(1996～)

認識してもらい，注意を惹きつけることをねらった演出である。また着ぐるみキャラクターのワンワンは，操演と声を同一人物のチョー[82]が担当しているが（着ぐるみの操演と声は別の人間が担当する場合が多い），これも，スタジオで乳幼児と触れ合う中で，臨機応変に対応できるようにするための工夫と言える[83]。

さらに，親子のコミュニケーションを高める配慮として，動きと音楽を組み合わせて視聴者が自然と模倣したくなるようなコーナーや，食事，排せつ，昼寝など，視聴者と同じ年齢の子どもの日常の場面を提示するコーナーを設け，普段の生活の中で親が乳幼児と関わったり，遊んだりするためのヒントを具体的に盛り込んでいる。

中村は当時，NHKファミリー番組部に所属しており，開発プロデューサーとして関わっている。

> 中村　『おかあさんといっしょ』の主たるターゲットは3歳児だけど，2歳も見ているというのは分かっていた。2歳研までやっていたしね。そこまでやっているのだったら，「番組をまた別に作ればいいんじゃないの」という意見は当時でもあったと思う。でも，今でもありますけど，「テレビをそんな低年齢に見せていいのか」という議論もやはりあって，『おかあさんといっしょ』の当時の番組スタッフはそこまでやる必要はないと思っていたんじゃないかな。1つの見識としてね。でも，「作ったらどんなものになるの?」という思いのほうが僕は強かった。それで『おかあさんといっしょ』の下の年齢向けの番組を開発することになったわけです。

幼児視聴率調査の結果によると，『いないいないばあっ!』は，放送開始当初こそ全局別高位番組には入っていないが，2000年以降，2～4歳児のそれぞれの年代で，ほぼ常に全局ベスト10番組に入るほどの人気番組になっていく。また近年では，アジア各国で『いないいないばあっ!』が放送されるようになり，NHKエデュケーショナルが制作支援を行いながら，2017年からは中国版，ベトナム版，2019年にはミャンマー版が制作されている。

3-2-2 乳幼児のテレビ視聴についての議論

一方，『いないいないばあっ!』の放送と直接的な因果関係はないものの，2000年前後から，国内外で乳幼児のテレビ視聴について，批判や慎重な考え方が出てくるようになる。

1999年，アメリカ小児科学会から「2歳以上で質の高いメディアを使用する場合の教育効果は認め得るものの，2歳未満のメディア使用については，質，量にかかわらず制限すべき」等の声明が発表された。

2004年1月には，日本小児科医会から，テレビ，ビデオなどのメディア接触の低年齢化と長時間視聴を懸念し，2歳児以下のテレビ・ビデオ視聴を控えることが提言された。また，日

本小児科学会からも，2歳以下の子どもにテレビ・ビデオを長時間視聴させないことが提言され，長時間視聴による言語発達の遅れの危険性が指摘された。他方で，これらの提言に対し，十分な科学的な根拠がないという小児神経学会による指摘もあり，乳幼児のテレビ・ビデオ視聴に関する議論が活発化していった[84]。

こういった動きと前後して，2001年，文研では，教育学，心理学，医学などの関連分野の第一人者の研究者と共同し，「“子どもに良い放送”プロジェクト」を発足させている。乳幼児期からテレビなどの映像メディアに囲まれて生きる現代の子どもたちが，どのような影響を受けて育つのか，また，映像メディアとの接触が子どもたちの発達にどのような効果や影響をもたらし，そこに親や大人がどのように関われるのか，科学的に調査・研究するというプロジェクトである。2002年生まれの子ども約1,200人を対象に，1年ごとに子どもたちの成育に合わせ，継続的に追跡調査するというものである[85]。

同プロジェクトの2006年の調査報告書によると，1歳児のテレビ接触時間[86]は1日3時間半程度で，そのうち2時間25分は大人が一緒にいること，またテレビへの専念度では，「専念して見ていた」のは12％で，半数程度は「ついているだけ」であり，チャンネル別に見ると，民放各局とNHK総合では圧倒的に「ついているだけ」が多く，教育テレビでは「他のことをしながら見ていた」と「専念して見ていた」の割合が他のチャンネルより多いことなどが報告されている。これらの結果は，必ずしも小児科医会などから出された懸念を払拭するものではないが，幼児のメディア接触をめぐる現状を客観的に報告するものになっている[87]。

また文研は，2002年，国内の教育関係の研究者や内外の番組制作者を招いて，「子どもの発達に望ましいテレビ番組とは何か」という国際シンポジウムを開催し，教育テレビで放送した[88]。BBCで放送された『テレタビーズ』[89]の制作者や，『いないいないばあっ!』の当時のプロデューサーである坂上浩子が登壇し，どのような工夫や配慮をしているか情報交換し，認知心理学者や発達心理学者からの意見を交えつつ，子どもの発達にテレビがどのような役割を果たせるかを議論している。

『子どもの発達に望ましいテレビ番組とは何か』（2002）

その中で，坂上は，核家族化や都市化の進展等により日本の子育て環境が弱体化する中で，幼児向け番組が親の子育て支援の機能も担っている側面があることを指摘し，文研が行った観察実験の結果を紹介している。実験では，1歳0～11か月の乳幼児と母親50組に『いないいないばあっ!』の映像を見せ，映像を視聴している様子を観察した。その結果，たいそうのコーナーなどでリズムに合わせて親子が同じような動きをしていることや，アニメーションのコーナーで，親子のコミュニケーションが活発に行われていることが観察された。

幼児の映像メディア視聴に対する社会的な懸念を背景に，〈母と子のテレビタイム〉ゾーンの

番組群は，幼児の発達に配慮した番組制作を行い，子育て支援機能を担ってきた面もある。これらのことは，〈母と子のテレビタイム〉ゾーンが保護者たちからも支持されるようになった要因の1つであると考えられる[90]。

3-2-3 ゾーン発展期小括

1996年，大人も楽しめる『ハッチポッチステーション』と，乳幼児向けの『いないいないばあっ!』が開始したことで，ゾーンは視聴層を大幅に広げることに成功した。1996年，幼児視聴率調査で教育テレビは全局中で首位になり，以後その地位を維持し続けている。また1998年，『おかあさんといっしょ』の本放送が総合テレビからゾーン内に移動してきた。それに伴い午前の開始時間が7時30分に前倒しされ，ゾーンが1時間30分に拡張された。『おかあさんといっしょ』が組み込まれたことで，ゾーンはより強固なものになっていった。

3-3 ゾーン拡充期（2003年～現在）

ここでは，2003年に『にほんごであそぼ』と『クインテット』の2番組が始まったのを皮切りに，立て続けに新たな幼児番組が開発され，ゾーンが拡充していく2000年代以降について述べる。この時期，現在のゾーンを構成する基本的な番組が開発されている。

3-3-1『にほんごであそぼ』（2003～）ほか

『にほんごであそぼ』は，日本語の豊かな表現に慣れ親しみ，遊びながら「日本語感覚」を身につけてもらうことをねらった番組である。当時ベストセラーになっていた『声に出して読みたい日本語』を子ども向けに翻案した企画であり，実際，著者の齋藤孝が番組の総合指導役として参加している。番組は，古典や古くからの言い回しなどさまざまな日本語表現を用いたコミュニケーションを盛り込みながら，狂言師の野村萬斎が身体表現するコーナーや，講談師の神田山陽が物語るコーナー，擬音や平仮名をテーマとしたアニメーション，日本各地の方言を紹介するコーナーなどさまざまな要素で構成されている。

『にほんごであそぼ』（2003～）

「子どもに古典は分からない」という常識を覆し，放送開始直後から大きな反響を呼んだ。番組を見た子どもたちが，野村萬斎が演じた新作狂言『まちがいの狂言』のセリフ「ややこしや」を唱えたり，落語の「寿限無」を暗唱したりするなど，番組が発端となり一種の日本語ブームとも言える現象が起きた[91]。

また，番組にはアートディレクションとしてデザイナーの佐藤卓[92]が，衣装デザインとしてひびのこづえ[93]が参加し，斬新かつ高いクオリティの映像表現を実現したことが評価され，2004年にテレビ番組初のグッドデザイン大賞を受賞している[94]。

『にほんごであそぼ』は，当時『いないいないばあっ!』のプロデューサーだった坂上浩子が企画した[95]。中村もNHKエデュケーショナル子ども幼児部の部長として開発に関わっている。

> 中村　子どもたちにとって，言葉が大事だというのがもともとあったので，ネタそのものはなんの問題もないんだけど，齋藤孝さんの本で扱っているのは古典なんだよね。それは子どもに言ったって普通は分からないという話なんだけど，言葉のリズムとか，日本人である以上，それは文化としてあるわけだから，それならば「やろう」ってことになった。

メインキャラクターには，日本語が得意ではないが，巨体で子どもに親しまれるハワイ出身の元力士KONISHIKIを起用した。あえて異色のキャスティングをすることで，番組全体の自由度が上がり，ゾーン全体にも勢いをつけた。

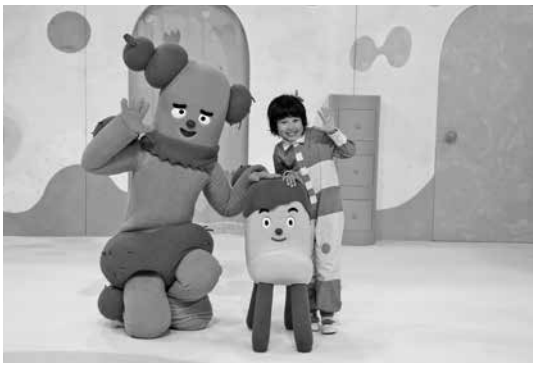
『にほんごであそぼ』を皮切りに，2004年には，身体を使ってさまざまな動作を行う『からだであそぼ』が開始された。2005年には，10年以上続いてきた『英語であそぼ』にデザイナーの佐藤可士和[96]がアートディレクションとして参加し，『えいごであそぼ』として大幅にリニューアルした。また2008年には小学校低学年を対象に，“目覚める”ことをテーマにした『シャキーン!』のレギュラー放送が始まり，朝7時台のゾーン開始に弾みをつける番組として定着した[97]。

これらの新番組が次々に開発される中，2006年，これまでNHK本体で幼児番組を制作してきた幼児番組班が，NHKエデュケーショナルに班全体で転出し，幼児番組の制作機能が完全に移行した。このことによって，結果として制作ノウハウが一括して蓄積されることになり，一貫した制作編成方針を維持することが可能になった。加えて，番組制作と一体化した二次展開やメディアミックスを行うことにより，視聴者のニーズにきめ細かく応える体制を構築することにもつながった[98]。

3-3-2『みいつけた!』(2009～)

『ひとりでできるもん!』や『にほんごであそぼ』など，料理や言葉など個別分野をテーマにした番組とは別に，“総合番組”として開発されたのが『みいつけた!』である。それまで総合番組は，0～2歳児向けの『いないいないばあっ!』と，2～4歳児向けの『おかあさんといっしょ』の2番組だけだった。『みいつけた!』は，その上の年齢層の4～6歳を視聴対象に想定して開発された。

『みいつけた!』は，椅子のキャラクターのコッシーと，サボテンのキャラクターのサボさん，そして人間の女の子のスイちゃんのユーモラスなコミュニケーションを交えながら，「友達と遊ぶ楽しさ」「いのちの不思議」「自分でできる喜び」「相手を思いやる気持ち」など，身近な暮らしの中のさまざまな「発見」を楽しむことをねらいと



『みいつけた!』(2009～)

している。開発にはやはり中村が関わっている。

> 中村　いろいろ整理して考えると，『いないいないばあっ！』とか『おかあさんといっしょ』は年齢で区切って作っていて，そういう“総合”というか，“中核”をなす番組と，その時代時代のニーズに応えて開発する『英語であそぼ』のようなものと，２種類あるんじゃないかと思った。そういう専門的な番組はなくなったり，新しいものになったりする。だけど『いないいないばあっ！』とか『おかあさんといっしょ』というのは，ずっと続いていくことを前提に作っていく番組じゃないかと。あまり意識してなかったんだけど，『にほんごであそぼ』が当たったので，「当たり番組を作り続ければいいじゃない」という感じになりがちなんだけど，それを整理する必要があるなって。だったら『おかあさんといっしょ』のあとの年齢層向けの番組も必要だって思ったんだよ。

幼児視聴率調査によると，2010年以降，『みいつけた！』は，NHK・民放全体で幼児によく見られている番組ベスト10に入り，また年齢別でよく見られている上位番組にもほぼ毎年入る人気番組になっている。なお2011年，『みいつけた！』は，「第38回日本賞」幼児向けカテゴリーで最優秀賞（総務大臣賞）を受賞している。

3-3-3 拡張期小括

2003年，『にほんごであそぼ』と『クインテット』の２番組が開始したことを契機に，以降数年にわたって新番組開発ラッシュが続き，ゾーンの充実化が図られていった。その中から『みいつけた！』のような，ゾーンの核となる新たな総合番組も生まれた。番組の増加に伴い，午前中のゾーンの放送時間が段階的に増え，2003年には7時10分から，2007年には7時からゾーンを開始することになった。

2000年以降やや低落傾向を示していた幼児視聴率は，2003年に盛り返し，以降も新番組を開発することで，視聴率の増加を図っている。

また，年齢別に全局の高位番組を見ると，2007年の時点で，2歳でトップ10のすべての番組が〈母と子のテレビタイム〉ゾーンの幼児向け番組で占められた[99)]。また3歳，4歳，5・6歳のすべての層で，2003年以降は，民放のアニメ・特撮番組と並んで，1つ以上の幼児向け番組がトップ10にランクインするようになり，特定の年齢層に限らず，幅のある年齢層で見られるようになった。

3-3-4 ゾーンの完成

本節の最後で，〈母と子のテレビタイム〉ゾーンで開発された幼児・子ども番組群と，先行番組『おかあさんといっしょ』の関係について述べる。

ゾーンで開発された幼児・子ども番組群には共通する特徴がある。それらのほとんどは短いコーナーを積み重ねた“セグメント構成”で，その中には「うた」や「たいそう」などのコーナーが含まれている。これらは，『おかあさんといっしょ』が，視聴対象である幼児の注意・関心を惹くために長年蓄積してきた番組制作のノウハウと研究の成果を，別の番組という出し口で引き継いだと言える。多くの番組開発に関わってきた中村は次のように述べている。

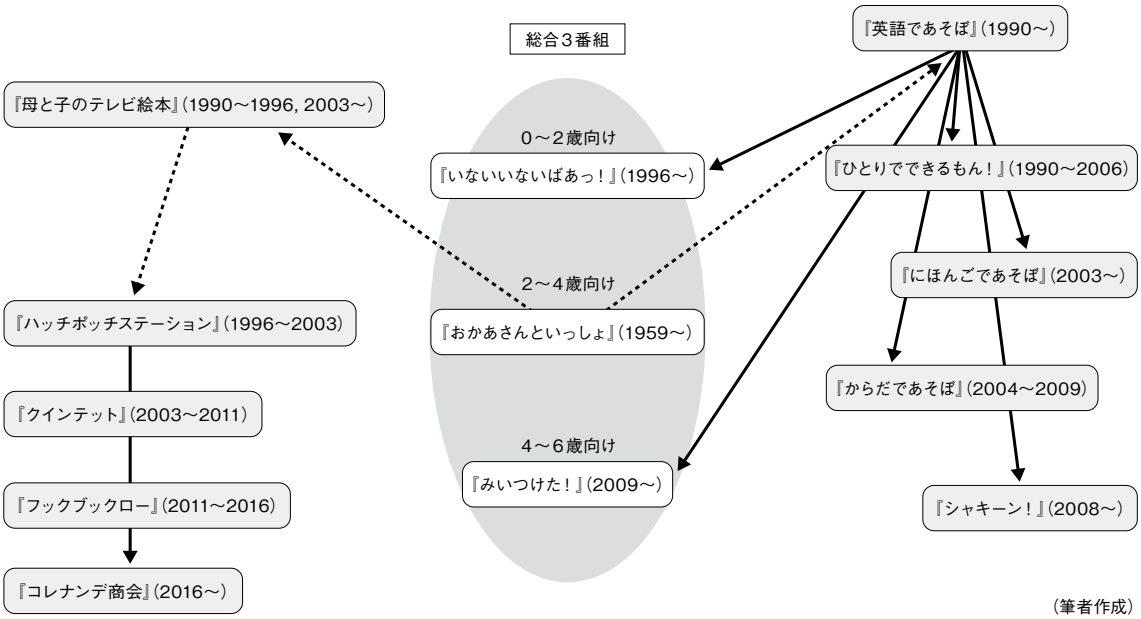
中村　3番組（0～2歳児向け総合番組『いないいないばあっ！』，2～4歳児向け『おかあさんといっしょ』，4～6歳児向け『みいつけた！』）がそろい踏みして，一応責任は果たしたというのは，言ってみれば『おかあさんといっしょ』を拡大した，ということだと思うんだよ。だから『おかあさんといっしょ』が（1998年に）教育テレビのゾーンの中に入ることによって，本当の意味でのゾーンになったんだよ。それと，『おかあさんといっしょ』という，ある種伝統的な作り方の番組があると同時に，もっと違う演出のスタイルや，表現を用いたいろいろな番組があっていい。そういう両輪で豊かになっていける。別に『おかあさんといっしょ』だけなぞっていればいいなんて思ったことはないんだけど，やはり『おかあさんといっしょ』という核があったから，そこに，だんだんゾーンとして，地味にいろいろやりながら，鍾乳石ができるように広がっていったんでしょうね。

『おかあさんといっしょ』を核として，1990年『母と子のテレビ絵本』と『英語であそぼ』の2番組が始まり，さらにそこからさまざまな番組群が，長い時間をかけて，それこそ“鍾乳石”のように少しずつ形成されていった（**図6**）。

また，長年『おかあさんといっしょ』に関わってきた近藤も，長寿番組の蓄積があったからこそ，さまざまな番組開発を継続して行うことが可能だったと指摘している。

近藤　「子ども向けはこういうふうに作ったほうがいいよ」という，演出上の考え方などの面でも，『おかあさんといっしょ』が果たした役割は大きかった。『おかあさんといっしょ』がな

図6　〈母と子のテレビタイム〉ゾーンの幼児・子ども番組群



（筆者作成）

ければそのほかの番組はできなかった。1本だけ作る人には，なかなかそれは分からないと思います。

以降も，2011年に，身の回りに当たり前に存在しているモノや空間をデザインの視点から見つめ直すことで，デザインの面白さを発見してもらい「デザイン的思考」を育むことをねらいとする『デザインあ』[100]，2015年に，「自然界の似たもの探し」をキーワードに，知的好奇心を触発し，観察眼と想像力を働かせて自分で考えることを促す『ミミクリーズ』[101]など，いくつかの新番組が生まれている。

3-4 幼保向け番組と在宅向け幼児番組の統合

ここでは，長年教育テレビで放送されてきた幼保向け番組が，在宅向け幼児番組に統合されていく過程について述べる。

既述の通り，教育テレビは，もともと教育専門テレビ局として学校放送番組を中心に編成され，幼児番組に関しては幼保向け番組が長年放送されてきた。しかし，幼保向け番組は1980年代から利用率が低下し，2007年以降，次第に番組枠が減少，2011年には長年継続してきた午前中の放送枠が〈母と子のテレビタイム〉ゾーンに統合されることになった[102]。長年別のものとして制作されてきた幼保向け番組が，在宅向け幼児番組に統合される契機を作ったと言える番組が『ピタゴラスイッチ』である。

『ピタゴラスイッチ』（2002～）

『ピタゴラスイッチ』（2002～）の誕生

『ピタゴラスイッチ』は，2002年に“考え方を育てる”ことをテーマにした番組として始まったが，さまざまな意味で，これまでにない，新しいタイプの幼保向け番組だった。

まず，“考え方を育てる”というテーマは幼稚園の指導要領の5領域（健康，人間関係，環境，言葉，表現）には含まれてはいない。加えて，幼保向け番組でありながら，番組の作りは従来のものとは大きく異なり，全体を通した出演者や筋立てがあるわけではなく，さまざまな演出の，複数のコーナーで構成されており，『おかあさんといっしょ』などの在宅向け幼児番組に近い。また，映像表現としても，極力説明を排して，不可思議に思えるものに見入るうちに，いつの間にかその不可思議さの理由が腑に落ちてしまうことをねらうという，非常に実験的な試みをしている。

番組開始当時，本編の放送時間は火曜午前9時15分だった。多くの人が目にする時間帯ではなかったが，初年度から夕方の〈母と子のテレビタイム〉で5分版の『ピタゴラスイッチミニ』[103]を放送していたこともあり，ビー玉がさまざまな道具の中を巧みに転がっていく「ピタゴラ装

置」や，動きが組み合わさることで見方が変わる「アルゴリズムたいそう」などのコーナーが話題になった[104]。

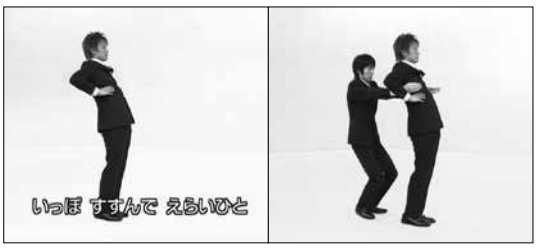
『ピタゴラスイッチ』を開発したのは，長年『おかあさんといっしょ』を担当してきた古屋光昭である。2001年にNHKエデュケーショナルこども幼児部からNHK青少年こども番組部に異動した古屋は，上司から新たな幼保向け番組を開発するように言われる。そこで，“考え方”をテーマに据えることになるのだが，そこにたどり着くまでに，紆余曲折があったという[105]。

> 古屋　「自分が面白いと思っていることって何だろう」っていろいろ書き出してみたんです。そのとき「あっ!」と思ったのが，回転寿司なんです。回転寿司のお皿の計算で，店員さんがどうしてパッと見て「9皿」と言うのかと思ったら，要はその人は，醤油さしなり，湯飲みを物差しにして「これが7皿分だから，あと2皿で9皿」という計算をしていることにある日気づいて，そういうのってすごく面白いなと思ったんです。それで，「こういうことをやりたいんだな」と思って，そういったものや抽象概念を含めて，くくる言葉を考えたときに，“考え方”だと思ったんです。

“考え方を育てる”ことをテーマに決めた古屋が，一緒に番組を作ってくれるブレーンとして声をかけたのが，「だんご3兄弟」をともに生み出した佐藤雅彦だった。「だんご3兄弟」のあとも，『おかあさんといっしょ』では「あっという間劇場」という短いアニメーションコーナーを放送しており，古屋は佐藤と頻繁に顔を合わせていた。当時，佐藤は慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス環境情報学部でさまざまな“表現”をテーマに独自の研究をしており，大学での授業の話題なども新番組開発に結びつくきっかけになった。

> 古屋　「あっという間劇場」を制作しているときに，佐藤さんはちょうど慶應の先生になって，「今日こんな授業をやりました」とか「こういう問題を出したら，こういう答えを学生が持ってきたんですよ」とか「この問題，古屋さんは解けますか?」みたいなことを録音の合間とか，待ち時間でずっと話してて，「面白い研究室だな」と思っていたんです。で「佐藤さんのやっていることと，今度の“考え方”っていうのはすごく近いのではないか」と思って，それで「今度こういうことをやろうと思ってるんですけど，佐藤さんの研究室と一緒にやりませんか」って言ったら，「あっ，いいですね。ぜひやりましょう」って言って立ち上がったのが，『ピタゴラ』っていうことです。

『ピタゴラスイッチ』は，番組の企画から，実際の制作に至るまで，“佐藤研”と共同で進められた。15分の番組の核となる人形劇パートやロケコーナーなどは，佐藤と内容を打ち合わせながらNHKの制作スタッフが担当しているが，その他のさまざまなコーナーは，研究室のアイデ



２人の動作が組み合わさることで関連性が生まれる
「アルゴリズムこうしん」

アや研究成果が反映され，また実際の制作にも学生たちが参加した。

例えば，番組の中でインターミッションのように挿入される「ピタゴラ装置」は，夏休み期間などに“佐藤研”の学生たちがNHKのスタジオを1週間近く借り切って撮影した。また，「アルゴリズムたいそう／こうしん」は，カナダの映像作家ノーマン・マクラレン[106)]の「カノン」という作品に触発され，“佐藤研”で行ったワークショップを，子ども用に歌付きにアレンジしたものである。ほかにもシンプルな10本の線がキャラクターとして物語を構成する「10本アニメ」や，直線だけで構成された四角い犬「フレーミー」が主人公のアニメーションなども，研究室の課題やプロジェクトから生み出された[107)]。

さまざまな点で，これまでの幼保向け番組とは全く違う『ピタゴラスイッチ』を当時視聴した子どもたちはどのような反応をしたのだろうか。番組開始の翌年，雑誌のインタビューで古屋は以下のように述べている。「いくつかの幼稚園で反応を聞くと，子どもたちはすごく面白がってくれているんです。さらに若い先生もすごく面白がってる。ただ，いわゆる放送教育をずっとやってきた，年配の先生がたは，何が面白いのかよく分からないと。今までの番組とタイプが違いすぎるので，どう使ったらいいのか分かりませんと」[108)]。

『ピタゴラスイッチ』は，枠としては幼保向け番組だったが，作り手はそこにとらわれることなく，あくまでも対象の幼児の好奇心に訴えられる内容を作ろうとした。そのことで従来の放送教育になじんでいた先生たちに戸惑いを与えた一方，子どもたちからは圧倒的な支持を得ていった。古屋自身は，もはや見る場所で幼保向け番組と在宅向け幼児番組を区別する必要はなくなっていると考えている。

> 古屋　“どこの場所で見るか”っていうことよりも，“学術的な成果”だったり，“その年代の子に分かりやすい表現”であったり，そういう意味では，どの番組もちゃんとみんなその年代に向けて作っているわけです。「園で見る」ということだけに特化する意味はあまりないと思う。

幼保向け番組と在宅向け幼児番組の境界を越える『ピタゴラスイッチ』の登場が，結果として両者の統合を推し進める決定打となったと言える。

『ピタゴラスイッチ』は，2003年「第30回日本賞」の〈幼児向けカテゴリー〉で最優秀賞を受賞，また2004年にはドイツで隔年で開催されている「プリ・ジュネス」[109)]の〈6歳までのノン・フィクション番組部門〉で最優秀賞を受賞するなど，国内外のコンクールで高く評価された。また，映像表現や番組の構成，演出などにおいて，以後制作された『にほんごであそぼ』や『シャキーン！』『デザインあ』などの幼児子ども向け番組に多大な影響を与えた[110)]。

3-5〈母と子のテレビタイム〉ゾーン定着の要因について

これまで，教育テレビ〈母と子のテレビタイム〉ゾーン新設の経緯と，新番組開発の流れを振り返ってきた。また，ゾーンの発展段階ごとに，時間数，局別視聴率，そして各番組の評価から，〈母と子のテレビタイム〉ゾーンが徐々に視聴者に受け入れられ定着したことを見てきた。改めて幼児視聴率調査の局別平均視聴率

（週平均）の推移を見ると，教育テレビはゾーン新設当初の1990年から急速に視聴率を上げ，1996年の時点で全局中トップになって以降，その地位を維持していることが分かる（**図7**）。

ゾーン定着の要因

〈母と子のテレビタイム〉ゾーンが視聴者の間に定着した要因は大きく3つに分けられる。

1つ目の要因は，言うまでもないが，視聴者にとって魅力的なコンテンツが常に開発されてきたことである。20年以上にわたって，『ひとりでできるもん！』や『にほんごであそぼ』など話題となるような番組や，『いないいないばあっ！』や『みいつけた！』のような長く支持される番組が，数多く，間断なく生み出されてきたことが，視聴者離れを起こすことなく，ゾーンを定着させた鍵だと推測される。

2つ目は，幼児視聴率調査という，放送の結果を継続して検証できる独自の指標の存在である。幼児視聴率調査の結果は，ゾーンの定着度や番組の評価を測るだけでなく，視聴者である幼児・子どもの生活実態に合わせて，ゾーン内の番組の並び順を決める際に大きな手がかりとして役立った。

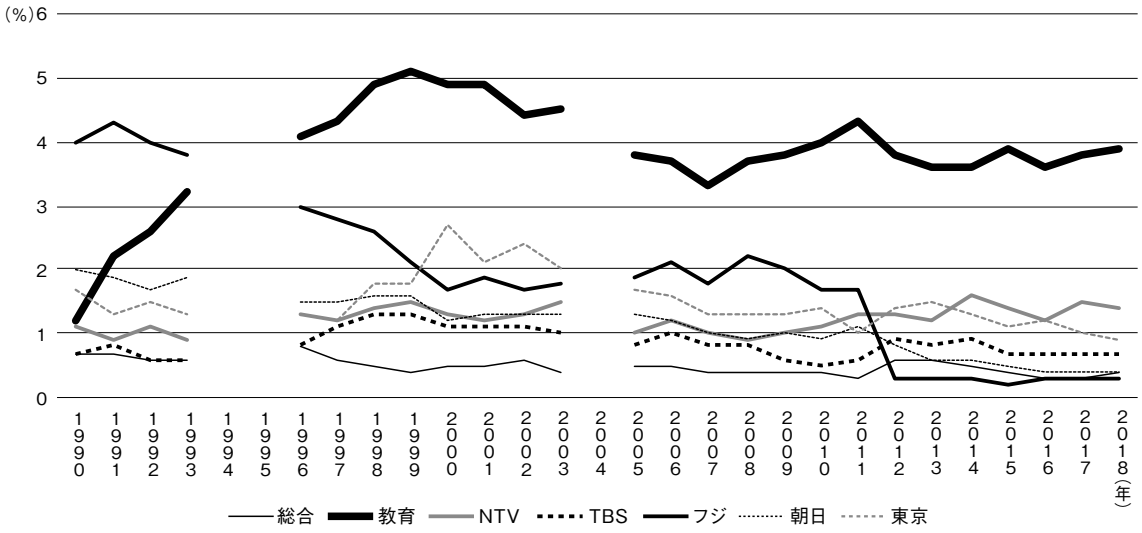
3つ目は，1990年代前半まで，16，17時台に民放で放送されていたアニメ，子ども番組が1990年代後半に徐々に減少し，幼児・子どもが見る番組を放送しているチャンネルがほぼ教育テレビだけになったという外的要因によるものである。

それぞれの要因について，詳しく見ていく。

要因①　～絶えざる新番組開発～

新番組開発の流れを再確認すると，1990年に『母と子のテレビ絵本』と『英語であそぼ』，1991年に『ひとりでできるもん！』，1996年に『ハッチポッチステーション』と『いないいないばあっ！』，2003年に『にほんごであそぼ』と『クイ

図7　局別1日平均視聴率（週平均）



（幼児視聴率調査の結果をもとに筆者が作成）

ンテット』，2004年に『からだであそぼ』，2008年に『シャキーン！』，2009年に『みいつけた！』といった具合に，20年の間に10本の新番組が開発されてきた。つまり2年に1本のペースで，既存番組のリニューアルではない，新しいジャンルの番組が立ち上げられたことになる。

これだけ新番組がコンスタントに開発されてきた背景には，夕方（のちに朝も）の2時間に〈母と子のテレビタイム〉ゾーンという，ある意味でのフロンティアが生まれたということがあった。とはいえ，1990年の時点では，新たな幼児・子ども番組は2つしか存在せず，そこがどれだけ耕す甲斐のある場になるかは未知数だったに違いない。

時を同じくして，1989年にNHKエデュケーショナルが設立され，そこへ幼児番組畑ではない中村哲志という人材が異動してきて，新たに生まれたフロンティアの開発に乗り出した。中村は『英語であそぼ』に続いて『ひとりでできるもん！』を立て続けに開発し，ゾーンを軌道に乗せることに成功した。ただ，既述の通り，中村が一からすべてを作り上げたのではなく，あくまで『おかあさんといっしょ』という先行番組が，長い年月をかけて蓄積してきた幼児番組制作の知見とノウハウのベースがあったからこそ成し遂げられたことでもある。

こうした絶え間ない番組開発により，0歳～小学校低学年までの幅広い年齢層を取り込むことができた[111)]。幅広い年齢層には，保護者も含まれる。その理由としては，まず，幼児の発達に配慮した制作姿勢により，子どもに安心して見せられること，また，子どもが番組を見ている間に家事ができることなど，子育て支援としての評価が挙げられる。加えて，『ハッチポッチステーション』や『クインテット』などのように，大人が一緒に見ていて楽しい番組や，『にほんごであそぼ』や『デザインあ』のように，映像的に洗練されていて，ある意味で大人向けの番組などが存在しており，視聴者として保護者を取り込めている側面もある。

要因②　～幼児視聴率調査と編成戦略～

次に，幼児視聴率調査がゾーンの定着に果たした役割を見ていく。

およそ2時間の〈母と子のテレビタイム〉ゾーンの中には，5分のミニ番組を入れると14個ほどの番組が編成されているが，朝と夕方の2つのゾーンで番組の並び順は異なっている。それぞれのゾーンで，どの番組をどういう順番で並べれば，さまざまな年齢層の視聴者に見てもらいやすいのか，幼児の生活行動の実態を分析して，番組の並び順に反映してきたからである。これは，幼児視聴率調査の付帯質問で，保護者に幼児の普段の生活について尋ねる質問を設けていたために可能になったことで，そこから2～6歳児の朝，夕方の行動を割り出すことができた。

1997年の調査では，2～6歳児の幼児の，朝7～8時台の行動を調べている。朝7時台は2・3歳児の半数はまだ寝ている。これに対し，4～6歳児の幼児は，食事や身の回りの用事をする子が多く，8時台になると幼稚園や保育所に行くために家を出る子も目立つ。同様に，夕方4時台に注目すると，2歳児は家でテレビを見たり遊んでいる子が多いが，3歳児以上の場合は，半数かそれ以上の子どもが外遊びで，家にいる子どもはまだ少ない。

実際，テレビの視聴状況を見ると，これらの生活行動の年齢差が子どもたちのテレビ視聴に

大きく関わっており，1日の平均で見ると視聴時間や視聴率に年齢差はないが，時間帯を追って見ると，午前や午後の時間帯は年齢の低い子どもほど視聴率が高く，逆に夜間は年齢が高いほど視聴率は高かった[112]。

これらの結果から，朝は年齢の高い幼児向けから年齢の低い幼児向け，反対に夕方は年齢の低い幼児向けから年齢の高い幼児向け，そして18時台の小学生向け番組『天才テレビくん』につなぐ，という考え方で番組を編成するようになった。

さらに，単年度だけでなく，継続して視聴率を調べ続け，数字の変化をとらえることで，絶えず新番組の開発を促す役割を果たした。

幼児視聴率調査によって，従来の世帯視聴率では捕捉できなかった幼児層の視聴実態をとらえることができるようになり，ゾーンの編成の成否を年度ごとに判断できるようになった。また，幼児の生活行動を把握することで，視聴層に合った番組の並び順を組むことができるようになった。

要因③　～競合相手の減少～

1990年代前半の民放キー局の番組編成を見てみると，朝についてはフジテレビの『ポンキッキ』シリーズを除いて，子ども番組はほぼ存在していなかったので[113]，夕方16～18時の時間帯に限って述べる。夕方16～18時の民放各局の番組編成は，年度によって細かい点で異なる場合はあるが，基本的に，**表2**のようだった。

表2　1995年10月13日のテレビ欄

	日本テレビ	TBS	フジテレビ	テレビ朝日	テレビ東京
16	江戸の用心棒	江戸を斬るⅣ(再)	お料理BAN! BAN!	15～金曜サスペンス(再)	レディス4
17	**未来少年コナン**	ドラナビ緊急予告!人生は上々だ VS未成年 放送直前徹底ガイド	同・級・生(再)	**新機動戦記ガンダムW**	ぶらり旅
	シティーハンター2(再)		**キャプテン翼J**	**オーレンジャー**	イブニングニュース

日本テレビは16時台にドラマ再放送，17時台にアニメ再放送。TBSはドラマ再放送。フジテレビは16～17時台にドラマ，アニメや，『ポンキッキ』シリーズなどの子ども番組の再放送。テレビ朝日は基本的にはドラマの再放送だが，金曜のみ17時台にアニメの再放送と特撮シリーズを放送していた。またテレビ東京は情報番組などを放送していた。つまりTBSとテレビ東京以外のキー局では，夕方16～18時の時間帯になんらかの子ども向け番組を放送していた。

その状況が1996年10月以降少しずつ変化していく。まず，日テレが『プラス1』というニュースワイド番組の開始時間を17時半に繰り上げたのを皮切りに（2001年から17時～），テレ朝が1997年に17時から『スーパーJチャンネル』，フジも2000年に17時から『スーパーニュース』，TBSも2004年に16時54分から『イブニング5』を開始するなど，1990年代後半から2000年代前半にかけて，17時台が軒並みニュース番組によって占められていく（**表3，4**）。

そのあおりを受けて，1997年にテレ朝の金曜17時台からアニメ再放送枠がなくなり，特撮シリーズも日曜朝に移動，2000年にはフジのアニメなどの再放送枠が消失，日テレも2000年10月に17時台のアニメ枠が消失し，唯一『それいけ！アンパンマン』だけが金曜16時台に残った[114]。

このように，夕方に放送されるニュースワイド番組の開始時間が17時台に前倒しされたことで[115]，民放キー局から子ども向けの番組枠が減少していき，〈母と子のテレビタイム〉ゾーン

表3　1997年4月11日のテレビ欄

	日本テレビ	TBS	フジテレビ	テレビ朝日	テレビ東京
16	ぐるぐる見せる新番組新入社員はつらいのだ	大岡越前（再）	お料理BAN! BAN!	15～金曜サスペンス（再）	レディス4
			ひとつ屋根の下（再）		
17	アンパンマン	OA直前スペシャル! ふぞろいの林檎たちⅣ		スーパーJチャンネル	お天気
	プラス1		いじわるばあさん		イブニングニュース

表4　2000年10月13日のテレビ欄

	日本テレビ	TBS	フジテレビ	テレビ朝日	テレビ東京
16	アンパンマン	竹野内豊奇跡を起こす	15～ブランド（再）	15～金曜サスペンス（再）	レディス4
	まねキン				
17	プラス1	3年B組金八先生（再）	スーパーニュース	スーパーJチャンネル	ニュースアイ

に幼児・子どもが集まりやすい下地ができていたのである。

〈母と子のテレビタイム〉ゾーンは，民放キー局という競合相手が，子ども番組から戦線離脱したことを追い風にして，幼児視聴率調査と，絶えざる新番組開発という両輪によって，ゾーンとしての勢いを保ち続け，幅広い視聴者からの支持を獲得し続けることができたと考えられる。制作サイドと編成，文研が互いにうまく連携をとった好例と言える。

今後のゾーンの課題

一方で，2010年代に入り，ゾーン内の新番組開発のペースがやや鈍化している。2011年に『フックブックロー』と『デザインあ』，2013年に『すすめ！キッチン戦隊クックルン』，2015年に『ミミクリーズ』の4番組が開発されているものの，『フックブックロー』と『すすめ！キッチン戦隊クックルン』については，それぞれ前番組と同じ「音楽」「料理」をテーマにした番組であり，その意味では継続枠のリニューアルととらえられる。純粋な新番組としては，『デザインあ』『ミミクリーズ』の実質2番組であるが，前者の本放送は土曜，後者は幼保向け枠で，ゾーン内では5分のミニ番組の扱いである[116)]。

これは，朝・夕それぞれ2時間のゾーンをこれ以上拡大することができず，もはや切り開くフロンティアがなくなったことを意味している。また，多くの番組が堅調に継続しているがために，メディアミックスとの兼ね合いもあり，“ただ長く続いている”というだけの理由では改定しにくくなり，結果として新陳代謝が起こりにくくなっている面もある。

幼児視聴率調査の結果を見る限りは，大きな視聴者離れが起きているとは言えないものの，メディア環境が大きく変わる中で，今後も支持を得続けるためには，ニーズに合っていない専門番組の整理・見直しや，番組の短尺化などにより新たな放送枠を捻出し，引き続きコンスタントに新番組開発を行っていく必要があると思われる。

4 幼児番組のこれから

『おかあさんといっしょ』の変遷と，〈母と子のテレビタイム〉ゾーンの発展過程を踏まえ，ここでは，幼児番組が果たしてきた役割の変化について確認し，今後の役割の可能性について考察する。役割の変化をもたらした背景にも触れることで，幼児番組が発展することができた要因を分析し，幼児番組が潜在的に持っている可能性と，今後果たしうる役割をより明瞭に浮き彫りにしたいと考える。

4-1 幼児番組の役割の変化

『おかあさんといっしょ』を始めとする，在宅向け幼児番組が果たしてきた役割を以下に4つ挙げる。

1つ目は，幼児に教育的に配慮された良質な娯楽を安定的に提供し続けてきた点である。これは，『おかあさんといっしょ』開始当初から現在に至るまで変わっていないが，既述の通り，対象とする年齢層が時代によって変わっている。特に1990年の〈母と子のテレビタイム〉開始以降は，『おかあさんといっしょ』以外にもさまざまな幼児番組が放送されるようになり，乳幼児から小学校低学年まで幅広い年齢層を視聴対象にするようになった。

2つ目は，番組へ視聴者が参加する場を提供してきたことである。『おかあさんといっしょ』では，「たいそう」コーナーや，「はみがきじょうずかな」「パジャマでおじゃま」などの生活習慣ロケコーナーで，一般視聴者を出演させている。これらのコーナーは，「自分の子どもをテレビに出したい」，あるいは「テレビスタジオでキャラクターや出演者と一緒に遊ばせたい」という保護者の根強いニーズに応えるものである。これは『うたのえほん』の「たいそう」コーナーから始まって，1960年代から行われており，1990年以降は『おかあさんといっしょ』以外にも拡張され，さまざまな番組で視聴者が参加するようになっている。これらの企画は，結果としてNHKへの親近感の醸成につながっていると考えられる。

3つ目は，1990年後半以降に生じたものと考えられるが，子育て支援機能を担うようになったことである。子育て支援機能についてはp.198ですでに指摘したので，ここでは，近年，保護者，とりわけ母親にとって，幼児番組が精神的な支えになっている可能性について述べる。このことを端的に示すのが，『おかあさんといっしょ』で歴代最長の9年間を務めた11代目「うたのおにいさん」の横山だいすけが2017年4月に番組を卒業するに伴ってSNSを中心に起こった，いわゆる「だいすけロス」である[117)]。

日本の社会構造が大きく変化し，地域や親世代とのつながりが希薄化し，核家族化が進行する中で，育児に対する母親へのプレッシャーが強まっていると言われる。これは，パートナーの無理解や，マニュアル通りにいかない子育て，ママ友とのコミュニケーションに対するストレス，祖父母世代との意識の差などさまざまな要因が絡んでいるが，その中で，『おかあさんといっしょ』の出演者が“育児の伴走者”としてこれまで以上に母親たちに意識されるようになったと思われる。長年『おかあさんといっしょ』に関わっている古屋は次のように述べている。

> 古屋　（横山だいすけお兄さんの番組卒業時に）一番印象的だったのが，「だいすけお兄さんは，空気のような存在でした」っていう，メッセージでした。「その空気のような存在って何だろう?」と考えたときに，「普段は意識しないのだけど，なきゃ困るもの」という意味で，この方は言われたんじゃないかなと思うんです。そう考えると，(『おかあさんといっしょ』を含む幼児番組は)「水道」と同じような「社会インフラ」になっているんだと思っていて，そこは近年変わり方をすごく意識したところですね。

現代の母親世代は，幼少期からテレビと自然と接している，いわば「テレビっ子」であり，子

育ての過程においてもテレビをうまく利用していることがかねてより指摘されてきた[118)]。「子育て」が「孤育て」と言われるようになって久しいが，その中において，子どもだけでなく，育児に関わる母親にとっても，『おかあさんといっしょ』を始めとする〈母と子のテレビタイム〉の幼児番組群が，結果として“空気のように”なくてはならないインフラとして機能するようになっていると推測される。

4つ目は，1990年代後半から2000年代前半にかけて『ハッチポッチステーション』や『ピタゴラスイッチ』などの番組が登場したことによって，大人の視聴層にとっても一種の娯楽になっている点である。もともと『おかあさんといっしょ』は，在宅の幼児と母親に向けて放送され始めたもので，大人が視聴することを前提としてはいたものの，視聴のあり方が明らかに変わってきている。当初はあくまでも幼児の随伴視聴がメインだったと思われるが，1990年代後半以降，好んで大人が見るケースが現れるようになった。これは再放送番組『ハッチポッチステーションあんこ〜る』や，特別番組『大人のピタゴラスイッチ』が，幼児が視聴することがない深夜に放送されたことからもうかがえる。

幼児番組が大人の視聴者にも受け入れられるようになってきた要因はいろいろと考えられる。ここでは，その中でも最も大きな要因の1つと思われる“大人文化と子ども文化の境界の消失”について述べる。

『おかあさんといっしょ』が始まった60年前には，大人文化と子ども文化の間には厳然たる壁が存在しており，漫画やアニメーションはあくまで子どものためのもので，今のように一般の大人が見ることは考えられなかった。そんな中，幼児向けのテレビ番組の社会的な認知は進んでいなかったと思われる。1970年代以降，大人も漫画やアニメーションを楽しむ状況が出てくるようになり，メインカルチャーとサブカルチャーの境界線が徐々になくなっていった。あくまで幼児が見るものだった幼児向けのテレビ番組の世界に関しても，1990年代以降，次第に大人文化と子ども文化の壁が薄くなっていったという。入局以来30年，幼児番組に携わり続けている古屋は，その変化について以下のように述べている。

> 古屋　30年前って，幼児って，はじっこの，はじっこの，はじっこみたいな感じだったんですね。『テレビ絵本』で「声やってもらえませんか」と，俳優さんとかアイドルに頼んでも，「いや，子どものものはいやです」とか，「イメージが悪くなる」みたいなことを言われたんです。それが2000年代になって，大人文化と子ども文化の境目も限りなくなくなって，もうみんな等価値になった。だから今，いわゆる大人向けの仕事をしているアーティストとか，俳優さんでも，幼児番組に出ることについてそんなマイナスと思っていないし，その垣根はものすごくなくなったと思うんですね。それは，幼児番組が社会的に認知されたからかもしれないし，いろんな番組ができて，「大人のものを作っているクリエーターも，こういう幼児のものを作っているんだ」という認知も進んでいたりして，いろんな要素が合わさってだと思うんですけど，30年前と雲泥の差だと思いますね。

メインカルチャーとサブカルチャーの境界の消失を背景に，大人が見ても楽しめる番組が徐々に現れるようになり，それと同時に，大人

文化を担うアーティストや俳優が参加することが珍しくなくなり，視聴者の側でも，幼児番組が必ずしも幼児だけのものではないと意識されるようになっていったと考えられる[119)]。

4-2 幼児番組が果たしうる役割

幼児を視聴対象にしていた幼児番組が，少なからぬ大人を取り込んだということは，そもそも幼児に向けて作られるコンテンツが「すべての世代に開かれ得る」ということである。

幼児は，いわばこの世に一番遅れてきた存在であり，知識も経験も少ないために，大人たちが当たり前として見向きもしないことを，新鮮な目で不思議に思ったり，面白がることができる。『ピタゴラスイッチ』や『デザインあ』『ミミクリーズ』などの幼児番組は，幼児の視点で世界を眺めることで，世の中の仕組みの本質的な部分に気づくように作られており，それが大人にとってもある種の気づきや発見をもたらす効果がある。

つまり，幼児番組は，年齢を問わず，万人に共通する“面白さ”や“楽しさ”の根っこを探り当てることで，能力的にも，社会的にも隔てられた“子どもと大人”という存在を一続きの視聴対象とし，知識や経験の多寡により対象を区別せず，幅広い能力の差をカバーしながらそれぞれに楽しみや学びを提供してきたととらえることができる。これは，価値観の多様化により，バラバラになった個人を束ねることが難しくなりつつある現代において，一種の公共性につながるものと言えるのではないか。

加えて，幼児番組が積極的に外部人材を登用してきたことは，クリエーターとの共同作業の場を恒常的に提供してきたということでもある。川本喜八郎や山村浩二[120)]のような，世界的にも評価される映像作家を始めとして，日本の文化を支えるクリエーターが幼児番組に数多く参加してきた。このことは，文化の向上に貢献するだけでなく，情報の受け手が作り手にもなりうる現代において，開かれた公共メディアとしてNHKが機能していくうえで重要な示唆を与えていると思われる。

これらは，今後も幼児番組に期待される役割だと考える。

4-3 幼児向けのコンテンツ制作

最後に“視聴メディアの変化”に関して述べる。

2000年代前後，幼児のテレビ視聴に対する懸念が議論されたことはすでに述べたが，スマホでの動画視聴が急速に日常化した今日において，メディア接触は，テレビ視聴だけにとどまらず多様化し，別の位相にずれながら，その実態はより捕捉しにくくなっている。その意味で，幼児のメディア接触については潜在的な関心が一層高まっていると考えられる。保護者からすれば，幼少期から映像メディアがあることがすでに前提となった生活を否応なしに受け入れざるを得ない中で，どのようなコンテンツを，どの

2019年にリリースされたアプリ「NHKキッズ」

くらいの年齢で，どのくらいの時間，どのような見せ方をしたらいいか，社会的な合意がなく，自分たちの判断に委ねられていることに大きな戸惑いがあるように見受けられる[121]。

そういった懸念に対し，NHKでは，「NHKキッズ」という動画アプリを開発し，2019年5月末にリリースした。「NHKキッズ」は，利用時間をその都度設定することができ，画面と目の距離をチェックしたり，視聴した動画を事後に知らせたりするなどの機能を備えている。子どもが無制限に利用することを防ぎ，画面との距離を意識できるよう，またどんな動画を見たかが保護者に分かるように配慮している点で，既存の子ども向け動画アプリと異なっている。また，動画の視聴をきっかけに“遊び”につなげてもらうことを意識しており，保育現場での利用も想定している。

幼児が利用する視聴メディアが大きく変わる中で，今後幼児番組はどのように変わっていくのか，古屋は以下のように述べている。

> 古屋　作るものはそんなに変わらないんですよ。外面は変わったり，多少のお化粧の感じは変わるかもしれないけど，描いてる中身自体とか，描き方がそんなに大きく変わるものじゃないと思います。今まで連綿と続いてきた，“子どもがどういう存在で，それに向けてどんな中身だったら見てもらえるだろうか，どういう描き方をすれば見てもらえるだろうか”，そこは変わらないできています。それは，テレビであったり，スマホであったり，どこのプラットフォームに乗っかろうが変わらないものだなと思っています。

子どもを取り巻く環境が変わるだけであって，子どもはいつの時代も変わらない。だとすれば，子どもの実態を把握しながら制作されてきた幼児向けテレビ番組は，今後見た目や形をさまざまに変えることはあっても，中身は大きく変わることはないのかもしれない。

60年前『おかあさんといっしょ』から始まったNHK在宅向け幼児番組の流れは，1990年以降，〈母と子のテレビタイム〉ゾーンの中でさまざまな形で発展し，子どもと，かつて子どもだった大人の支持を得ることに成功した。公共メディアNHKがこれからも公共性を維持し続けるために，幼児向け番組をどのように生かしていくことができるのか，注視していく必要がある。

5 まとめにかえて

本稿では，在宅向け幼児番組の歴史的な流れを追うことに重点を置き，番組構成の変化や番組開発，ゾーン新設の経緯などについて述べてきたため，個別の番組がどのような描き方や伝え方をしているかなど，具体的な演出手法についてはほとんど触れることができなかった。今後の研究として，個別の番組について，映像，音声面での演出手法の変遷について詳しく分析するという可能性もある。既述の通り，NHKの幼児向け番組は，国際コンクールでも高い評価を受けており，番組の演出手法について研究することで，その独自性や，国や文化を越えて幼児を惹きつける普遍性を考察することができると思われる[122]。

また，本研究の範囲からは離れるが，メディアへの接触状況が大きく変わる中で，乳幼児と映像メディアとの関わりについても注意を払う必要があると考える。乳幼児をめぐるメディア環境

がどのようになっているのか，現時点では十分把握されていない。実態を踏まえたうえで，どのようなメディア接触のあり方が望ましいのか，またどのような配慮が必要となるか，社会的な議論が必要だと思われる。その際，NHKの幼児向けテレビ番組の制作者は，これまでの調査・研究の結果や，番組を制作する際の知見を生かし，幼児向けコンテンツを制作してきた立場から，議論を進めるうえで有効な情報を発信する役割を果たし得るのではないだろうか。

最後に，筆者とNHKの幼児向け番組の関わりについて触れておく。筆者は，2002～2010年にかけ幼児番組の制作現場に居合わせ，いくつかの番組に関わった。その中で，長い幼児番組の歴史の中で，自分のいる時期がどのように位置づけられるのかということに関心を持つようになり，それがきっかけとなって本稿をまとめることになった。執筆を通して，筆者が幼児番組に関わっていたのが，60年の歴史の中でも，非常に興味深い時期だったことが改めて分かった。

「幼児は最も厳しい顧客である」ということは，幼児番組を制作するうえでの鉄則である。幼児は，自分が面白いと思わなければ，画面から目を背け，テレビの前からいなくなってしまうからである。幼児番組は理解するのが容易だからといって，コンテンツ制作自体が易しいわけではない。視聴者である幼児の心理や発達を理解していなければ，彼らに訴えかけるものを作ることはできない。

メディアを通してであれ，幼児と向き合うことは，人間の土台の部分，あるいは自然に触れることである。分からないことや理解できないことも多い。だからこそ面白く，やりがいがある。その意味で，幼児向け番組の歴史は，そこに面白みを感じた番組制作者とクリエーターが，幼児がどういう存在なのかを理解しようと努めながら，幼児という存在に真剣に向き合い，試行錯誤を繰り返して積み上げてきたものである。社会が複雑化・多様化し，メディアの公共性が問われる中で，我々はそこからさまざまなことを学び取ることができる。

（たかはし こういちろう）

注：

1）山本佳則「幼児のテレビ視聴，録画番組・DVD，インターネット動画の利用状況」『放送研究と調査』（2019.12）p.4

2）白石信子「「Eテレ」教育テレビ，次の半世紀に向けて」『放送研究と調査』（2010.6）p.109

3）“幼児”の定義に関し，児童福祉法では「1歳から小学校就学の始期に達するまでの者」，また，“乳児”に関しては「生後1年未満の者」とされている。本稿では基本的に児童福祉法の定義に基づいて表記する。なお，幼保向け番組は，3～5歳までの未就学児童を対象としているが，保育所は0歳から満5歳，幼稚園は満3歳から満5歳の子どもが入園対象となる。

4）幼保向け番組の変遷については，小平さち子「幼児教育におけるメディアの可能性を考える」『放送研究と調査』（2016.6）が詳しい。

5）「幼保向け番組」と「在宅向け幼児番組」の変遷について述べた論文として，宇治橋祐之「幼児向け番組と幼稚園・保育所向け番組」『教育放送75年の軌跡』（2012）教育放送研究会がある。

6）今回『おかあさんといっしょ』班で保管していた以下の4点の資料を参照した。①50年データ『おかあさんといっしょ』概要，②構成表年譜，③イベント記録（以上，2009），④「幼児テレビ国際版マニュアル」（1991）幼児国際版マニュアル開発研究会。

7）1979年に発足した，『おかあさんといっしょ』の制作者と研究者が共同で調査研究や番組制作を行ったプロジェクト・チーム。

8）60年に及ぶNHK幼児向け番組の歴史を振り返るのに，6人のインタビューだけで構成するのは不十分であるが，関係者が高齢化していることもあり，後世に残る形に最低限まとめておく必要性があると考え，各論についてではなく，番組制作の大枠の流れを確認するという観点からインタビューを実施した。なお，各論については，ほかに以下の4人にインタビューを行った（敬称略）。坂上浩子（NHKエデュケーショナル取締役）には，2000年以降の番組開発と国際コンクールなどについて，工藤俊二（NHKエデュケーショナルこども幼児部専任部長）には幼保向け番組について，中嶋尚江（NHKエデュケーショナルこども幼児部統括プロデューサー）にはNHKエデュケーショナルのメディアミックスについて，加藤久仁（NHKエンタープライズ取締役）には，1990年代の教育テレビ編成について聞いた。

9）『のど自慢』は1953年から，『きょうの料理』は1957年から放送されている。

10）1953年のテレビ放送開始当初からNHKでは，18時30分～19時に『子供の時間』を放送していた。「学校放送とは別に，子供の生活の中から社会に対する関心をたかめるとともに，その情操を豊かにすることを目的とし，劇，ヴァラエティ，影絵，人形劇，歌謡，スポーツなどを取上げ，娯楽を通して知らず知らずのうちに，教育の成果をあげるようにした」『NHK年鑑1955』

11）1960年の曜日ごとの企画の並びは以下のようだった。（月・火）は人形劇「ブーフーウー」（作：飯沢匡，音楽：小森昭宏），（水・木）は歌と物語が展開する「うたってあそんで」（作：筒井敬介，音楽：宇野誠一郎），（金）は工作遊びをする「いいものつくろ」（工作：上田次郎，お話：山中恒，音楽：越部信義），（土）は女優の轟夕起子と人形とのやりとりの中に生活指導を盛り込んだ「なかよしおばさん」（作：田中ナナほか，音楽：桜井順）。

12）「ブーフーウー」で導入された制作システムとして，現在も引き継がれているのは，プレレコーディング（事前に声優の録音をし，人形操演はそれに合わせて演技する）とパーマネントセット（毎回セットを新規に作るのではなく，繰り返し使用するレギュラーセットを作ることで，美術予算を抑える）である。なお「ブーフーウー」は番組から生まれたオリジナル劇ではない。1956年4月～12月まで『婦人公論』に連載されていた作品で，挿画も人形デザインの土方重巳が担当している。

13）飯沢匡『権力と笑のはざ間で』p.472（1987）青土社

14）『日曜娯楽版』は，1947～1952年に放送されたラジオ番組である。内容としては，コントと歌謡によって組み立てられた部分と，三木トリローグループの「冗談音楽」とで構成された。放送作家としてキノトール，神吉拓郎，飯沢匡らが関わっている。『ラジオ年鑑1949』には番組について次のように書かれている。「日曜娯楽版は回を重ねているうちに，他の放送にはみれない諷刺性が次第にクローズアップされて，その後益々諷刺的番組として性格づけられてきた。これも，戦後のゆがめられた世相には，この放送が取り上げるような諷刺が一般から特に迎えられたからに外ならない」。

15）トッパンの「ストーリーブック」（人形による名作絵本）シリーズは文を飯沢匡が，人形を川本喜八郎が，絵を土方重巳が担当し，『シンデレラ』『ロビンフッドの冒険』『ヘンゼルとグレーテル』『アラジンとふしぎなランプ』『しらゆきひめ』『にんぎょひめ』などが1952年から1953年にかけて出版された。

16）『ヤン坊ニン坊トン坊』は1954年から1957年までNHKラジオ第1で放送された。当時，子役が演じるのが常識だった「子どもの声」を，初めて大人の女性が演じた作品。ヤン坊を里見京子が，ニン坊を横山道代が，トン坊を黒柳徹子が演じている。3

人はNHK放送劇団の同期である。

17）飯沢は，1956年にアサヒビールのPR短編アニメーション『ビールむかしむかし』を発表，第2回全日本PR映画コンクール通産大臣賞最優秀作品・色彩部門第1位を受賞したほか，キネマ旬報ベスト・テン文化映画で第9位に入るなど高く評価された。また，1958年には川本喜八郎らとともにテレビCM制作会社シバ・プロダクションを設立，アサヒビールやミツワ石鹸，ソニー，武田製薬などのテレビCMで人形アニメーションを多数制作した。

18）小谷節子は、1947年入局、『若い女性』などのラジオ番組を担当し、プロデューサーとして1959年『おかあさんといっしょ』の開発に関わる。

19）『現代テレビ講座1巻』（1960）ダヴィッド社p.193

20）飯沢匡は「ブーフーウー」のほかにも，1961～1963年に総合テレビで放送された子ども向け番組『魔法のじゅうたん』に関わっている。飯沢は，ここでも人形アニメーションやクロマキー合成などの技術を使った映像トリックを考案している。

21）土方重巳は，佐藤製薬のサトちゃんのデザインなどで知られる画家である。1951年，飯沢匡，川本喜八郎，隅田雄二郎らと人形製作グループ・人形芸術プロダクションを結成し，トッパンの人形絵本シリーズの挿画や，「ブーフーウー」を始めとする『おかあさんといっしょ』の人形劇のデザインを担当した。

22）川本喜八郎は，NHKテレビ人形劇『三国志』やNHK人形歴史スペクタクル『平家物語』の人形美術作家として知られ，人形アニメーション作家として『火宅』（1979）や『死者の書』（2005）などの作品を遺した。1958年に飯沢匡らと設立したCM製作会社シバ・プロダクションで『おかあさんといっしょ』や『魔法のじゅうたん』のオープニングなどを手がけている。

23）飯沢匡『武器としての笑い』（1977）岩波新書p.134

24）「ダットくん」は，1967～1969年に『おかあさんといっしょ』で放送された着ぐるみ人形劇である。NHKアーカイブスには番組本編の映像は残っていないが，1967年3月31日に放送された『NHK新番組1967』という新番組紹介の中で，1分45秒ほど「ダットくん」のカラー映像が残されている。なお，NHKアーカイブスに保管されている放送番組について，NHKは学術利用に限定して無料で閲覧できるサービスの試験的運用を行っているが，現時点では基本的に非公開である。「NHK番組アーカイブス　学術利用トライアル」については以下を参照。https://www.nhk.or.jp/archives/academic/

25）「とんちんこぽうず」は，1969～1971年に『おかあさんといっしょ』で放送された仮面劇である。映像は残っていない。

26）「とんでけブッチー」は，1971～1974年に『おかあさんといっしょ』で放送された着ぐるみ人形劇である。映像は残っていない。

27）「うごけぼくのえ」は，1974～1976年に『おかあさんといっしょ』で放送された着ぐるみ人形劇である。NHKアーカイブスに7本の映像と台本が21冊保存されている。

28）「ペリカンおばさん」は，1976～1977年に『おかあさんといっしょ』で放送された着ぐるみ人形劇である。映像は残っていない。

29）「ミューミューニャーニャー」は，1978～1983年に『おかあさんといっしょ』で放送された着ぐるみ人形劇である。当初は「おもちゃおじさん」というタイトルだった。NHKアーカイブスに82本の映像が保存されている。

30）『バス通り裏』は，1958～1963年に放送された帯ドラマである。「高校教師の家庭と隣の美容院を舞台として，その周囲に生きる庶民の哀歓を謳い上げたホームドラマである。作者は筒井敬介と須藤出穂が隔週執筆」『NHK年鑑1960』。

31）「こんな絵もらった」は，1962～1966年まで放送された。視聴者から送られてきた絵を紹介しつつ，その絵をもとにしてお話をふくらませるという内容だった。1965年は堀内誠一と，「いやいやえん」や「ぐりとぐら」の絵で知られる大村（現・山脇）百合子が隔週で担当した。映像は残っていない。

32）『うたのえほん』の視聴者参加型のたいそうコーナーについて，ディレクターとして関わった増田元春は次のように述べている。「4月のスタート時はいなかったんです。5月にこどもの日の特集で，スタジオに子どもを入れてみたら，「ああいうふうに出られませんか」っていう電話が殺到して，6月か7月から子どもたちといっしょにやるようになったんです」（「ライツ・アーカイブスセンター月刊通信アーカイブス・カフェ」NO.18）。

33）1966年に2番組が統合された時点で，『おかあさんといっしょ』の番組尺は25分になった。内訳としては『うたのえほん』部分が10分，『おかあさんといっしょ』部分が15分である。なお『おかあさんといっしょ』の番組尺は，1959年の放送開始時は20分，デイリー放送になった翌1960年には16分と短縮しているが，1961年には17分になり，1962～1966年の間は5分間のミニコーナーを追加して25分に増えている。1966年以降は，23～29分の間で推移しており，2019年時点では24分である。

34）「ライツ・アーカイブスセンター月刊通信アーカイブス・カフェ」NO.18「幼児番組の金字塔」おかあさんといっしょ(前)」（2008.3）

35）「ライツ・アーカイブスセンター月刊通信アーカイブ

ス・カフェ」NO.19「幼児番組の金字塔」おかあさんといっしょ(後)」(2008.4)

36) この時期の『おかあさんといっしょ』のコーナーで，NHKアーカイブスに保存されているものがいくつかある。「おはなしこんにちは」(1969～1976)というコーナーでは，劇作家・別役実の『歩哨のいる街』(1972.3.31)や『みんなスパイ』(1973.2.16)などの作品が朗読される回がある。また，漫画家の馬場のぼるが出演し，ライブペインティングをしながら，アニメーションと実写の動物の映像を組み合わせていく「はいスタート」という実験的なコーナーは，1976年に第16回モンテカルロ国際テレビ祭こども番組部門最優秀賞を受賞している。

37) 当時放送されていた民放の幼児向け番組の放送時間は番組により異なり，また同一番組でも年度によって変わっていることがあるが，おおむね7～8時台か，10～11時台に集中していた。就園した子どもは7～8時台の番組は見ることができても，登園のため10～11時台になるとほとんど見ることができなかったと考えられる。1970年代の『おかあさんといっしょ』の低迷は，放送時間が開始当時から変わらず10時台だったことも原因の1つだと推測される。『おかあさんといっしょ』の放送時間は1976年に9時台に変更され，1998年に教育テレビに本放送が移行されてからは8時台になっている。

38) 当時の『おかあさんといっしょ』の視聴率に関する記録は残っていない。ただ参考として，1960年代後半～1970年代の『NHK年鑑』に掲載されている全国視聴率調査の結果の要約によると，「NHK総合テレビでよく見られている20番組」の中に『おかあさんといっしょ』は挙げられていない。また『NHK年鑑1966，1967』には「NHK総合テレビ児童向け番組の視聴率」の結果が掲載されており、『ひょっこりひょうたん島』や『みんなのうた』は挙げられているものの，『おかあさんといっしょ』はない。

39) 近藤は，1963～1969年に名古屋局で一般番組を担当したあと，1969年に教育局に戻り，『みんなのうた』や『ヤング・ミュージック・ショー』などの音楽番組を担当していた。

40)『セサミストリート』は，教育を十分に受けることができない貧民層の子どもたちに対して，当時急速に家庭に普及しつつあったテレビを通じて，文字の読み書きや，計算，社会的・道徳的な規範知識などを身につけてもらうことをねらいとしていた。1969年の放送開始当時で，放送地域の幼児800万のうち，およそ半数の350万～400万が視聴するという結果をおさめた。現在も国際共同制作を行いながら，140以上の国と地域で放送されている。

41) 白井常・坂元昂編『テレビは幼児に何ができるか』(1987)日本放送教育協会pp.214-217

42)『おかあさんといっしょ』以前に，発達心理学者などの外部ブレーンを集め開発された幼児番組として，フジテレビの『ひらけ！ポンキッキ』がある。同番組は『セサミストリート』に影響を受け，専門家によるカリキュラム委員会を設け，番組の効果を検証する追跡調査を継続して行った。

43) NHK放送文化研究所の名称は時代により変転している。1946年に「NHK放送文化研究所」として創設，1965年に「総合放送文化研究所」と「放送世論調査所」の2所体制になり，1984年に再び1所に統合され「放送文化調査研究所」となり，1990年に発足時と同じ名称に改められ現在に至る。

44)「幼児の生活とテレビ調査について」『文研月報』(1980.6)，「幼児の生活とテレビⅡ調査について」『文研月報』(1981.2)

45) 白井常・坂元昂編『テレビは幼児に何ができるか』(日本放送教育協会)(1987)p.229

46) 幼児国際版マニュアル開発研究会「幼児テレビ番組国際版マニュアル」(1991.3)p.22

47) これは，限られた視聴層に向けて作られた幼児向け番組が，民放で枠を維持することの難しさを示している。「幼児テレビ番組国際版マニュアル」(1991)の中で近藤は次のように述べている。「現在，世界的に見て，子供番組，教育番組の財政的基盤は極めて不安定な状況にあります。それが番組の量と質に多大な影響を及ぼしています。新しい企画，新しい分野への挑戦はほとんど出来なくなりつつあります」。

48) 幼保向け番組の幼稚園・保育所における利用率の下落傾向の背景には，“市販ビデオ教材の利用の増加”，“幼児が家庭で日常的に接しているテレビ全般に関して，「好ましくない影響が多い」と考える幼稚園・保育所でのテレビでの教育的利用の減少”などが指摘されている。

49) 番組制作を請け負うNHKの関連団体としては，NHKエデュケーショナルに先立って，1985年にNHKエンタープライズが設立されている。

50) 総合テレビから教育テレビへの番組の移行は，概して視聴率の低下を招く場合が多いが，『おかあさんといっしょ』に限っては，むしろ視聴率は増加した(幼児視聴率7.9％⇒27.1％)。これは，チャンネルの移行にあたって，放送時間を午前9時30分から8時35分開始に変更したことで，もともと視聴対象である2～3歳児がより見やすい時間になり，加えて幼稚園や保育所に行っていたために見ることができなかった4歳児以上の視聴者も獲得したためであると分析されている(白石信子「年齢により異なる幼児のテレビ視聴」『放送研究と調査』(1998.10)。

51) 佐藤雅彦は，現在東京藝術大学大学院映像研究

科教授を務めるクリエイティブ・ディレクター。電通のCMプランナーとして湖池屋の「スコーン」や「ポリンキー」，NECの「バザールでござーる」のCMを手がけた。電通退社後は企画会社TOPICSを設立，「だんご3兄弟」や『ピタゴラスイッチ』の企画・制作に関わった。

52）『映画おかあさんといっしょ　はじめての大冒険』は2018年9月に全国で公開された。また2020年1月には『映画おかあさんといっしょ　すりかえ仮面をつかまえろ!』が公開される。

53）『おかあさんといっしょ』は，番組の補完サービスとして，初期の段階からキャラクターの商品化などを行っていたが，1989年以前はNHKエデュケーショナルがまだ存在しておらず，二次展開業務を手がけていたのは，別の関連団体である。番組の制作がNHKエデュケーショナルに移行してからは，同社がそうした業務に積極的に関わるようになった。それまでキャラクターや音楽などの権利をそれぞれ別々の会社が持っていたため，番組で管理することが難しく，効果的な二次展開がしづらくなるという面があり，NHKエデュケーショナルでは新たな体制作りをしていった。長年NHKエデュケーショナルこども幼児部で二次展開業務を担当している中嶋尚江統括プロデューサーは，次のように述べている。「二次展開をする場合，制作の途中の段階から加わっても，複雑な権利関係に対応することができない。番組の最初の段階から関わって，制作現場のプロデューサーと相談し合うことで，初めてその先の展開を順調に進めることができる。でも，それが成り立つのは幼児向け番組だけ。幼児番組を卒業する年齢になると，子どもたちの好きなものはそれぞれ変わってしまう。就学前の幼児をターゲットにしているからこそ可能なことなんです」。なお現在，NHKエデュケーショナルでは，『おかあさんといっしょ』だけでなく，『いないいないばあっ!』や『みいつけた!』『ピタゴラスイッチ』『デザインあ』など，さまざまな幼児向け番組で二次展開をしている。なお，二次展開による副次収入は，視聴者の負担の抑制を目標として、NHKに収められている。

54）視聴者からの再放送の要望を受け付けるNHKサイト「Eテレお願い!編集長」には，この特集番組に関する多数の書き込みがある。
https://www.nhk.or.jp/onegai/detail/23411.html

55）『おかあさんといっしょ』は，「長年にわたり子どもと親の情操を育み続ける」ことが評価され，2019年，第67回菊池寛賞を受賞した。

56）〈母と子のテレビタイム〉ゾーンは，翌1991年午前8時台にも増設され，1998年以降開始時間を徐々に前倒しし，2019年時点では6時35分から始まっている。また1992年からは土曜17時台が，翌1993年からは日曜17時台がゾーンになった。さらに，1997年に土曜8時30分から『おかあさんといっしょ』の放送が開始されたのを皮切りに，土日の午前中にもゾーンができ，2007年からは土曜7～8時台で，2008年からは日曜7時台で幼児・子ども番組が放送されるようになった。

57）調査内容としては，幼児のテレビ視聴時間量，視聴時間帯，性・年齢別の番組視聴実態のほか，ビデオ・DVD利用やテレビゲーム・携帯ゲーム利用，さらに近年では携帯電話・スマートフォン，タブレット端末などの利用や，インターネット動画視聴の実態についての基本データを得るものとなっている。調査方法は2018年までは郵送法。2019年からは郵送依頼WEB回答方式に変更。幼児の1週間の家庭でのテレビ視聴状況を，保護者に15分単位の日記式で記入してもらうというもの（1日は5～24時まで）。

58）1953年2月のテレビ放送開始当初より，総合テレビの18時台は『子供の時間』という番組が放送されており，その後も番組や放送時間はその都度変わったが，基本的に総合テレビの17～18時台には子ども向け番組が長年放送されていた。その中から『ひょっこりひょうたん島』などの連続人形劇や『少年ドラマ』シリーズなどが生まれた。それが変わるのが1985年である。それまで18時半から放送されていた『ニュースセンター630』の枠が拡大し，『にっぽん列島ただいま6時』として18時から放送されるようになり，子ども番組は徐々に数を減らしながら，17時台に移行していった。1988年には連続人形劇の枠が終了，『なんでもワンダーランド』1番組のみが残されたが，1989年には再放送番組に入れ替わり，夕方の子ども番組は総合テレビから完全に消失した。

59）河井三二編「継続と刷新　編集の基本計画　テレビ放送開始から半世紀の軌跡」NHK放送文化研究所（2007.3）

60）『おかあさんといっしょ』は，現在，午前中に本放送をし，同日の午後に再放送しているが，1日に2回放送するという放送形態は1962年から始まっている。当初は総合テレビの14時台だったが，1964年から15時台になり，1974年からは17時台に移り，1985年に教育テレビの17時台に移行している。

61）視聴率には世帯視聴率と個人視聴率の2種類がある。世帯視聴率は，一定の地域の中でどれだけの世帯で見られたかを示す。それに対し個人視聴率は，世帯内で誰がどれくらいテレビを見ていたかを示す。

62）『母と子のテレビ絵本』は，当初，前半10分間がお話，後半5分間は歌のコーナーで構成される15分番組だった。1996年から6年間休止されていたが，

2003年に『てれび絵本』としてリニューアル。以降，放送時間は5分，10分が併存する時期があったが，現在は5分枠になっている。

63）リミテッド・アニメーションとは，リアルな動きを追求したフル・アニメーションの表現手法に対し，非常に少ない動画枚数で簡略化された動きを表現する。

64）藤枝リュウジは，イラストレーター，アートディレクターである。広告のアート・ディレクション，イラストレーションのほか，絵本作家として多数作品を発表。連続テレビ小説『あさが来た』（2015）のタイトルバックも手がけている。

65）『ハッチポッチステーション』には前身となる番組が存在する。1995年にBSで放送されていた『にこにこぷんがやってきた』の後半13分の「パペットショー ハッチポッチステーション」である。当時のメイン出演者は関根勤だった。1996年から教育テレビで10分の定時番組として始まる際に，グッチ裕三に交代，音楽バラエティーの要素が加わっていった。2003～2005年には，教育テレビの深夜に『ハッチポッチあんこーる』が放送された。

66）近藤は『フックブックロー』を最後に幼児番組の制作から引退しているが，その後継番組として2016年から『コレナンデ商会』が放送されている。

67）中村は『英語であそぼ』の視聴対象について「4歳か，5歳くらいですね。本当言うと，小学校低学年まで入ってると思います」と述べている。また，前述の白石は『英語であそぼ』について「最初に『おかあさんといっしょ』の卒業生が見るって考えてできてるわけです」と話している。

68）『アニメーション紀行　マルコポーロの冒険』は，1979～1980年に総合テレビで放送されたテレビアニメである。アニメーションとドキュメンタリー映像を組み合わせていた。NHKアーカイブスには，全43話中，1，2話と，33～43話までが保存されている。

69）当時，青少年幼児番組部では，『少年ドラマ』シリーズや『連続人形劇』などの少年向け番組を制作していた。それぞれについては以下が詳しい。増山久明『NHK少年ドラマシリーズのすべて』アスキー（2001），池田憲章，伊藤秀明『NHK連続人形劇のすべて』アスキー（2003）

70）松下進は，ゲーム情報誌『ファミ通』の表紙イラストや，『加トちゃんケンちゃんごきげんテレビ』（1986～1992）のOPアニメのキャラクターデザインを手がけたイラストレーター。

71）1992年5月31日号の『サンデー毎日』が特集企画として『ひとりでできるもん！』を取り上げている（「NHK教育『ひとりでできるもん！』水沢舞ちゃん異常人気でわかった　亭主がうまい夕食を食えないわけ」）。

72）『ひとりでできるもん！』で最初に包丁を扱ったのは，1991年5月28日放送の「ほうちょうにちょうせん」の回である。

73）『ウゴウゴルーガ』は1992～1994年にフジテレビで放送された子ども番組で，当時としては珍しい3DCGで構成されていた。岩井俊雄や田中秀幸，岡崎京子，うるまでるび，白佐木一馬など，さまざまなクリエーターが参加していた。

74）『音楽ファンタジー・ゆめ』は，1992～1999年にNHK教育テレビで放送されていた，CGアニメーションでクラシック音楽を紹介する5分番組である。

75）『天才てれびくん』は1993年から放送されている子ども向け番組である。タイトルは，『天才てれびくんワイド』（1999～2003），『天才てれびくんMAX』（2003～2011），『大！天才てれびくん』（2011～2014），『Let's天才てれびくん』（2014～2017），『天才てれびくんYOU』（2017～）と変わっている。内容や設定も時期によって異なるが，「てれび戦士」と呼ばれる，小学2年生から中学2年生の子役タレントがさまざまなことにチャレンジする点が共通している。

76）『天才ビットくん』は2001～2007年に放送されていた子ども向け番組である。『天才てれびくん』の姉妹番組だが，内容的なつながりはない。基本設定は，CGで作られた「ビットワールド」という世界で，視聴者から寄せられたアイデアをもとに物語が展開する。以降も『ビットワールド』として継続している。

77）『ひとりでできるもん！』以降の子ども向け料理番組としては，2006年から『味楽る！ミミカ』，2009年から『クッキンアイドル　アイ！マイ！まいん』，2013年から『すすめ！キッチン戦隊クックルン』が放送され，現在は『ゴー！ゴー！キッチン戦隊クックルン』が放送されている。

78）『週刊こどもニュース』は1994～2010年に放送されたニュース番組である。ニュースや社会問題をお父さん・お母さん・3人の子どもの5人家族の設定の中で，子どもにも理解できるような分かりやすい言葉を使って解説するのが特徴だった。

79）白石信子「幼児のテレビ視聴　平成2年6月幼児視聴率調査から」『放送研究と調査』（1990.10）p.20

80）白石信子「幼児のテレビ視聴の現況　平成3年6月幼児視聴率調査から」『放送研究と調査』（1991.10）p.36

81）『いないいないばあっ！』は1996年4月からレギュラー放送が開始しているが，当初放送波はBS2だった。同年10月に教育テレビに移行した。

82）チョーはかつて“長島雄一”として活動していた俳優，声優である。1984～1992年に教育テレビで放送されていた小学校3年生向けの社会科番組

『たんけんぼくのまち』では顔出しで出演していた。

83）着ぐるみの操演と声を同一人物が演じている例として，『おはよう！こどもショー』（1965～1980）のロバくん（愛川欽也），『みいつけた！』（2009～）のサボさん（佐藤貴史）などがある。また，海外の例として『セサミストリート』のビッグバード（キャロル・スピニー）がある。

84）森田建宏，堀田博史，佐藤朝美，松河秀哉，松山由美子，奥林泰一郎，深見俊崇，中村恵「乳幼児のメディア使用に関するアメリカでの最近の声明とわが国における今後の課題」『教育メディア研究 Vol.21, NO2, 61-77』（2015）p.62

85）一色伸夫，服部弘「“子どもに良い放送”プロジェクト展望　子どもが育つ情報社会をめざして」『放送研究と調査』（2002.5）p.38

86）“子どもに良い放送”プロジェクトでは，視聴形態を，「専念視聴」「ながら視聴」「ついているだけ」の3種に分け，「専念視聴」と「ながら視聴」と「ついているだけ」の合計を「接触時間」とし，「専念視聴」と「ながら視聴」の合計を「視聴時間」として算出している。

87）NHK放送文化研究所「“子どもに良い放送”プロジェクトフォローアップ調査中間報告　第3回調査報告書」（2006.3）

88）『国際シンポジウム　子どもの発達に望ましいテレビ番組とは何か』として，2002年11月10日に教育テレビで放送した。

89）『テレタビーズ』は1997年からBBCで放送され，120か国以上で視聴されている幼児向け番組である。お腹にテレビがある4人のキャラクターが遊びやダンスを繰り広げる。制作はラグドール社で，撮影はラグドール本社の所在地にある農場の一角に作られた屋外セットで行われた。

90）ウェブ上には「子育て世代がEテレの幼児向け番組に助けられている」という記事が散見される。
「「Eテレタイム」は親子の大切な時間？お父さんお母さん世代からは絶大なる支持」
https://www.excite.co.jp/news/article/Sirabee_20162073244/
「「NHKのEテレを無駄だから無くせ！」という人がいる？」
https://corobuzz.com/archives/115414

91）『月刊民放』2004年3月号p.36

92）佐藤卓（1955～）はグラフィックデザイナーである。ロッテのキシリトール，明治乳業の明治おいしい牛乳などのパッケージデザインや，金沢21世紀美術館のビジュアル・アイデンティティを手がけている。NHK幼児向け番組『デザインあ』の監修も行っている。

93）ひびのこづえ（1958～）はコスチューム・アーティストである。1990年代より野田秀樹演出作品の舞台衣装を担当した。NHK幼児向け番組『からだであそぼ』では衣装のほかにセットデザインも担当した。

94）http://www.g-mark.org/award/describe/30637

95）『にほんごであそぼ』の開発の経緯について，番組を企画した坂上浩子は次のように述べている。「当時『声に出して読みたい日本語』が本屋さんで売れていて，パッと本を開けてみたら「寿限無」があって，小学校1年のときに流行った遊びを思い出したんです。寿限無を何秒で言えるか競争をして，8秒で言えて1等をとったっていう記憶があった。だから「これはきっと受ける」と思ったんですね。子どもは覚えたくなって，言いたくなる。それで齋藤孝さんのところに行って，「幼児番組でやりたいんですけど」って言った。ただ大人向けの本ですから，「子どもに向けた集大成，つまり私たちがやりたいもののパッケージになったものはありますか」って言ったら，齋藤さんは「ない」っておっしゃったので，「一緒に作りましょう。やりながら作りましょう」ということで，古今の名文や，言葉遊びや，落語や，いろんな日本の文化の中に溶け込んでいるものの中から，言葉力のある日本語を選んできたんです」。

96）佐藤可士和はクリエイティブディレクターである。ホンダステップワゴンなどのテレビCMや，SMAPなどミュージシャンのアートワークのほか，数多くのプロダクトデザインを手がけた。

97）平日朝7時の子ども向け番組として，1997年からテレビ東京で『おはスタ』が放送されており，2003年にゾーン開始時間を7時に前倒しして以降も，しばらく教育テレビの視聴率は伸び悩んでいたが，2008年の『シャキーン！』放送開始後，7時のゾーン開始時間の視聴率が徐々に上がるようになった。

98）幼児番組班の所属部局は，時代によって以下のように変わっている。
1956年　教養部　婦人課
1961年　教育局　婦人少年部
1963年　教育局　青少年部
1973年　放送総局　青少年幼児番組班
1982年　番組制作局　青少年幼児部
1984年　番組制作局　学校教育部
1985年　番組制作局　教育番組センター
（1989年　『おかあさんといっしょ』班，NHKエデュケーショナルこども幼児部に転出）
1990年　番組制作局　ファミリー番組プロダクション
1992年　番組制作局　ファミリー番組部
2001年　番組制作局　青少年子ども番組部
2006年　幼児番組班　NHKエデュケーショナルこども幼児部に転出
長年『おかあさんといっしょ』の制作に関わり，所

属部署の変遷をつぶさに見てきた近藤康弘は以下のように述べている。「NHKの幼児番組というのは，学齢以前の幼児をどういうふうにとらえているか，という日本全体，NHKの考え方の流れに従って，よく所属の組織が変わる。最初はテレビ“教養部”だった。学齢以前の子どもをどこが担当するか，教養か教育かといえば，教養部，それも婦人の一部だった。そういう時代があって，今度は世代的にとらえたほうがいいだろうと，“婦人少年部”になった。婦人と少年がくっつくのだから，やはり子どもというのは，味噌汁と母親の香りがする中にいると考えられていたんでしょう。そういう時期が過ぎて，アメリカで『セサミストリート』が始まったり，日本でも『ピンポンパン』が始まったり，幼児番組が脚光を浴びる時代があって，そのときに幼児番組は，“幼稚園・保育所”もやっているから，教育番組のジャンルの中に残したらどうだろうと，“学校教育”の所属になった。それから今度“ファミリー番組部”ができたときに，経営の根幹に関わる関連団体ができてくる。そのときまずあがったのは，いろんなビジネスを周辺で支えていた『おかあさんといっしょ』で，真っ先に番組単体でNHKエデュケーショナルに出た。だから，“母親の付属品”，“教育の一環”というとらえ方で部が変わってきて，最終的には“商売の一環”として幼児番組をとらえるようになった。これは，NHKの組織の中の流れが，大人が子どもをどうとらえているかというのを，典型的に表していると思う」。

一方，1989年以降，軸足をNHKエデュケーショナルに置いて，数々の幼児番組を開発してきた中村哲志は，次のように述べている。「もし関連会社で作ってなければということで言うと，かえってそこだから自由に作れたというのはあるかもしれない。NHK本体にいると，そのときどきでいろいろ変わるわけだからね。外にいると，もちろん人もいろいろ変わるんだけども，結構継続的にコンテンツを作っていける。それと，ただ番組を見ているだけじゃなくて，イベントを中心に，活字媒体とか，DVDとか，そういうところから視聴者の反応とか，ニーズを肌で知ることができる。やっぱり普通の世間の感覚が入ってきて，より広い視聴者からの反応というのを取り込んでいける。そういうものも知ってないと，本当の独りよがりになってしまいかねない。そういった意味では，外とのつながりを持っているほうが常識を身につけていくのにはよかったと思う。もしNHKエデュケーショナルがなくて，NHKの中でずっとやっていたとしたら，いくつかの番組はもしかするとできていなかったという気はするよね。それは結果論だからよく分からないけど，なんとはなしに。そういう意味では，僕自身としては，NHKエデュケーショナルができて，そこと関わってきたからいろんな仕事ができたので，肯定的に考えることのほうが多い」。

99）増田智子「減少した“幼児のテレビ視聴時間”」『放送研究と調査』（2007.10）p.63

100）『デザインあ』は，身の回りに存在しているものを，“デザインの視点”から見つめ直し，子どもたちに“デザインの面白さ”を伝え，“デザイン的な視点と感性”を育むことを目的としている。2012年グッドデザイン大賞を受賞。2013年にはピーボディ賞を受賞。2015年には日本賞幼児向けカテゴリーで最優秀賞を受賞している。

101）『ミミクリーズ』は，「自然界の似たもの探し」をキーワードに，子どもたちの知的好奇心を触発し，観察眼と想像力を磨くことを目的としている。総合指導として生物学者の福岡伸一が参加している。2013～2014年にパイロット版が放送されており，その中の「きいろとくろのヒミツ」という回は，2014年日本賞幼児向けカテゴリーで最優秀賞を受賞している。

102）平日午前中の幼保枠は2011年にいったんなくなったが，2012年に火曜午前10時から『しぜんであそぼ』が，2013年に木曜午前9時55分から『ノージーのひらめき工房』が放送されるようになり，曜日や時間は変わりつつも，以降もこの2つの幼保向け番組は平日午前中の学校放送番組枠で放送されている。

103）〈母と子のテレビタイム〉ゾーンでは，1999年から15分の幼保向け番組などを5分サイズに再編集したミニ番組を放送していた。

104）当時，『ピタゴラスイッチ』を取り上げた新聞記事として，以下のものがある。
「【てれ辞典】キッズ」東京読売新聞夕刊（2004.5.8）
「【激トーク】大人もハマる子ども番組」東京読売新聞（2004.11.4）
「みんなの広場：『ピタゴラスイッチ』を世界に」毎日新聞（2006.3.12）

105）当時，番組プロデューサーだった坂上浩子は，『ピタゴラスイッチ』開発の経緯について以下のように述べている。「当時，文部省の諮問機関の委員の方が，幼児の段階から育てたほうがいいという能力を3つ挙げたんです。その3つが何かと言うと，“言語能力”“数学的センス”“国際感覚”。それで，当時，幼児班には，言語の番組も，数学の番組も，国際感覚の番組もなかったので，古屋君に“それをテーマにしたものを何か作ったほうがいいよね”って言った」。それに対し古屋は次のように述べている。「坂上さんは昔，算数の番組をやっていたこともあって，“算数の番組なんかどう？”と言われて，

だけど“算数かあ”と思って，なんかほかのテーマがないかなあと考えていた」。当初，プロデューサーの坂上は“幼児向けの算数・数学番組”として新番組を想定しており，それに対して古屋は別のテーマがないかと模索していたことがうかがえる。

106）ノーマン・マクラレンはカナダの実験映像，アニメーション作家である。1930年代から1980年代までの50年間に，約70作品を制作。ダイレクトペイント，ピクシレーション，カリグラフィ，立体アニメーションなど，数々の実験的手法を用いた映画を手がけた。

107）佐藤研の卒業生たちの一部は，2005年クリエイティブグループ「ユーフラテス」を立ち上げ，『ピタゴラスイッチ』のコーナー制作を継続して担当しているほか，同じくEテレで2010年から開始した『0655』と『2355』などの制作にも関わるようになっている。

108）『広告批評NO.273　特集佐藤雅彦研究室』マドラ出版（2003.7）p.131

109）プリ・ジュネスは，1964年以来隔年，ミュンヘンで開催されている子ども番組専門の国際コンクールである。『ピタゴラスイッチ』は，2018年にも「6歳までのノン・フィクション番組部門」で最優秀賞を受賞している（「ビーだま・ビーすけの大冒険スペシャル！～黒玉軍に気をつけろ～」の回）。

110）『ピタゴラスイッチ』は，幼児だけでなく大人からも支持され，2013年から2018年にかけ，定時番組では伝えられない大人向けの概念や考え方を扱った特別番組『大人のピタゴラスイッチ』が正月深夜に毎年放送された。なお，数々の幼児番組の開発を手がけた中村哲志は『ピタゴラスイッチ』について以下のように評価している。「もうすごく面白い。こういう番組を作らなくちゃいけないって，いまだになかなか抜けないよね」。

111）村野井均は『子どもはテレビをどう見るか』勁草書房（2016）で，Eテレの子ども番組の多彩さについて，「子どもが自分の年齢や興味に応じて番組を選ぶことを可能」にしていると述べ，「日本人のメディア・リテラシーの一部は，Eテレ（教育テレビ）があるおかげで培われてきた」ことを指摘している。

112）白石信子「多い幼児のビデオ利用」『放送研究と調査』（1997.11）p.35,39

113）『ひらけ！ポンキッキ』の放送時間帯は，開始当初は平日午後だったが，1977年から朝8時台に放送するようになった。1993年以降，タイトルをさまざまに変え，あわせて放送時間帯も流動的になった。2008年以降は『Super Kids Zone Beポンキッキ』とタイトルを変更しBSフジに移行した。

114）『それいけ！アンパンマン』は2016年まで金曜16時台に放送され続けたが，以降は金曜10時55分～11時25分に放送している。

115）民放の中で最も早く夕方ニュースを17時半開始にしたのは日本テレビである。日本テレビは，それまでアニメの再放送などで3～5％の視聴率を得ていたが，視聴者が子ども中心で，そのあとに始まるニュースを引き続き見る年齢層ではないことから，主婦層を取り込むために放送開始時間を引き上げた。これは系列局である札幌テレビが『どさんこワイド』で試みて成功した例を参考にしたものだが，その結果，視聴率が平均6.9％（1996年12月）にまで上がった（「東京で〈ニュースに視聴率？夕方の情報番組戦争　下〉」朝日新聞（1997.2.11）。

116）デイリー放送ではないため，ここで触れていない番組として『ムジカ・ピッコリーノ』がある。『ムジカ・ピッコリーノ』は2013年から土曜朝の時間帯に放送していたが，2016年から本放送の枠が金曜夕方のゾーン内に移った。制作はNHK音楽・伝統番組部，NHKエンタープライズ。

117）「だいすけロス」とは，11代目「うたのおにいさん」横山だいすけの番組卒業に伴って，母親たちが感じた喪失感を意味する。横山の卒業が発表された2017年2月16日に「#だいすけロス」というトピックスが立ち，Twitterのトレンド入りをした。

118）白石信子「幼児はテレビとどのようにつきあっているか」『武蔵工業大学環境情報学部情報メディアセンタージャーナル』（2003.4）p.27

119）2006年5月発行の雑誌『Quick Japan』で，NHK教育テレビが特集され，『ピタゴラスイッチ』や『にほんごであそぼ』などの幼児番組が取り上げられ，2019年9月発行の雑誌『東京人』では，「大人がハマる！Eテレ」という特集で，NHK子ども向け番組の60年を取り上げている。

120）山村浩二は，現在，東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻教授を務めるアニメーション作家である。代表作「頭山」（2002年）は，アヌシー国際アニメーション映画祭アヌシー・クリスタル賞受賞を始め，世界のアニメーション映画祭でグランプリを獲得した。『おかあさんといっしょ』では，クレイアニメ「パクシ」（1994～1996）や，月の歌「あさごはんマーチ」（2001）のアニメーションを担当している。また2017年から放送されている番組のエンディング曲「べるがなる」では作詞も担当。

121）宮下牧恵「放送研究リポート　乳幼児とインターネット動画　保護者に委ねられる「ルール作り」」『放送研究と調査』（2019.2）

122）2004年7月に香港で開催された「日本賞」関連シンポジウムに各国の番組プロデューサーが参加し，「良い子ども番組の条件」について意見が交換された。そこで，良い子ども番組には，広義の「教育性」と「表現性」を合わせ持っていることが指摘され

た。「教育性」とは「ターゲット，目的が明確であること」「子どもの創造力を鼓舞し，次の能動的行動を勇気づけるもの」「表現や内容がターゲットの発達段階に応じてふさわしいもの」である。また「表現性」とは，「素材，構成，シナリオ，映像，音声がターゲットの子どもにとって魅力的であること，内容や物語がよく練られていること，映像や音声が創造的で，革新的であること」である。さらに「幼い子どもに向けた番組に必要なこと」として，「その世界で子どもが「安全であり，自由である」と感じること」「親が“子どもが見ても安心である”と感じられること」「子どもの生活，心身の健康に配慮していること」「コミュニケーションを促すものであること」という要素が挙げられている。

参考文献：

秋山隆志郎「幼児向けテレビ番組の実験的研究」『文研月報』(1983.1)

秋山隆志郎，小平さち子「幼児向けアニメの研究と開発」『放送研究と調査』(1986.10)

秋山隆志郎，小平さち子「『おかあさんといっしょ』と幼児の視聴行動」『放送研究と調査』(1987.8)

天野正子，石谷二郎，木村涼子『モノと子どもの昭和史』平凡社ライブラリー(2015)

飯森彬彦「『婦人の時間』の復活」『放送研究と調査』(1990.11)

飯森彬彦「『婦人課』の誕生」『放送研究と調査』(1990.12)

飯森彬彦，河野謙輔，小平さち子「学校放送はどのように利用されているか」『放送研究と調査』(1993.5)

井上ひさし『ブラウン監獄の四季』(1977) 講談社

NHK[おかあさんといっしょ]制作スタッフ『だから『おかあさんといっしょ』』(1987) 実業之日本社

NHKサービスセンター『おかあさんといっしょFUN BOOK』(2003)

NHK放送文化研究所編『20世紀放送史』日本放送出版協会 (2001)

NHK放送文化研究所編『テレビ視聴の50年』日本放送出版協会 (2003)

大岡トヨ「「幼稚園教育要領」(1956)，作成の政策的背景とその特質」『早稲田教育評論』(2012)

おかだえみこ『人形［パペット］アニメーションの魅力』河出書房新社 (2003)

川上行蔵『教育放送五十年』日本放送教育協会 (1997)

川本喜八郎『チェコ手紙＆チェコ日記』(2015)

黒柳徹子『トットチャンネル』新潮文庫 (2016)

小平さち子「母と子のテレビタイム」『放送研究と調査』(1995.6)

小森美巳『お母さんといっしょの優しい時間』グラフ社 (2007)

齋藤正典「『おかあさんといっしょ』における着ぐるみ人形劇の変遷とその時代背景」『児童教育学会研究集録』(2008.3)

佐藤雅彦『クリック』講談社 (1998)

ジェラルド・S・レッサー『セサミ・ストリート物語』サイマル出版会 (1976)

島田匠子「江上フジ関係資料」『放送研究と調査』(2014.9)

白石信子「幼児のテレビ視聴」『放送研究と調査』(1990.10)

＊幼児視聴率調査に関する以下の『放送研究と調査』
(1991.10～1994.10) (1995.12) (1996.10)
(1997.11) (1998.10) (1999.11) (2000.11)
(2001.10) (2002.11) (2003.8) (2005～2015.10)
(2016.11) (2017.10) (2018.10)

中村三緒子「幼稚園教育要領・教育課程の変遷と課題」淑徳大学短期大学研究紀要56号 (2017.2)

日本女性放送者懇談会『放送ウーマンの70年』講談社 (1994)

日本放送教育協会編『教育放送75年の軌跡』(2012)

日本放送協会放送史編修室『日本放送史』日本放送出版協会 (1965)

野本三吉『子ども観の戦後史 (増補改訂版)』現代書館 (2007)

橋元良明編著『メディア・コミュニケーション学』大修館書店 (2008)

広谷鏡子『「放送ウーマン」が見てきた戦中・戦後』『放送研究と調査』(2015.7)

古田尚輝「教育テレビ40年学校教育番組の変遷」『放送研究と調査』(1999.7)

別冊太陽「川本喜八郎　人形　この命あるもの」(2007)

みやしたゆきこ『おかあさんといっしょのあ・い・う』くまざき出版社 (2000)

付表1-1 『おかあさんといっしょ』年表（1959～1978）

番組名＼年	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968
トピック	週1生放送開始	週6日開始		再放送開始				2番組統合		
放送時間			8:30～8:40							
再放送				14:25～14:35		15:20～15:30				
うたのえほん			出演（隔週）：真理ヨシコ（～62年）、中野慶子（～64年） 体操「元気に一、二」（～69年） （詞：吉岡治 曲：越部信義） 出演：砂川啓介（～69年）	出演：真理ヨシコ，中野慶子，竹前文子（～64年） 体操（土）「おもちゃのラッパ」（～69年）佐久間俊直		出演：水谷玲子（～66年）、中野慶子，中川順子（～66年）			出演：中川順子，片桐和子（～70年）、瀬端優美子（～70年） 体操：岡田祥造（～69年）	
放送時間	（月）13:40～14:00	（月）～（土）10:05～10:21	10:05～10:22	10:05～10:30				10:05～10:30		
再放送				14:35～15:00		15:00～15:20	15:05～15:30	15:05～15:30		
おかあさんといっしょ	出演：旗照夫，宮崎恭子，島田妙子 作：筒井敬介 音楽：宇野誠一郎 人形：川本喜八郎	**（月，火）** **「ブーフーウー」** 作：飯沢匡／人形デザイン：土方重巳／人形製作：川本喜八郎／音楽：小森昭宏 声：大山のぶ代，三輪勝恵，黒柳徹子，永山一夫 司会：荻昱子（65年～里見京子）							**（月，火）「ダットくん」** 作：飯沢匡 人形：土方重巳，川本喜八郎 司会：吉田珠江	
		（水，木） **「うたってあそんで」** 出演：旗照夫，島田妙子，田村寿子，佐々木伊都子 作：筒井敬介 音楽：宇野誠一郎		**（水）** **「おはなしのもり」** 出演：旗照夫ほか		**（水）** **「どうぶつさんこんにちは」**	**（水）** **「うたいっぱい」** 作：筒井敬介　出演：高橋元太郎，真理ヨシコ，ボーカルショップ，ブーク		**（水）** **「らっぽんぽん」** 出演：旗照夫，真理ヨシコ 人形：土方重巳，川本喜八郎	
				（木）「こんな絵もらった」 絵：堀内誠一（65年～大村百合子（隔週））				**（木）** **「おはなしいっぱい」** 出演：真理ヨシコ，牟田悌三，ボーカルショップ 人形：川本喜八郎／シルエット：かかし座	**（木）** **「きみ　だあれ」** 作：筒井敬介／操作：劇団ころすけ	
		（金） **「いいものつくろ」** 工作：上田次郎 作：山中恒（62年～山元護久） 音楽：越部信義 人形劇：劇団ジロー 声：黒江悠久，里見京子（＊62年～出演：安田章子）	**（金）** **「なかよしおばさん」**			**（金）** **「いいものつくろ」** （65～） 出演：加藤晃，はせさん治，佐々木伊都子		**（金）** **「なんにもないくに」** 出演：早野寿郎，佐藤香，じゅんピノキオ 作：石山透，菜川作太郎 音楽：越部信義	**（金）** **「おはなしこんにちは」** 出演：吉行和子（～69年）、神保共子（69年～）、田島令子（71～73年）	
		（土） **「なかよしおばさん」** 出演：轟夕起子 作：田中ナナ，小池タミ子，牧野朝子，清水浩二 音楽：桜井順 人形：ひとみ座	**（土）** **「いいものつくろ」** 作：山元護久／出演：安田章子			**（土）** **「みんなあつまれ」** 出演：新克利ほか		**（土）** **「どうぶつさんこんにちは」**	**（土）** **「手をつなごう」** 出演：佐久間俊直（～72年）、葉村エツコ（69年～）、竹内伸司（71年～）	
				「こんにちは」（月～土･5分） 出演：高橋征郎，延原暁子 作：筒井敬介ほか 作曲：中田喜直ほか		**「たのしいのりもの」（月～土・5分）** 作：藤田孝美，本多俊夫 声：湯浅実	**「どうぶつさんこんにちは」（月～土･5分）**			

1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978
		1日3回放送			再々放送中止		(日)～(木)帯化		
							9:30～9:55		
							17:30～17:55	17:30～17:55	
体操「ジャンボンボン」 (～74年)(詞：グループM／曲：山本直純)／出演(隔週)：向井忠義(～73年)，小西幸男(～71年)，輪島直幸(71～78年)，川原洋一郎(～74年) **「うたのえほん」** 片桐和子(～70年)，瀬端優美子(～70年)，森晴美(70～71年)，斉藤昌子(69～72年)，田中星児(71～77年)，小鳩くるみ(72～74年) **「幼児のためのアニメーション」** 田中八寿穂(2'30)					**体操「地球をどんどん」** (74～76年)(詞：阪田寛夫／曲：越部信義) 出演(隔週)：輪島直幸，瀬戸口清文(～87年) **「うたのえほん」** (～79年)斉藤伸子，松熊由紀，田中星児 **「幼児のためのアニメーション」(2'30)**		**ゴロンタ・トムトム・チャムチャムの3匹のぬいぐるみと遊ぶ** **楽器や玩具を使ってリズム遊び** **送られてくる「みんなの絵」** **ゲストショウ** **「シャビシャボー」(フランス国営テレビ制作アニメ)** **ゲストによるおはなし** **フィルムによる動物・乗り物** うたのお兄さん：田中星児，水木一郎(～79年) うたのお姉さん：斉藤伸子，松熊由紀 **たいそう「地球をどんどん」** 輪島直幸，瀬戸口清文	**たいそう「スイッチオン」** 輪島直幸，瀬戸口清文 **日替わりコーナー** ・工作ショウ ・おはなし(ゲスト) ・自動車ゲームと「シャビシャボー」「カメラ小僧の大冒険」 ・クイズとフィルム(動物・乗り物・昆虫) **「ゴロンタ劇場」** うたのお兄さん(隔週)：水木一郎，たいらいさお(～79年) うたのお姉さん(隔週)：松熊由紀，斉藤伸子 **「ゴロンタ音頭」** (エンディング)10月～	**ゴロンタ劇場** 三枝睦明(9月～) **日替わりコーナー** ・造形あそび　輪島直幸 ・おはなし　ゲスト(9月～)びっくりフィルム(動物，自然) ・クイズ　輪島直幸 ・「シャビシャボー」「カメラ小僧の大冒険」(隔週)(～9月) うた：水木一郎，たいらいさお(隔週)，松熊由紀，斉藤伸子(隔週) **たいそう「スイッチオン」** 瀬戸口清文 **「ゴロンタ音頭」** 司会：輪島直幸
		15:05～15:30/ 17:30～17:55(月～金)			15:05～15:30				
(月) **「とんちんこぼうず」** 作：飯沢匡／絵：清水崑 声：愛川欽也ほか		**(月)** **「とんでけブッチー」** 作：飯沢匡			**(月)** **「うごけぼくのえ」** 作：飯沢匡／司会：浜井都				
(火) **「どうぶつくん」**出演：西尾徳ほか **「みてごらん」**(72年10月～)				**(火)** **「みてごらん」**		**(火)** **「はいスタート」** 出演：馬場のぼる			
		(水) **「ほあほあどん」** 作：片岡輝ほか 出演：真理ヨシコ		**(水)** **「おはなしこんにちは」**					
(木) **「これは**です」** 作：井上ひさし，山元護久 出演：植木マリ子，熊倉一雄ほか		**(木)** **「これなあに」**	**(木)** **「わからん島」** **「いちにのさんにん」**	**(木)** **「いちにのさんにん」**		**(木)** **「いそがしおじさん」** 出演：谷啓ほか			
				(金) **「手をつなごう」**			**(金)** **野外あそび(各局発)** 出演：米田和正，猪浦宏昌(1978～)，一城みゆ希		
				(土) **「ヤンヤンムウくん」** 人形：川本喜八郎 作：山本護久，片岡輝			**(土)** **人形劇「大どろぼうホッツェンプロッツ」** 脚本：たなべまもる 出演：山田康雄(10月～) **「ペリカンおばさん」** 作：飯沢匡 音楽：小森昭宏 人形：土方重巳，佐藤三郎 出演：小野栄一 声：増山江威子，堀絢子，大山のぶ代	**(土)** **「ペリカンおばさん」** (10月～) **「おはなしややや」** 作：須藤出穂，岩間芳樹，蓬莱泰三，城悠輔ほか 出演：犬塚弘，クニ河内	**(土)** **「おもちゃおじさん」** (**「ミューミューニャーニャー」**) 作：飯沢匡 音楽：小森昭宏 人形：土方重巳，佐藤三郎 出演：有馬昌彦 声：里見京子，八木光生，三輪勝恵

＊『おかあさんといっしょ』50年データ構成表年表(1959～2009)に加筆
注：太枠内は『うたのえほん』を示す。太字はコーナー名を示す。

付表1-2 『おかあさんといっしょ』年表（1979～1999）

番組名＼年	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988
トピック	（月）～（金）帯化				（月）～（土）帯化		再放送教育へ			
放送時間	9:30～9:55									
再放送	17:30～17:55					17:05～17:30	17:00～17:25			
おかあさんといっしょ	**「ブンブンたいむ」** 作：舟崎克彦 音楽：越部信義 人形：岡部久義 小道具：上田順一 声：小原乃梨子，山田康雄，肝付兼太 うた：宮内良（～81年），奈々瀬ひとみ（～81年） **日替わりコーナー** ・うたいっぱい ・造形あそび 輪島直幸 ・おはなし 奈々瀬ひとみ ・クイズ 輪島直幸 ・ゲーム 輪島直幸 ・アニメーション（イタリアPMBB制作） Red＆Blue，Mio＆Mao，AEIOU，Quaq Quao **「バジャマでおじゃま」** 詞：榎木富士夫 曲：若月明人 うた：ボニージャックス **「バランたいそう」** 詞：山本正之 曲：越部信義 うた：ボニージャックス，NHK東京児童合唱団 出演：瀬戸口清文 **「ブンブンホイ」** （6月～82年） 詞：舟崎克彦 曲：越部信義 司会：輪島直幸	**「ブンブンたいむ」** うた：宮内良，奈々瀬ひとみ **日替わりコーナー** ・うたいっぱい＆「Quaq Quao」 ・造形あそび 輪島直幸 ・おはなし 奈々瀬ひとみ ・クイズ 輪島直幸 ・お便り 輪島直幸＆「Mio Mao」 **<親子たいそう>** 輪島直幸 **「バジャマでおじゃま」** **「コケコッコ」たいそう** **「ブンブンホイ」** （司会）輪島直幸	**「ブンブンたいむ」** **「ハイポーズ」** 出演：馮智英 音楽：クニ河内 **うたと日替わりコーナー** かしわ哲，しゅうさえこ，林アキラ エレクトーン：小寺久美子，南部昌江 ・造形あそび ・クイズ ・おはなし（オリジナル） ・手あそび人形 ・ブロックコント **「バジャマでおじゃま」** **「コケコッコたいそうPart2」** **「ブンブンホイ」**	**オープニング「にこにこれっしゃ」** 詞：鯨岡隆，中西一雄 曲：越部信義 **「にこにこぶん」** 作：井出隆夫 人形：岡部久義 音楽：越部信義 声：肝付兼太，中尾隆聖，横沢啓子，高木均，DO! **「ハイポーズ」** 出演：馮智英 **うたと30秒セグメント** かしわ哲，しゅうさえこ，林アキラ ・クイズ（ふしぎ袋，マルチバネル，回転ブラインド，クロマキーシルエット，ミラー，どこにいるetc） ・アニメ ひもメーション，キリメーションなど （アニメ）加藤晃 ・「マウス」（西ドイツWDR制作） ・映像あそび（ブロックコント，手影絵） ・電話あそび ・おたより **「バジャマでおじゃま」** **たいそう「ぞうさんのあくび」** 詞：遠藤幸三 曲：乾裕樹 **「まねっこぶん」** 詞：井出隆夫 曲：越部信義	**PartⅠ** **【タイトルアニメーション】** 本田幸雄 **「にこにこぶん」** **今月の歌** **「バジャマでおじゃま」／「はみがきじょうずかな」** **「四つのへや」** 出演：伊藤隆 制作：加藤晃 **「ひげ兄のクイズ」** **「にこぶん人形によるショウ」** うた・おはなし・コント **プリッジアニメ** ひもメーション，キリメーションなど	**PartⅠ** **【タイトルアニメーション】** **「にこにこぶん」** **「バジャマでおじゃま」「はみがきできるかな」「おとうさんもはだかんぼう」** **あいさつコーナー** 出演：古今亭朝太 **プリッジアニメ** キリメーション，ひもメーション，ぼたんメーションなど **朝太ショウ** 出演：古今亭朝太 構成：鯨岡隆，横山由和 **百面相プリッジ** グループジロー	**PartⅠ** **【タイトルアニメーション】** **「にこにこぶん」** **「バジャマでおじゃま」「はみがきじょうずかな」「おとうさんもはだかんぼう」** **朝太あいさつコーナー** 出演：古今亭朝太（9月から志ん輔） **プリッジアニメ** キリメーション，ひもメーション，ぼたんメーションなど **（86年～）「こんなこいるかな」** キャラクター：有賀忍 アニメ：月岡貞夫 **朝太ショウ** 出演：古今亭朝太 **百面相プリッジ**	**PartⅠ** **【タイトルアニメーション】** **「にこにこぶん」** **「バジャマでおじゃま」** **「はみがきじょうずかな」** **「おとうさんもはだかんぼう」** **あいさつコーナー** 出演：古今亭朝太 **プリッジアニメ** **「こんなこいるかな」** （88年4月より復活）ひもメーション，キリメーションなど **志ん輔ショウ** 出演：古今亭志ん輔 **百面相プリッジ**	
	（土） **「ミューミューニャーニャー」** **「どんどんどん」（各局中継）** 出演：三笑亭夢之助，森都 （80年）山田隆夫，小泉裕美子　（81年）小泉裕美子ほか　（82年）柴田進ほか				**PartⅡ** **「ハイポーズ」** 出演：馮智英 **うた** 出演：林アキラ，森みゆき **「ふたりであそぼう」** 出演：瀬戸口清文 **たいそう「ぞうさんのあくび」**	**PartⅡ** **「ハイポーズ」** 出演：馮智英 **うた** 林アキラ，森みゆき **たいそう「ぞうさんのあくび」** 出演：瀬戸口清文 **「さよならマーチ」** 詞：井出隆夫 曲：越部信義	**PartⅡ** **「ハイポーズ」** （太極拳バージョン加入） 出演：馮智英 **うた** 出演：森みゆき，坂田おさむ **たいそう「ぞうさんのあくび」** 出演：瀬戸口清文 **「さよならマーチ」**	**Part2** **「ハイポーズ」** 出演：馮智英 **うた** 出演：坂田おさむ，神崎ゆう子 **たいそう「ぞうさんのあくび」** 出演：天野勝弘 **「さよならマーチ」**	

1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
							ハイビジョン化	(土)教育へ	本放送教育へ	
		9:30~9:54			9:30~9:55				8:35~9:00	8:30~8:59
		17:00~17:24			17:00~17:25					16:20~16:49
		PartⅠ **【オープニングアニメーション】** **「にこにこぷん」** **あいさつコーナー** 古今亭志ん輔 **プリッジアニメ** **「ふたりはなかよし」** アニメ:プッペ **志ん輔ショウ** 古今亭志ん輔 造形:加藤晃, 平山一美 **「パジャマでおじゃま」「はみがきじょうずかな」** **百面相プリッジ**	PartⅠ **【タイトルアニメーション】** 大井文雄, 吉良敬三 **「ドレミファ・どーなっつ!」** 作:井出隆夫 人形デザイン:佐藤邦雄 声:佐久間レイ, 小桜エツ子, 中尾隆聖, 青木和代, 小林修 **あいさつコーナー** 出演:古今亭志ん輔 **プリッジアニメ** **「ふたりはなかよし」** **志ん輔ショウ** 出演:古今亭志ん輔 **「パジャマでおじゃま」** **「はみがきじょうずかな」** **百面相プリッジ**		PartⅠ **【タイトルアニメーション】** **「ドレミファ・どーなっつ!」** **あいさつコーナー** 出演:古今亭志ん輔 **プリッジアニメ** **「ふしぎなあのこはすてきなこのこ」** **志ん輔ショウ** 出演:古今亭志ん輔 **プリッジアニメ** **「バクシ」**アニメ:やまむら浩二 **「もんびー」**アニメ:石田卓也 **百面相プリッジ**		PartⅠ **【タイトルアニメーション】** **「ドレミファ・どーなっつ!」** **あいさつコーナー** 出演:古今亭志ん輔 **アニメーション** **「こんなこいるかな」「ふたりはなかよし」「ふしぎなあのこはすてきなこのこ」「もんびー」「バクシ」** **積み木ショー** CGアニメ:シーウィーディー 音楽:大森俊之 **「パジャマでおじゃま2」** 編曲:大森俊之 うた:ジャマーズ **百面相プリッジ**	PartⅠ **「ドレミファ・どーなっつ!」** **あいさつコーナー** 出演:古今亭志ん輔 **<HVアニメーション>「スプーンひめのスイングキッチン」** 原作:たちいりはるこ アニメ:福島治 **志ん輔ショウ** 出演:古今亭志ん輔 **「パジャマでおじゃま2」** **百面相プリッジ**		**【オープニングテーマ99】** CG:(スリー・デイ)吉良敬三, 飯田力 曲:堀井勝美 **うたとあいさつ** 出演:杉田あきひろ, つのだりょうこ, スプー **「やんちゃるモンちゃ」** キャラクターデザイン:武田美穂 アニメーション:堀口忠彦 声:あやの **「だんご3兄弟あっという間劇場」** 作:佐藤雅彦, 内野真澄 音楽:堀江吉朗 アニメーション:秋穂範子 **「パジャマでおじゃま2」「はみがきじょうずかな2」** **「あっちむいて・ホイ」** **「ドレミファ・どーなっつ!」** **「デ・ボン!」** 出演:タリキヨコ, スプー **「スプーとガタラット」** 人形デザイン:城哲也 脚本:鈴木竹志 音楽:堀井勝美 声:川村万梨阿, 千葉繁 人形製作:スドーアート工房, スタジオノーヴァ **たいそう「あ・い・う~」** **「ぼくのともだち」** 原作:のぶみ 絵コンテ:影山康生, 萩原一則 語り:ドリアン助川 **「みててごらん」** **うた** **「スプラッピ　スプラッパ」** 詞:鈴木竹志 曲:堀井勝美
		PartⅡ **「ハイボーズ」** 馮智英 **うた** 坂田おさむ, 神崎ゆう子 **たいそう「ぞうさんのあくび」** 出演:天野勝弘 **「さよならマーチ」**	PartⅡ **「ハイボーズ」** 出演:馮智英 **うた** 坂田おさむ, 神崎ゆう子 (93年~)速水けんたろう, 茂森あゆみ **たいそう「ぞうさんのあくび」** 出演:天野勝弘 (93年~)佐藤弘道 **「ドレミファ列車」(エンディング)** 詞:井出隆夫 曲:乾裕樹		PartⅡ **「トライ・トライ・トライ」** 出演:松野ちか 音楽:悠木昭宏 **うた** 速水けんたろう, 茂森あゆみ **たいそう「ぞうさんのあくび」** 佐藤弘道 **「ドレミファ列車」**		PartⅡ **「トライ・トライ・トライ」** 出演:松野ちか 音楽:池毅 (*内容, 衣装, 音楽をリニューアル) **うた** 速水けんたろう, 茂森あゆみ **たいそう「あ・い・う~」** 詞:日暮真三 曲:渋谷毅 出演:佐藤弘道 **「ドレミファ列車」**	PartⅡ **「トライ・トライ・トライ」** 出演:松野ちか **うた** 速水けんたろう, 茂森あゆみ **たいそう「あ・い・う~」** **エンディング「ドレミファ列車」**			
								(土) **アニメ版「ドレミファ・どーなっつ!」** アニメ制作:アクシス **動物映像シリーズ** 「アフリカの動物」「動物の親子」「ファーマーとガーゴシリーズ」 **志ん輔ショウ** **「はみがきじょうずかな2」** **CG「きょう君」「きりぬき絵本」** **「ジン・ジン・ジム」** 佐藤弘道, 松野ちか **うた** 速水けんたろう, 茂森あゆみ **たいそう「あ・い・う~」** **「ドレミファ列車」**			

注:太字はコーナー名を示す。

付表1-3 『おかあさんといっしょ』年表（2000～2019）

番組名＼年	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
トピック			BS『おかあさんといっしょ』開始							
放送時間	8:31～9:00			8:30～8:59		8:35～9:00				
再放送	16:21～16:50			16:20～16:49		16:20～16:45				
おかあさんといっしょ	**【オープニングテーマ99】** CGアニメ：吉良敬三／曲：堀井勝美 **あいさつとうた** 杉田あきひろ，つのだりょうこ，スプー **「やんちゃるモンちゃ」** **「ぐ～チョコランタン」** 人形デザイン：城哲也 脚本：鈴木竹志，吉田玲子，西川つかさ 音楽：堀井勝美 声：川村万梨阿，くまいもとこ，千葉千恵巳，山口勝平，千葉繁 人形製作：スドーアート工房 **「デ・ボン」** タリキヨコ **月の歌** **「ぼくのともだち」** （月～水） **「だんご3兄弟あっという間劇場」** （木～土） **お兄さんお姉さんコーナー** （日替わりセグメント） 2000年度 ・お絵描き（月） ・なんにみえる？（火） ・スプーと話そう（水） ・はてなボックス（木，金） ・やぎさんゆうびん（お便り）（土） 2001年度 ・フリマネ大作戦（月） ・なんにみえる？（火） ・スプーと話そう（水） ・はてなボックス（木） ・ちぎってポン！（金） ・やぎさんゆうびん（土） **「パジャマでおじゃま～2」** （月水金） **「はみがきじょうずかな～2」** （火木土） **インターミッション** 自然風景（海，空，森，滝，牧場など） 「ふしぎ大自然」 **たいそう「あ・い・う～」** 佐藤弘道 **エンディング「スプラッピ・スプラッパ」**		**【オープニングテーマ99】** **あいさつとうた** 杉田あきひろ，つのだりょうこ，スプー **「でこぼこフレンズ」** 作：鍬本良太郎，丸山もも子 アニメ：秋穂範子 音楽：MAXMAN **「ぐ～チョコランタン」** 脚本：鈴木竹志，西川つかさ **「デ・ボン」** タリキヨコ **「パジャマでおじゃま～2」** （月水金） **「はみがきじょうずかな～2」** （火木土） **月の歌** **お兄さんお姉さんコーナー** （日替わりセグメント） ・フリマネにっぽんぽほんのほん （月） ・さいころアップップ（火） ・はてなボックス（水） ・はてなマント（木） ・ぐるぐるキッチン（金） ・やぎさんゆうびん（土） **「だんご3兄弟あっという間劇場」** **インターミッション**　自然風景 **たいそう「あ・い・う～」** 佐藤弘道 **エンディング「スプラッピ・スプラッパ」**	**【オープニングテーマ99】** **あいさつとうた** はいだしょうこ，今井ゆうぞう，スプー **「でこぼこフレンズ」** **「ぐ～チョコランタン」** 脚本：鈴木竹志，西川つかさ **「デ・ボン」** タリキヨコ **「パジャマでおじゃま～2」** （月水金） **「はみがきじょうずかな～2」** （火木土） **「へんし～ん」** （月～水のみ） **お兄さんお姉さんコーナー** （日替わりセグメント） 2003年度 ・どっちどっち（月） ・さいころアップップ（火） ・しりとりドライブ（水） ・一畳マン（木） ・ぐるぐるキッチン（金） ・やぎさんゆうびん（土） 2004年度 ・さいころアップアップ（月） ・おはなしたまてばこ（火） ・しりとりドライブ（水） ・一畳マン（木） ・どうぶつカメラ（金） ・やぎさんゆうびん（土） **月の歌** **「だんご3兄弟あっという間劇場」** （～2004年3月） **「パンツばんくろう」** （2004年4月～） 作：あきやまただし 音楽：松本雅隆（ロバの音楽座） アニメーション：egg 声：芝原チヤコ，佐久間レイ，大倉孝二，柳家三三，榎本温子 **インターミッション**　動物・自然 **たいそう「あ・い・う～」** 佐藤弘道 **エンディング** **「スプラッピ・スプラッパ」**	**【オープニングテーマ99】** **あいさつとうた** はいだしょうこ・今井ゆうぞう・スプー **「でこぼこフレンズ」** **お兄さんお姉さんコーナー** 2005年度 ・なんになるでショー（月・水） ・まねっこビーナッツ（火・木） ・やぎさんゆうびん（金） 2006年度 ・おとのけんきゅうじょ（月） ・まねっこビーナッツ（火） ・すりかえかめん（水） ・なんになるでショー（木） ・やぎさんゆうびん（金） 2007年度 ・どっちがどっち（月） ・まねっこビーナッツ（火） ・すりかえかめん（水） ・なんになるでショー（木） ・やぎさんゆうびん（金） **「ぐ～チョコランタン」** 脚本：鈴木竹志，西川つかさ **「ズーズーダンス」** （05.4～07.3） 振付：前田清美，藤田さくら 作曲：赤坂東児 **「ゴッチャ！」** （07.4～11.3） 振付：田井中智子 作曲：赤坂東児 出演：いとうまゆ **「パジャマでおじゃま～2」** （月水金） **「はみがきじょうずかな～2」** （火木土） **「パンツばんくろう」** **インターミッション** 動物・自然 **「ばわわぶたいそう」** （05.4～13.3） 詞：平方宏明 曲：堀井勝美 うた：中西圭三 振付：杉谷一隆，NAO 監修：佐々木玲子 出演：小林よしひさ **エンディング「スプラッピ　スプラッパ」** **（土）** **「あそびだいすき」** ～野外ロケによる親子あそび～（05.3～08.3） 出演：佐藤弘道，きよこ	**【オープニングテーマ99】** **あいさつとうた** 三谷たくみ，横山だいすけ，スプー **「でこぼこフレンズ」** **お兄さんお姉さんコーナー** ・これなあに？ （月） ・すりかえかめん （火） ・つぎ！どのポーズ （水） ・まねっこビーナッツ（木） ・やぎさんゆうびん （金） ・よし&まゆのあそびコーナー（土） 2008.4～ 2010.3 小林よしひさ，いとうまゆ ・「でかけよう！」 詞：谷口國博 曲：本田洋一郎 歌：WISE ・たいけつ！はりきってゲーム（親子ゲーム・ロケ） ・遊び歌（ロケ） **「ぐ～チョコランタン」** 脚本：鈴木竹志，西川つかさ **「ゴッチャ！」** （月～金） いとうまゆ **生活習慣ロケコーナー** ・「パジャマでおじゃま～2」（月木） ・「はみがきじょうずかな～2」（火金） ・「パンツばんくろう」のたためるかな？」（水） **インターミッション** 動物・自然 **「ばわわぶたいそう」** 小林よしひさ **エンディング「スプラッピスプラッパ」**	**【オープニングテーマ2009】** CGアニメ：（スリー・ディ）吉良敬三，木下洋子 作曲：斎藤ネコ **あいさつコーナー** 三谷たくみ，横山だいすけ **「モノランモノラン」** （2009.4～2011.3） 原案：畠中恵 脚本：金杉弘子，大熊智，柿原優子 デザイン：山根Yuriko茂樹 音楽：斎藤ネコ 声：山田ふしぎ，城雅子，山口勝平，大友龍三郎，尾形雅宏，小林優子，植竹香菜，こおろぎさとみ 人形製作：スドーアート工房 **うた** 三谷たくみ，横山だいすけ **「でこぼこフレンズ」** **「ゴッチャ！」** （月～金） いとうまゆ／「でかけよう！」（土） 小林よしひさ，いとうまゆ **お兄さんお姉さんコーナー** （日替わりセグメント） ・これなあに？ （月） ・すりかえかめん （火） ・おっきいちっちゃいゲーム（水） ・ふしぎなつぼ （木） ・やぎさんゆうびん （金） ・よし&まゆのあそびコーナー（土） 小林よしひさ，いとうまゆ ・たいけつ！はりきってゲーム（ロケ） ・遊び歌（ロケ） **生活習慣ロケコーナー** ・「パジャマでおじゃま～2」（月木） ・「はみがきじょうずかな～2」（火金） ・「パンツばんくろうのたためるかな？」（水） **インターミッション** 動物・自然 **「ばわわぶたいそう」** 小林よしひさ **エンディング「あしたてんきにな～れ！」** 作詞：日暮真三 作曲：赤坂東児

2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
8:00~8:25	8:01~8:24			8:00~8:24					
16:20~16:45	16:36~16:59			16:35~16:59	16:30~16:54		16:20~16:45		
【オープニングテーマ2009】 **あいさつとうた** 三谷たくみ, 横山だいすけ **「でこぼこフレンズ」** (月·水·金) ·「ふしぎなあのこはすてきなこのこ」(火) ·「パンツぱんくろう」(木) ·「スプーンひめのスイングキッチン」(土)＊アニメ日替 **「ゴッチャ!」** (月～金) いとうまゆ **「モノランモノラン」** **お兄さんお姉さんコーナー** (日替わりセグメント) ·これなあに? (月) ·すりかえかめん (火) ·あっぱれ!たまてばこ(水) ·かおのてんらんかい(木) ·やぎさんゆうびん (金) **生活習慣ロケコーナー** ·「パジャマでおじゃま」(月) ·「ばんくろうのたためるかな?」 (火) ·「ばんくろうのいただきます」 (水) ·「はみがきじょうずかな」(木) ·「ばんくろうのいってきます」(金) **インターミッション** 動物·自然 **「ばわわぶたいそう」** 小林よしひさ **エンディング「あしたてんきになー れ!」**	**【オープニングテーマ2009】** **あいさつとうた** 三谷たくみ, 横山だいすけ **「ともだち8人」** キャラクター 原案 : 長谷川義史 脚本 : 日暮真三, 床屋かなぶん 音楽 : 森本清人 アニメ : 堀口忠彦, egg NA : 八島智人 声 : 斉藤貴美子, 斉藤祐圭, 藤巻恵理子, 山口繭 ストーリー監修 : 内田伸子 **「ゴッチャ!」** (月～金) いとうまゆ **「ポコポッテイト」** 脚本 : 金杉弘子 音楽 : 斎藤ネコ キャラクターデザイン, セットイメージ : 土田ひろゆき 声 : くまいもとこ, 加藤英美子, ひなたおさむ, こおろぎさとみ, 緒方賢一, 江原正士, 小林優子 人形製作 : リップ **お兄さんお姉さんコーナー** (日替わりセグメント) ·これなあに? (月) ·すりかえかめん (火) ·リンちゃん どうする?(水) ·おえかきブギウギ (木) ·やぎさんゆうびん (金) **生活習慣ロケコーナー** ·「リンちゃんのいただきます」(月) ·「はみがきじょうずかな」(火) ·「パジャマでおじゃま」(水) ·「リンちゃんのたためるかな?」 (木) ·「リンちゃんのいってきます」(金) **インターミッション** 動物·自然 **「ばわわぶたいそう」** 小林よしひさ **エンディング「あしたてんきになー れ!」**	**【オープニングテーマ2009】** **あいさつとうた** 三谷たくみ, 横山だいすけ(2013年度からムテ吉が子席に登場) **「ポコポッテイト」** 脚本 : 金杉弘子 **「ともだち8人」** **「バント!」**(月～金) 出演 : 上原りさ 監修 : カンジヤマ·マイム 作曲 : 栗原正己 演目 : (2012)タオル, 風船, バナナ, (2013追加)傘, ロボット, ロープ, 雪 **お兄さんお姉さんコーナー** 2012年度 ·これなあに?(月) ·すりかえかめん(火) ·リンちゃん どうする?(水) ·おえかきブギウギ(木) ·やぎさんゆうびん(金) 2013年度 ·なんだっけ?(月) ·すりかえかめん(火) ·かぞえてんぐ(水) ·メーコブのおえかききぶん(木) ·やぎさんゆうびん(金) **生活習慣ロケコーナー** ·リンちゃんのいただきます(月) ·はみがきじょうずかな(火) ·パジャマでおじゃま(水) ·リンちゃんのたためるかな(木) ·リンちゃん,のいってきます(金) **インターミッション** 動物·自然 **「ばわわぶたいそう」** 出演 : 小林よしひさ **エンディング** **「あしたてんきになー れ!」**	**【オープニングテーマ2009】** **あいさつとうた** 三谷たくみ, 横山だいすけ, ムテ吉 **「ポコポッテイト」** 脚本 : 金杉弘子 **「バント!」**(月～金) 出演 : 上原りさ **「ともだち8人」**(＊2015年度からは土のみの放送に) **お兄さんお姉さんコーナー** 2014年度·2015年度 ·なんだっけ?(月) ·すりかえかめん(火) ·かぞえてんぐ(水) ·め～しゃしん(木) ·やぎさん,ゆうびん(金) **生活習慣ロケコーナー** ·リンちゃんのいただきます(月) ·はみがきじょうずかな(火) ·パジャマでおじゃま(水) ·リンちゃんのたためるかな(木) ·リンちゃんのいってきます(金) **インターミッション** 動物·自然 **「ブンバ·ボーン!」** 出演 : 小林よしひさ 詞 : 谷口國博 曲 : 赤坂東児 歌 : コング桑田, 西けいこ, スマイルキッズ 振付 : teamたにぞう 監修 : 中村和彦 **エンディング** **「あしたてんきになー れ!」**		**【オープニングテーマ2016】** **あいさつとうた** 小野あつこ, 横山だいすけ **「ガラピコぷ～」** 作 : 山中隆次郎 キャラクターデザイン : ひやまたつみ タイトルアニメーション : 久野遥子 声 : 吉田仁美, 富田泰代, 川島得愛, 佐藤仁美 人形美術 : アトリエTOM, 中川真由子 **「バント!」** (月～金) 出演 : 上原りさ **「ともだち8人」** **お兄さんお姉さんコーナー** ·しりとりれっしゃ (月) ·すりかえかめん (火) ·かぞえてんぐ (水) ·ガラピコパズル (木) ·やぎさんゆうびん (金) ·なんだっけ?ナーニくん(土) **生活習慣ロケコーナー** ·ムームーのいただきます(月) ·はみがきじょうずかな(火) ·パジャマでおじゃま(水) ·チョロミーのいってきます!(木) ·ガラピコのたためるかな(金) **インターミッション** 動物·自然 **「ブンバ·ボーン!」** 出演 : 小林よしひさ **エンディング** **「あしたてんきになー れ!」**	**【オープニングテーマ2016】** **あいさつとうた** 小野あつこ, 花田ゆういちろう **「ガラピコぷ～」** 作 : 山中隆次郎 **「バント!」** (月～金) 出演 : 上原りさ **へんてこライオン** 音楽 : 麻吉文 声 : 古田新太 **お兄さんお姉さんコーナー** ·しりとりれっしゃ (月) ·すりかえかめん (火) ·シルエットはかせ (水) ·プリンセスミミィ (木) ·やぎさんゆうびん (金) ·なんだっけ?ナーニくん(土) **生活習慣ロケコーナー** ·ムームーのいただきます(月) ·はみがきじょうずかな(火) ·パジャマでおじゃま(水) ·チョロミーのいってきます!(木) ·ガラピコのたためるかな(金) **インターミッション** 動物·自然 **「ブンバ·ボーン!」** 出演 : 小林よしひさ **エンディング** **「べるがなる」**	**【オープニングテーマ2016】** **あいさつとうた** 小野あつこ, 花田ゆういちろう **「ガラピコぷ～」** 作 : 山中隆次郎 **「バント!」** (月～金) 出演 : 上原りさ **へんてこライオン** 音楽 : 麻吉文 声 : 古田新太 **お兄さんお姉さんコーナー** ·しりとりれっしゃ (月) ·すりかえかめん (火) ·シルエットはかせ (水) ·プリンセスミミィ (木) ·やぎさんゆうびん (金) ·なんだっけ?ナーニくん(土) **生活習慣ロケコーナー** ·ムームーのいただきます(月) ·はみがきじょうずかな(火) ·パジャマでおじゃま(水) ·チョロミーのいってきます!(木) ·ガラピコのたためるかな(金) **インターミッション** 動物·自然 **「ブンバ·ボーン!」** 出演 : 小林よしひさ **エンディング** **「べるがなる」**	**【オープニングテーマ2016】** **あいさつとうた** 小野あつこ, 花田ゆういちろう **「ガラピコぷ～」** 作 : 山中隆次郎 **生活習慣ロケコーナー** ·はみがきじょうずかな(月) ·パジャマでおじゃま(火) ·チョロミーのいってきます!(水) ·ムームーのいってきます(木) ·ガラピコのたためるかな(金) **お兄さんお姉さんコーナー** ·しりとりれっしゃ (月) ·ガラピコにんじゃしゅぎょう(火) ·シルエットはかせ (水) ·プリンセスミミィ (木) ·やぎさんゆうびん (金) ·なんだっけ?ナーニくん(土) **インターミッション** 動物·自然 **「からだ☆ダンダン」** 作詞 : 吉田戦車 作曲 : 小杉保夫 歌 : Fourdans 監修 : 内藤久士, 巣立隆宏 振付 : MAIKO 出演 : 福尾誠, 秋元杏月 **エンディング** **「べるがなる」**
(土) **「あつまれ!土曜日」～体操兄姉による地方収録～**									

注 : 太字はコーナー名を示す。

付表2-1 〈母と子のテレビタイム〉年表（1989～2004）

時間＼年	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
ゾーンタイトル		母と子のテレビタイム						
新番組		**英語であそぼ／母と子のテレビ絵本**	**ひとりでできるもん!**	**音楽ファンタジーゆめ**				**ハッチポッチステーション／いないいないばあっ!**
6								
7								
8			**ひとりでできるもん!**	アニメ・チロリン村	ひとりでできるもん!	音楽ファンタジーゆめ	音楽ファンタジーゆめ	音楽ファンタジーゆめ
				ひとりでできるもん!		ひとりでできるもん!	ひとりでできるもん!	ひとりでできるもん!
			パラソルへんべえ		テレビ絵本	テレビ絵本	テレビ絵本	**ハッチポッチステーション**
			みんなのうた	テレビ絵本				
			母と子のテレビ絵本	英語であそぼ	英語であそぼ	英語であそぼ	英語であそぼ	英語であそぼ
					アニメ・ブルーナの絵本		ブチブチ・アニメ	ブチブチ・アニメ
			英語であそぼ	アニメ・おばけのホーリー	アニメ・おばけのホーリー	アニメ・ボコニャン!	アニメ・おばけのホーリー	アニメ・おばけのホーリー
15								
16	おかあさんの勉強室	ともだちいっぱい（幼保）	ともだちいっぱい（幼保）	アニメ・おばけのホーリー	アニメ・ヤダモン	ブチブチ・アニメ	みんなのうた	みんなのうた
				テレビ絵本	テレビ絵本	ともだちいっぱい（幼保）	わいわいドンブリほか（幼保）	わいわいドンブリほか（幼保）
		にんぎょうげき	にんぎょうげき			みんなのうた	ブチブチ・アニメ	ブチブチ・アニメ
	ミニ番組			幼稚園保育所（再）	アニマ・ハローエスカルゴ島	テレビ絵本	テレビ絵本	**ハッチポッチステーション**
	婦人百科（再）	育児カレンダー	パラソルへんべえ		ともだちいっぱい（幼保）		ひとりでできるもん!	ひとりでできるもん!
			みんなのうた	アニメ・たんけんゴブリン島		ひとりでできるもん!		
			ひとりでできるもん!	ひとりでできるもん!	アニメ・ブルーナの絵本		わくわく動物園	**わくわく動物園／音楽ファンタジーゆめ ＊10月から「いないいないばあっ!」**
					アニメ・チロリン村			
						音楽ファンタジーゆめ	音楽ファンタジーゆめ	
17	おかあさんといっしょ（再）	おかあさんといっしょ（再）	おかあさんといっしょ（再）	おかあさんといっしょ（再）	おかあさんといっしょ（再）	おかあさんといっしょ（再）	おかあさんといっしょ（再）	おかあさんといっしょ（再）
	みんなのうた	**母と子のテレビ絵本**	母と子のテレビ絵本	アニメ・チロリン村	音楽ファンタジーゆめ	アニメ・ボコニャン!	アニメ・ボコニャン!	アニメ・ヤンボウニンボウトンボウ
	青春すくらんぶるほか（再）			**音楽ファンタジーゆめ**	ひとりでできるもん!			
		英語であそぼ	英語であそぼ	英語であそぼ		英語であそぼ	英語であそぼ	英語であそぼ
					英語であそぼ			
		みんなのうた	ミニ番組	みんなのうた		アニメ・チロリン村	アニメ・忍たま乱太郎	アニメ・忍たま乱太郎
18	語学（再）							

1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004
					あつまれ!わんパーク		
	おかあさんといっしょ本放送移設				**ひとりでできるもん!ドキドキキッチン**	**にほんごであそぼ／クインテット**	**からだであそぼ**
						はじめ人間ゴン	アニメ・はりもぐハーリー
						てれび絵本	てれび絵本
	音楽ファンタジーゆめ	ひとりでできるもん!	ひとりでできるもん!	アニメ・忍たま乱太郎	**ひとりでできるもん!ドキドキキッチン**	ひとりでできるもん!ドキドキキッチン	ひとりでできるもん!どこでもキッチン
	プチプチ・アニメ			アニメ・ベイビーフェリックス			英語であそぼ
	アニメ・はりもぐハーリー／おじゃる丸	アニメ・おじゃる丸	アニメ・おじゃる丸	アニメ・おじゃる丸	アニメ・おじゃる丸	アニメ・ブルーナの絵本	
	ひとりでできるもん!					英語であそぼ	**からだであそぼ**
音楽ファンタジーゆめ		英語であそぼ	英語であそぼ	英語であそぼ	英語であそぼ	**にほんごであそぼ**	にほんごであそぼ
ひとりでできるもん!	英語であそぼ	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!
ハッチポッチステーション	ハッチポッチステーション	プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ
	わくわく動物園	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ
英語であそぼ	**おかあさんといっしょ（＊本放送が教育へ移行）**						
プチプチ・アニメ							
アニメ・はじめ人間ゴン							
	みんなのうた	みんなのうた	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!
いないいないばあっ!	わくわく動物園						
	アニメ・ブルーナの絵本						
アニメ・ブルーナの絵本	プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ
プチプチ・アニメ	音楽ファンタジーゆめ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ
ハッチポッチステーション	ハッチポッチステーション						
ひとりでできるもん!	ひとりでできるもん!						
わくわく動物園	いないいないばあっ!	アニメ・ブルーナの絵本	メイシーほか	アニメ・ベイビーフェリックス	アニメ・ベイビーフェリックス	アニメ・ブルーナの絵本	アニメ・ブルーナの絵本
音楽ファンタジーゆめ		ぴりっとQ ほか	つくってワクワクほか	つくってワクワクほか	ピタゴラスイッチミニほか	ピタゴラスイッチミニほか	つくってワクワク／ぴりっとQ
おかあさんといっしょ（再）	おかあさんといっしょ	英語であそぼ	英語であそぼ	英語であそぼ	英語であそぼ	英語であそぼ	**からだであそぼ**
						クインテット②	英語であそぼ
		ひとりでできるもん!	ひとりでできるもん!	ひとりでできるもん!	**ひとりでできるもん!ドキドキキッチン**	英語であそぼハーイ!エリック	
						ひとりでできるもん!ドキドキキッチン	ひとりでできるもん!どこでもキッチン
アニメ・はりもぐハーリー	アニメ・はじめ人間ゴン						
		アニメ・おじゃる丸	アニメ・おじゃる丸	アニメ・おじゃる丸	アニメ・おじゃる丸	**クインテット③**	てれび絵本
英語であそぼ	英語であそぼ					**にほんごであそぼ**	ピタゴラスイッチミニ
		ハッチポッチステーション	ハッチポッチステーション	ハッチポッチステーション	ハッチポッチステーション		にほんごであそぼ
						クインテット④	
アニメ・忍たま乱太郎	アニメ・忍たま乱太郎	アニメ・忍たま乱太郎	アニメ・忍たま乱太郎	アニメ・忍たま乱太郎	アニメ・忍たま乱太郎	アニメ・おじゃる丸	クインテット

＊17時から1分間クインテット①

注：網かけ太字部分は新番組を示す。

付表2-2 〈母と子のテレビタイム〉年表（2005～2019）

時間＼年	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
ゾーンタイトル	あつまれ!わんパーク					Eテレキッズ		
新番組	**えいごであそぼ**	**味楽る! ミミカ**		**シャキーン!**	**みいつけた!／クッキンアイドルアイ! マイ! まいん!**		**フックブックロー Eテレ0655**	
6							**フックブックロー**	フックブックロー
							クッキンアイドルアイ! マイ! まいん	クッキンアイドルアイ! マイ! まいん
							Eテレ0655	Eテレ0655
7			からだであそぼ	**シャキーン!**	シャキーン!	シャキーン!	シャキーン!	シャキーン!
	からだであそぼ	からだであそぼ	南の島の小さな飛行機パーディー	アニメ･ぜんまいざむらい	アニメ･ぜんまいざむらい	アニメ･はなかっぱ	アニメ･はなかっぱ	アニメ･はなかっぱ
	てれび絵本	ミニアニメ	てれび絵本	クインテットブチ	クインテット	にほんごであそぼ	ピタゴラスイッチミニ	ピタゴラスイッチミニ
		てれび絵本		からだであそぼ			にほんごであそぼ	にほんごであそぼ
	ひとりでできるもん!どこでもキッチン		えいごであそぼ		あさだ! からだ	ミニアニメ		
		えいごであそぼ		ミニアニメ	ミニアニメ	みいつけた!	ミニアニメ	ミニアニメ
	ミニアニメ		アニメぜんまいざむらい	てれび絵本	てれび絵本		みいつけた!	みいつけた!
	えいごであそぼ	アニメ･ぜんまいざむらい	クインテット	えいごであそぼ	えいごであそぼ			
		クインテットブチ				ブチブチ･アニメ		
8	にほんごであそぼ	にほんごであそぼ	にほんごであそぼ	にほんごであそぼ	にほんごであそぼ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ
	ピタゴラスイッチミニ	ピタゴラスイッチミニ	ピタゴラスイッチミニ	ピタゴラスイッチミニ	ピタゴラスイッチミニ			
	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!			
	ブチブチ･アニメ	ブチブチ･アニメ	ブチブチ･アニメ	ブチブチ･アニメ	ブチブチ･アニメ	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!
	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	ピタゴラスイッチミニ	ブチブチ･アニメ	ブチブチ･アニメ
						えいごであそぼ	えいごであそぼ	えいごであそぼ
						てれび絵本	てれび絵本	てれび絵本
15							まいにちスクスク	まいにちスクスク
							はろ～! あにまる	ニャンちゅうミニほか
								ブチブチ･アニメ
							ピタゴラスイッチ, デザインあ　ほか（幼保）	ピタゴラスイッチ, デザインあ　ほか（幼保）
16	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	ブチブチ･アニメ	みんなのうた
							えいごであそぼ	えいごであそぼ
	ブチブチ･アニメ	ブチブチ･アニメ	ブチブチ･アニメ	ブチブチ･アニメ	ブチブチ･アニメ	ブチブチ･アニメ	つくってワクワク	つくってワクワク
	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!
	えいごであそぼ	つくってワクワク／わたしのきもちミニ	つくってワクワク／わたしのきもちミニ	つくってワクワク／わたしのきもちミニ	つくってワクワク／わたしのきもちミニ	つくってワクワク	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ
	つくってワクワクほか	にほんごであそぼ	にほんごであそぼ	にほんごであそぼ	**みいつけた!**	みいつけた!		
17	からだであそぼ	ミニアニメ	からだであそぼ	からだであそぼ	にほんごであそぼ	にほんごであそぼ	みいつけた!	みいつけた!
		えいごであそぼ		ミニアニメ				
	てれび絵本	からだであそぼ	えいごであそぼ	えいごであそぼ	えいごであそぼ	えいごであそぼ	にほんごであそぼ	にほんごであそぼ
	ミニアニメ							
	ひとりでできるもん! どこでもキッチン			ピタゴラスイッチミニ	ピタゴラスイッチミニ	ピタゴラスイッチミニ	ピタゴラスイッチミニ	ピタゴラスイッチミニ
	ピタゴラスイッチミニ	クインテット	ピタゴラスイッチミニ	アニメ･ぜんまいざむらい	アニメ･ぜんまいざむらい	アニメ･はなかっぱ	アニメ･はなかっぱ	アニメ･はなかっぱ
			アニメ･ぜんまいざむらい					
	にほんごであそぼ	アニメ･ぜんまいざむらい	味楽る!ミミカ	味楽る!ミミカ	**クッキンアイドルアイ! マイ! まいん!**	クッキンアイドルアイ! マイ! まいん!	クッキンアイドルアイ! マイ! まいん!	クッキンアイドルアイ! マイ! まいん!
		ピタゴラスイッチミニ						
	クインテット	アニメ･おじゃる丸	クインテット	クインテット	クインテット	クインテット	**フックブックロー**	フックブックロー
18		**味楽る! ミミカ**						

2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
すすめ! キッチン戦隊クックルン		**ミミクリーズ ゴー!ゴー!キッチン戦隊クックルン**	**コレナンデ商会**	**えいごであそぼ with Orton**		
ビタゴラスイッチミニ てれび絵本	にほんごであそぼ	みんなのうた ミニアニメ	みんなのうた ミニアニメ	にほんごであそぼ	にほんごであそぼ	にほんごであそぼ
すすめ! キッチン戦隊クックルン	すすめ! キッチン戦隊クックルン	にほんごであそぼ	にほんごであそぼ	**えいごであそぼ with Orton**	えいごであそぼ with Orton	えいごであそぼ with Orton
Eテレ0655	Eテレ0655	Eテレ0655	Eテレ0655	Eテレ0655	Eテレ0655	Eテレ0656
シャキーン!	シャキーン!	シャキーン!	シャキーン!	シャキーン!	シャキーン!	シャキーン!
アニメ・はなかっぱ	アニメ・はなかっぱ	アニメ・はなかっぱ	アニメ・はなかっぱ	アニメ・はなかっぱ	アニメ・はなかっぱ	アニメ・はなかっぱ
フックブックロー	デザインあ5分版	デザインあ5分版	デザインあ5分版	デザインあ5分版	デザインあ5分版	デザインあ5分版
	ビタゴラスイッチミニ	ビタゴラスイッチミニ	ビタゴラスイッチミニ	ビタゴラスイッチミニ	ビタゴラスイッチミニ	ビタゴラスイッチミニ
えいごであそぼ	フックブックロー	フックブックロー	**コレナンデ商会**	コレナンデ商会	コレナンデ商会	コレナンデ商会
みいつけた!	みいつけた!	みいつけた!	みいつけた!	みいつけた!	みいつけた!	みいつけた!
おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ
いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!
にほんごであそぼ	えいごであそぼ	えいごであそぼ	えいごであそぼ	オトッペ	オトッペ	オトッペ
				プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ
プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ	てれび絵本	てれび絵本	てれび絵本
ミニアニメ	てれび絵本	てれび絵本	てれび絵本	みんなのうた	みんなのうた	みんなのうた
プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ	プチプチ・アニメ
ビタゴラスイッチ、デザインあ　ほか(幼保)	ビタゴラスイッチ、デザインあ　ほか(幼保)	しぜんとあそぼ、ノージーのひらめき工房ほか(幼保)	しぜんとあそぼ、ノージーのひらめき工房ほか(幼保)	ビタゴラスイッチ、しぜんとあそぼ、ノージーのひらめき工房(幼保)	ビタゴラスイッチ、しぜんとあそぼ、ノージーのひらめき工房(幼保)	ビタゴラスイッチ、しぜんとあそぼ、ノージーのひらめき工房(幼保)
みんなのうた	みんなのうた	みんなのうた	みんなのうた	みんなのうた	みんなのうた	みんなのうた
えいごであそぼ	えいごであそぼ	えいごであそぼ	えいごであそぼ	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!
ニャンちゅうワールド放送局ほか	ニャンちゅうワールド放送局ほか	いないいないばあっ!	いないいないばあっ!			
いないいないばあっ!	いないいないばあっ!			おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ
おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	おかあさんといっしょ	みいつけた!	みいつけた!	みいつけた!
みいつけた!	みいつけた!	みいつけた!	みいつけた!	にほんごであそぼ	にほんごであそぼ	にほんごであそぼ
にほんごであそぼ	にほんごであそぼ	にほんごであそぼ	にほんごであそぼ	**えいごであそぼwith Orton**	えいごであそぼ with Orton	えいごであそぼ with Orton
		ミニアニメ	ミニアニメ	ミニアニメ	ミニアニメ	ミニアニメ
ビタゴラスイッチミニ	ミニアニメ	アニメ・はなかっぱ	アニメ・はなかっぱ	アニメ・はなかっぱ	アニメ・はなかっぱ	アニメ・はなかっぱ
アニメ・はなかっぱ	アニメ・はなかっぱ	**ミミクリーズ** ほか	ミミクリーズ ほか	ミミクリーズ ほか	ミミクリーズ ほか	ミミクリーズ ほか
すすめ! キッチン戦隊クックルン	すすめ! キッチン戦隊クックルン	**ゴー! ゴー! キッチン戦隊クックルン**	ゴー! ゴー! キッチン戦隊クックルン	ゴー! ゴー! キッチン戦隊クックルン	ゴー! ゴー! キッチン戦隊クックルン	ゴー! ゴー! キッチン戦隊クックルン
フックブックロー	フックブックロー	ニャンちゅうワールド放送局ミニ	ニャンちゅうワールド放送局ミニ	オトッペ	オトッペ	オトッペ

注：網かけ太字部分は新番組を示す。

おわびと訂正

219 ページの注 65 に誤りがありました。正しくは下記のとおりです。

〈訂正箇所〉3 行目（誤）パペットショー「リッチポップステーション」
→（正）「パペットショー ハッチポッチステーション」
8 行目（誤）2003 ～ 2006 年には，総合テレビの深夜に
→（正）2003 ～ 2005 年には，教育テレビの深夜に

訂正するとともに，お詫び申し上げます。